SAKU 佐久考古通信
佐久考古学会
ARCHAEOLOGICAL
2005.3.1. No.91
JOURNAL

★ 目 次 ★

シリーズ　世界の遺跡・日本の遺跡16　茶臼山遺跡　―長野県―　……1
考古逸品　三　寅　剣……藤森英二……2
佐久地方の阿玉台式土器について……井出浩正……4
平成16年度埋蔵文化財パトロール報告……埋蔵文化財保護委員……8
新事務局長　あいさつ……桜井秀雄……10
新刊紹介　『黒曜石　３万年の旅』堤 隆著……10
水野正好先生講演会　『三寅剣と金銀象嵌刀剣の世界』開催される　……事 務 局……10
きっちりした仕事とお人柄　―由井明さんを憶う―……島田恵子……11
新入会員紹介……12
訃報　由井茂也さんご逝去……事 務 局……12

## 世界の遺跡・日本の遺跡16

# 茶臼山遺跡

―長野県―

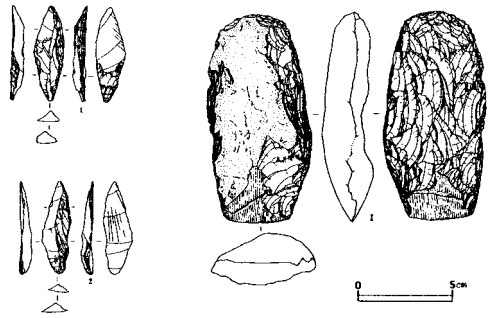
昭和24年、相沢忠洋氏の発見と明治大学による岩宿遺跡の調査により、日本での旧石器時代の存否論争は新たな局面を向かえようとしていた。

昭和27年の秋、諏訪考古学研究所所長で本屋を営む藤森栄一のもとに、当時高校生だった松沢亜生氏が、県営住宅の造成工事現場の赤土中から見つけたという黒曜石の石器を持ち込んだ。場所は藤森の住む家のすぐ上、諏訪湖を見下ろす手長丘丘陵の独立丘の一つである。これが旧石器であるとする松沢氏に藤森は否定的であったが、この石器を地元の先輩である明治大学の戸沢充則氏に見てもらうため松沢氏は上京する。その後戸沢氏を中心に諏訪考古学研究所による、工事の間をぬっての調査が始まった。途中、戸沢氏は岩宿の類例を渇望していた明治大学の芹沢長介氏（当時講師）に連絡を取り、明治大学考古学研究室の協力を得ての発掘調査となる。出土した石器は695点を数え、その大部分が背後に原産地を控えた黒曜石製である。しかし蛇紋岩製で刃部を磨いた局部磨製石斧の存在は、その後論争の種となった。また２基の礫群も確認されている。

こうして茶臼山遺跡は、長野県下ではもちろん、岩宿以降関東地方以外ではじめて旧石器遺跡として認知され、学史上も大変意義深い遺跡となった。

現在遺跡には集合住宅が立ち並ぶが、説明板が設置されており、眼下には諏訪湖が見下ろせる。

**茶臼山遺跡から見下ろした諏訪盆地。**



**出土した石器。局部磨製石斧を含む。**
（図は『諏訪市史』上巻より・諏訪市教育委員会提供）

考古逸品

# 三　寅　剣

小海町松原の民家に伝わっていた金銀の象嵌が施された剣。全体に研ぎべりが激しいが、四天王、北斗七星を含む星座、梵字が象嵌され、棟には「三寅剣」とはっきり刻まれている。これらは仏教や道教の思想の現れで、邪気を祓う護身の剣と考えられている。剣名の由来は寅の年、寅の月、寅の日につくられたからとされる。

象嵌された文字や文様、剣の姿から七世紀後半の可能性が高いとされ、金と銀両方の象嵌、銘の刻まれた点などは極めて珍しく、国内でも第一級の資料である。

そもそもこの剣は、小海町松原の畠山家に伝えられており、大正13年に「奈良時代刀子」と鑑定され、昭和13年には、国宝・重要美術品等調査委員の香取秀真氏がこれを見出している。ところが香取氏の死去や太平洋戦争の混乱で世間からは忘れ去られていた。

しかし平成５年、南佐久郡誌考古編の指導に来ていた奈良大学の水野正好氏によって再び取り上げられ、日本でもまれに見る見事な象嵌剣であることが認識される。

この剣がなぜ松原の畠山家に伝わっていたのか、いくつかの説はあるが、依然謎である。

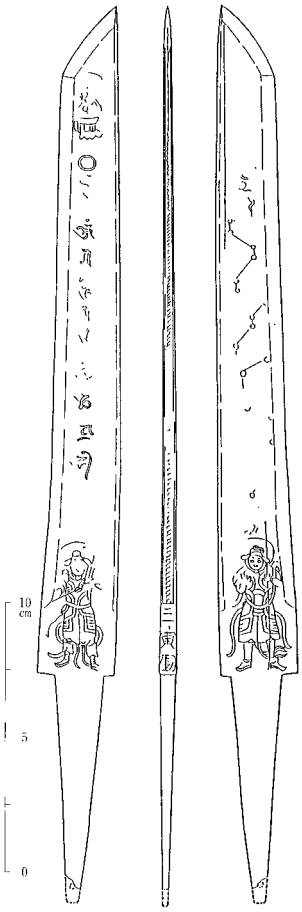
平成10年、小海町の有形文化財に指定されている。

## Data

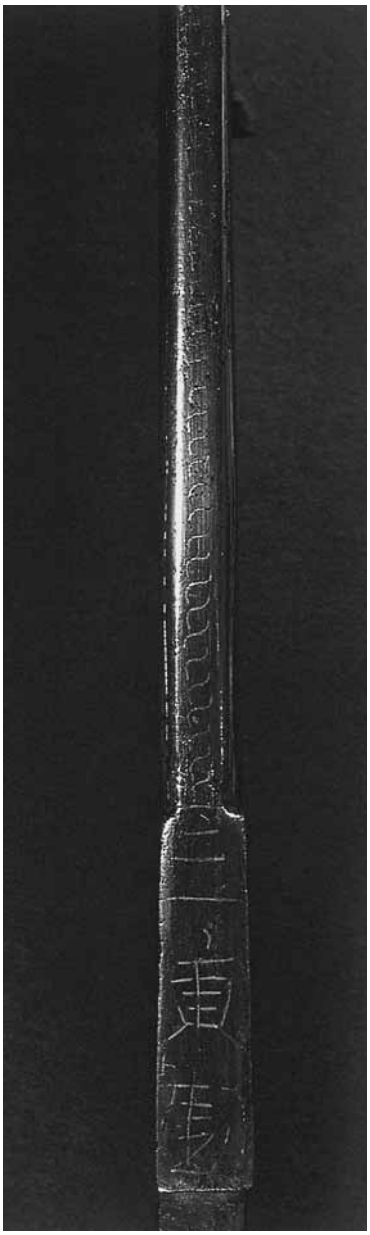
### 三　寅　剣

- 時　代：七世紀後半
- 所在地：南佐久郡小海町松原
- 刃渡り：25.4㎝
- 機　能：邪気祓い？
- 特　徴：金銀の象嵌のある鉄製の小刀
- 所　蔵：畠山理介氏

藤森英二




図は『南佐久郡誌』考古編より



（写真提供：小海町教育委員会）

# 佐久地方の阿玉台式土器について

井出　浩正

## はじめに

記録的な猛暑であった昨年の夏、地元佐久市へ帰省の際に、筆者は数日間にわたり佐久地方の阿玉台式土器を拝見させて頂く機会に恵まれた。近年、佐久地方を含む東信地方は御代田町の川原田遺跡や佐久市寄山遺跡など縄文時代中期中葉の大規模な遺跡の発掘調査とその成果が発表され、「焼町式土器」を中心に千曲川上流域における当該期の様相が急速に解明されてきている。2004年刊行の『国立歴史民俗博物館研究報告』中には「東信・北関東地方の中期中葉土器群の編年的・年代的位置付け」という特集が組まれており、東信一帯から出土する「焼町式土器」も汎関東的な編年的位置付けがなされている。縄文時代中期中葉は在地・非在地土器が遺跡内で共伴することが多々あり、当地域も例外ではない。そのような現象の一側面として、今回は佐久地方で出土した縄文時代中期阿玉台式土器について取り上げてみたい（第１図）。

## 1．阿玉台式土器研究史の概要

阿玉台式土器はその全期を総括した場合、縄文時代中期前半期において関東地方東部から北関東をその分布の中心としつつ、関東地方から中部地方にかけて広く分布する土器といえる。阿玉台式土器の研究史は古く、鳥居龍蔵の厚手式土器に端を発し、明治12年における飯島魁、佐々木忠次郎氏らによる茨城県陸平貝塚、同27年の下村三四吉、八木奘三郎氏らの千葉県阿玉台貝塚の発掘調査を経て、関東地方の中期厚手式土器として注目される。その後、山内清男氏の下総上本郷貝塚の発掘調査報告上においてはじめて縄文時代中期に勝坂式土器と並立されて以降、勝坂式土器とともに関東地方における縄文時代中期を代表する土器型式として広く認識されることとなったのである。

1950年代～1980年代にかけて西村正衛氏は利根川下流域の先史文化の解明をすべく、千葉県域の利根川下流域において綿密な発掘調査を遂行していった。それらのうち縄文時代中期に関連するものは、1951年、1954年の白井雷貝塚、1969年の木之内明神貝塚、1970年の阿玉台貝塚、向油田貝塚、1982年の村田貝塚などを中心とし、1972年の「阿玉台式土器編年的研究の概要」や1984年の「阿玉台式土器の編年」にその成果を発表した。西村氏はこれら一連の貝塚出土土器を層位的に取り上げ、土器の施文要素の変遷をもとに阿玉台式土器をⅠａ、Ⅰｂ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ類と分類し、1974年の佐藤達夫氏の論考の後、後者論文中においてこれらを型式として設定している（第１表）。西村氏の編年は層位資料を用い、土器の文様要素によって明瞭に型式細分を可能としたことにより、平易な分類基準もあいまってその後の阿玉台式土器研究の根幹となり、現在もその大綱は崩れていないといえる。

ただし課題がいくつか存在することも確かである。一つは阿玉台式土器の成立に関する問題である。阿玉台式土器を五領ヶ台式土器の流れとするか、関東地方東部の八辺式土器のような独自の在地の土器からの流れとするか、さらには東北の大木６式からの流れとするかといった考えなどが提示されている。二つめに、阿玉台Ⅱ式以降、特にⅢ～Ⅳ式について型式内容と時間幅、分布範囲について疑問視する声が挙がっている。特にⅣ式期において後続する加曽利Ｅ式との共伴事例が増加している。西村氏は層位と文様要素から編年観を導き出したことは既述の通りだが、Ⅱ式以降について明瞭な層位による区分が明示されず、特にⅢ式とⅣ式の時間差について当時から西村氏は苦慮されていたようである。

このように、西村編年にはいくつかの課題が内包されているが、氏の阿玉台式土器の編年は、単に中期前半の関東地方東部の土器様相の解明のみならず、併行する勝坂式土器との関係やその編年研究、型式内容に関する重要なツールとして機能してきたのである。

## 2．佐久地方出土の阿玉台式土器

今回題材とする佐久地方とは北佐久郡、佐久市、南佐久郡を含む一帯を対象とする。対象とする遺跡は御代田町川原田遺跡、佐久市寄山遺跡群、望月町上吹上

| 土器型式／属性 | 彫刻文 | 角押文 | 沈線文 | 製作痕（輪積み痕） | ヒダ状圧痕文 | 刻目文 | 爪形文 | 縄文 | 無文 | 雲母 | 砂粒 | 石英粒 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 雷八類（阿玉台直前） | ○ | △ | ○ | ○ | | | | ○ | ○ | △ | ◎ | |
| Ⅰａ式 | ○ | **○（単列）** | ○ | ○ | | | | × | ○ | ○ | ◎ | |
| Ⅰｂ式 | | ○（単独化） | ○ | ○ | ○ | ○ | | | ○ | ○ | ◎ | |
| Ⅱ　式 | | **○（複列化）** | ○ | | | ○ | ○ | ○（細い条） | ○ | ◎ | | ○ |
| Ⅲ　式 | | ○ | ○ | | | | ○ | ○ | ○ | ◎ | | ◎ |
| Ⅳ　式 | | | ○ | | | | | ◎ | △ | ○ | | ◎ |

**第1表　阿玉台式土器の主な属性**（西村1972年より筆者作成）

※ゴシック部分は型式区分の根拠となったもの

遺跡、同後沖遺跡、北相木村坂北遺跡である。坂上遺跡についてはすでに本誌74、76号において藤森英二氏によって詳述されているので参照されたい。

掲載資料については、①出土場所②器形③法量④口縁部形態および文様観察⑤頸部形態および文様観察⑥胴部形態および文様観察⑦細別型式の順に述べていく。③については現存する最大高・口縁部最大幅・胴部最大幅の順に㎝表記とし、実見の際筆者が計測したもの以外については報告書の記載や実測図より測定した。

**川原田遺跡出土土器**（第２図－１）

①Ｊ－50号住居址（炉体土器）②深鉢③20.8、32.0、18.0④小波状の小突起を有し、そこから垂下する隆線によって口縁部を４区分する。区画内は隆線と複列の角押文によって楕円形区画が表出されている。⑤上方に平行沈線文による弧状のモチーフを有し、複列結節沈線文と横走する隆線によって胴部と区画する。⑥胴部区画の隆線から伸びた４単位の懸垂文を持つと考えられる。隆線上には押圧状の刻目が施され、懸垂文内は頚部と同様の平行沈線文による曲線・直線状のモチーフが描かれる。⑦阿玉台Ⅱ式と考えられる。

**川原田遺跡出土土器**（第２図－２）

①Ｊ－50号住居址②深鉢③12.8、17.2、12.8④隆線の貼り付けによる楕円状の区画文、区画内を平行沈線がめぐり、爪形状の角押文が縦位に施文される。⑤頚部区画なし。⑥口縁部と同様の平行沈線が曲線・直線状に施される。⑦阿玉台Ⅱ式

**川原田遺跡出土土器**（第２図－３）

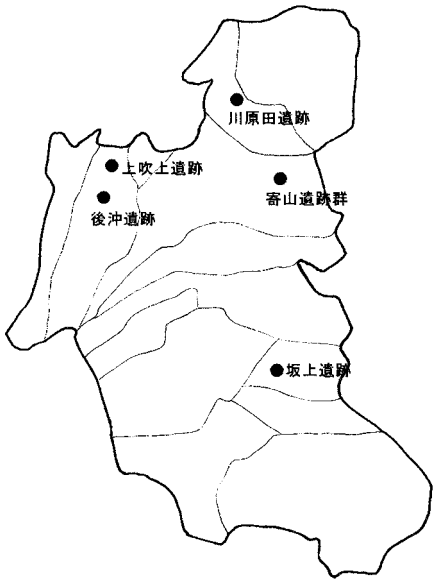
①Ｊ－24号住居址②深鉢③13.2、－、14.8④－⑤－⑥波状の隆線（おそらく懸垂文）上には刻目を有し、隆線脇には複列の平行沈線文が沿う。また同状の平行沈線文による波状・直線モチーフが施され、刻目状の爪形文が４列めぐる。⑦阿玉台Ⅱ式

**川原田遺跡出土土器**（第２図－４）

①Ｊ－24号住居址②深鉢③23.6、－、22.4④－⑤－⑥楕円・ｗ字状の隆線によって胴部文様帯を区分する。胴部は４本の沈線文（一部平行沈線）が隆線脇および単独に施されモチーフを表出している。⑦阿玉台Ⅱ式。類例に東京都神谷原遺跡ＳＢ66号住居出土がある。

**川原田遺跡出土土器**（第２図－５）

①Ｊ－20号住居址（炉体土器）②深鉢③23.6、32.0、18.4④隆線による楕円形区画文を有し、隆線上には爪形文が施される。また単独で爪形文が２列めぐる。⑤無文⑥横走する隆線によって胴部文様帯が区画され、そこからＹ字状の懸垂文が垂下、一部は波状化。隆線上は口縁部と同様の爪形文が施され、また単独に爪形文が２列段違いに施文されている。⑦阿玉台Ⅲ式。類例に栃木県槻沢遺跡、千葉県高根木戸遺跡、子和清水貝塚、埼玉県下加遺跡など。




**第１図　佐久地方における阿玉台式土器を出土する主な遺跡**
**（ここでは北佐久郡・佐久市・南佐久郡をさす）**

**川原田遺跡出土土器**（第２図－６）

①Ｊ－51号住居址②深鉢③17.2、12.4、14.4④断面三角形の隆線による口縁部区画の後、隆線上に刻目状の爪形文を施す。区画内は波状の沈線文が描かれている。⑤刻目状の爪形文が口縁部区画帯脇を沿う。⑥無文⑦阿玉台Ⅲ式と思われる。

**寄山遺跡出土土器**（第２図－７）

①ＳＹＹ２包含層、②深鉢、③13.2、25.0、12.0④非対称の小波状を呈し、スリット部分から波状の隆線が下る。隆線による楕円状の区画を有し、隆線内側に単列の角押文が沿う。⑤製作痕による段差を有する。⑥おそらく無文。⑦阿玉台Ⅰａ式

**寄山遺跡出土土器**（第２図－８）

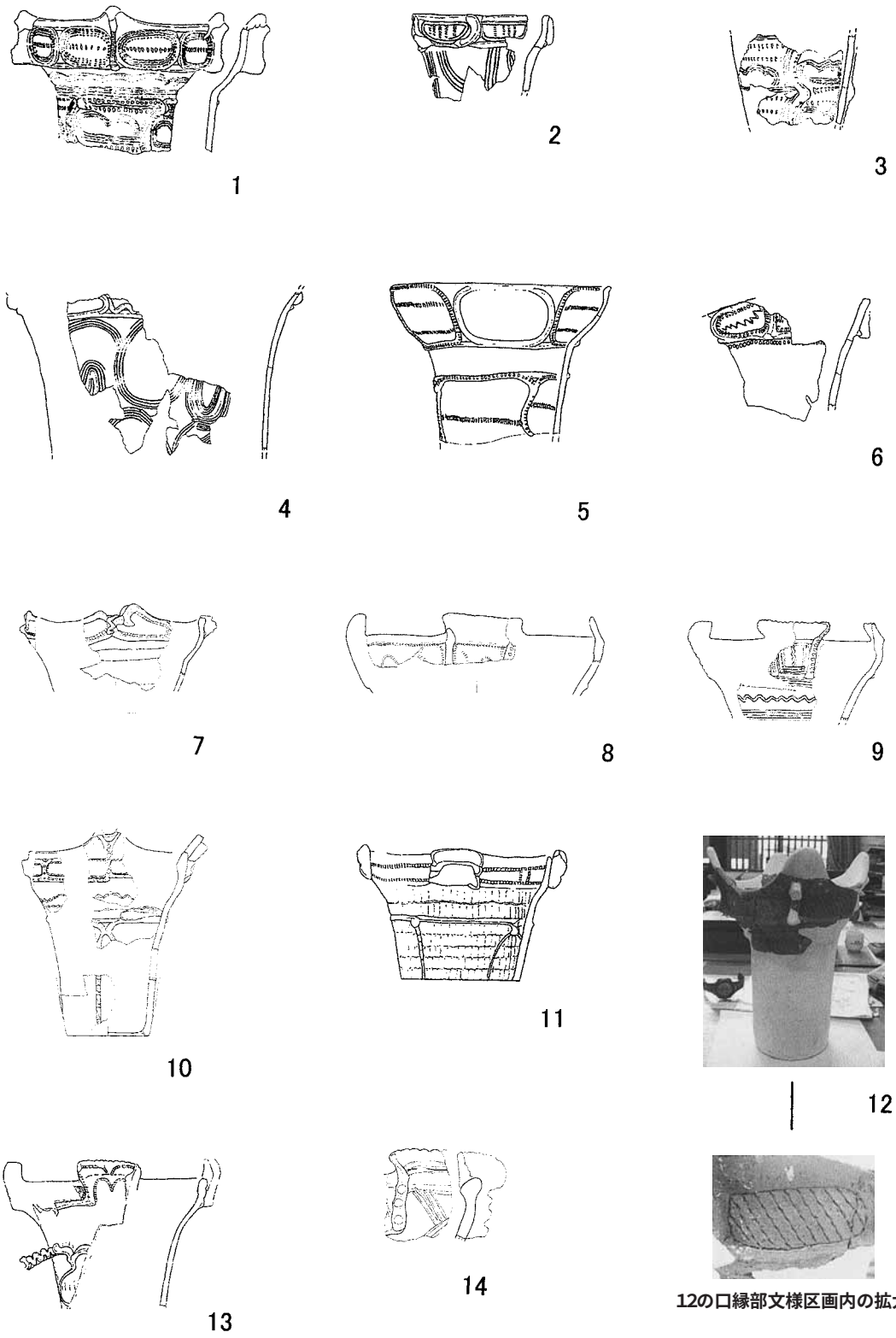
①ＳＹＹ３　包含層②深鉢③7.2、35.0、－④４単位の扇状突起を有する。突起上端はわずかに刻みを有し、区画内および隆線脇に単列の角押文が沿うが、一部は曲線状に単独施文されている。突起の一部に刻目状の押圧を有する。⑤－⑥－⑦阿玉台Ⅰｂ式

**寄山遺跡出土土器**（第２図－９）

①ＳＹＹ３　包含層②深鉢③14.8、26.6、12.0④４単位の扇状突起を有する。突起上端は小波状を呈し、突起内部には平行沈線による施文がなされている。突起には刻目状の押圧を有する。⑤４本以上の平行沈線によって口縁部・胴部文様帯と区分される。区画内には波状の平平行沈線がめぐる。⑥－⑦阿玉台Ⅰｂ～Ⅱ式

**勝負沢遺跡出土土器**（第２図－10）

①ＳＹＳ５　H22住居址②深鉢③30.4、23.8、16.8




（縮尺：１～11・13はＳ＝1：8、12は筆者撮影のため不明、14はＳ＝1：6）

**第２図　佐久地方の主な阿玉台式土器**

④スリットをもつ口縁部頂からＹ字
状の隆線が下り口縁部区画の一部をなす。隆線内側の一部には単列の角押文が沿うとともに、区画内の一部に爪形状の圧痕がめぐる。隆線上には刻目～爪形状の押圧が施されている。⑤不規則な波状沈線文（角押文の沈線化）⑥胴部文様区画帯からのびるＹ字状懸垂文だが、途中二又に分岐し逆Ｕ字状を呈する。隆線上に引きずり気味の押圧を施す。⑦阿玉台Ｉｂ式と考えておきたい。

**上吹上遺跡出土土器**（第２図－11）

①第６号住居址（炉体土器）②深鉢③19.2、31.2、19.2④４単位の扇状突起を有する。図中突起には、耳たぶ状のくびれ以外内外とも目立った文様をもたないが、別の突起上端に棒状工具による連続押圧を有し、単列の角押文が施されている。口縁部は単列の角押文によって口縁部区画とし、その一部には角押文が縦走する。⑤ヒダ状圧痕文を２段もち、段境を沿うように波状の沈線文がめぐる。⑥頚部同様にヒダ状圧痕文をもち、隆線による胴部区画から直線状や逆Ｕ字状の懸垂文が垂下する。⑦阿玉台Ｉｂ式

**後沖遺跡出土土器**（第２図－12）

①第26号住居址②深鉢③一、一、一④４単位の波状口縁を有する。隆線と角押文によって８単位の楕円状区画がなされる。区画内は先端が鋭利な角押文を連続刺突状に斜位に施し、区画内を充填する。⑤無文⑥断面三角形の扁平な隆線と、その上方に幅狭で粘土を捻り出すようにして表出した楕円状区画によって胴部文様帯を区分する。⑦阿玉台Ｉｂ式

**坂上遺跡出土土器**（第２図－13）

①包含層②深鉢③22.0、12.4、6.4④扇状突起を有する。突起上端は小波状の押圧が認められ、上面には単列の角押文や刻みが施される。突起内および口縁部区画内には単列の角押文が隆線脇や単独に施文される。⑤無文⑥Ｙ字状懸垂文が一部曲線状を呈し、懸垂文間には波状の隆線が貼付されている。⑦阿玉台Ｉｂ式

**坂上遺跡出土土器**（第２図－14）

①包含層②深鉢③10.5（突起）、7.2、一④扇状突起を有する。突起上端は棒状工具による連続押圧が施され、上面には押圧や平行沈線を数列有する。突起内も同様の平行沈線によって斜めに数列施文されているものの、施文圧が弱いためか歪んだ形状をなしている。

## 3．佐久地方出土の阿玉台式土器からわかること

ここで今回扱った資料について、相互の関係や他地域との関連性について少し考えてみたい。当地域の阿玉台式土器は阿玉台Ⅳ式を除きＩａ式からⅢ式までおおむね出土している。従来からＩｂ式は関東地方全域に拡散し同型式内で最も分布域が拡大する時期であるといえるが、佐久地方もＩｂ式についてはそれと同様の傾向にあり、拡散現象の一様相と捉えることができる。さらに７のようなＩａ式が寄山遺跡から出土したことは、阿玉台式土器の拡散がＩｂ式のみの特徴ではなく、Ｉａ式期からその胎動が始まっていたとも考えられ、Ｉａ式期の分布を正確に把握してゆく必要があると思われる。

しかしながら、佐久地方の阿玉台式土器の出土様相が利根川下流域一帯を含む関東地方東部と歩を一にしたかについては、型式内容の細かなチェックを行なう必要があり、出土のみで即断することはできない。９や14はおそらく半截竹管のハラをあてて施文されており、Ｉｂ式期の文様要素から逸脱している。また11は角押文で施文されるはずの窓枠状の区画内が無文であり、また隆起線ではなく角押文によって口縁部区画がなされているなど本来のＩｂ式とは変異がみられる。これらは文様要素の逸脱や土着の文様要素への入れ替わり、変異といった情報の変化がその要因と考えている。ただし、筆者自身は器形や本来なされるべき施文内容推測してＩｂ式の範疇に収まると考えたが、これらをⅡ式古段階とする研究者もおり今後さらに資料を集めて検討してゆきたいと思う。

阿玉台式土器を含め、いわゆる異系統土器の搬入・模倣などの問題は中核地域との比較とともにその外縁部どうしの比較が重要となる。筆者自身は、特に阿玉台式土器の場合、中核となる利根川下流域を含む関東地方東部とのダイレクトな関係というよりは、むしろ外縁域を含む多地域との間接的な情報移入や交換のあり方を考えており、土器の搬入もそうした間接的な側面も重視している。

## 4．むすびにかえて

今回は佐久地方出土の阿玉台式土器についてみてきた。いうまでもなく佐久地方とは現在の大きな地形的・行政的なまとまりであり、これを縄文時代の社会ネットワークとしてくくるには大雑把である。本稿にさしあたっては藤森氏のご指摘のように特に東県境に面する群馬県域を一通り調べてはみたが、筆者の不勉強もあり類例に出会うことはできなかった。今後はこれら県境を挟んだ群馬県域や山梨県域とともに茅野・諏訪や北信方面に対象地域を伸ばし、より具体的な土器情報の伝達について検討を加えてゆきたいと考えている。

今回本誌の投稿を快諾し、坂上遺跡出土資料見学にご協力頂いた北相木村教育委員会の藤森英二氏、市町村合併の最中、ご多忙にもかかわらず上吹上、後沖遺跡の資料見学をお許し頂き解説を賜った望月町郷土資

料館の福島邦男氏、掛川喜四郎氏、佐久市教育委員会の小林眞寿氏、後沖遺跡出土の阿玉台式土器の存在についてご教授下さった長野県埋蔵文化財センターの寺内隆夫氏には大変お世話になりました。末筆ではありますが、記して感謝申し上げます。

**引用・参考文献**


西村正衛　1972年「阿玉台式土器編年的研究の概要　―利根川下流域を中心として―」『早稲田大学文学研究科紀要』（第18集）　早稲田大学大学院文学研究科

佐藤達夫　1974年「縄紋式土器」『日本考古学の現状と課題』

望月町教育委員会　1983年『後沖遺跡』（望月町文化財調査報告書　第11集）

西村正衛　1984年　『石器時代における利根川下流域の研究　―貝塚を中心として―』早稲田大学出版部

望月町教育委員会　1990年『上吹上遺跡』（望月町文化財調査報告書第18集）

佐久市教育委員会　1995年『中条峯遺跡・寄山遺跡群』（佐久市埋蔵文化財調査報告書第42集）

御代田市教育委員会　1997年　『川原田遺跡　―縄文編―』

藤森英二　1999年「坂上遺跡出土縄文中期中葉の土器」『佐久考古通信』（№74）
佐久考古学会

藤森英二　1999年「２つの阿玉台式土器　―坂上遺跡の整理作業から―」『佐久考古通信』（№76）　佐久考古学会

北相木村教育委員会　2000年『坂上遺跡』

杉山晋作・西本豊弘編　2004年『国立歴史民俗博物館研究報告』（第120集）　歴史民俗博物館振興会


# 平成16年度　埋蔵文化財パトロール報告


埋蔵文化財保護委員


『北佐久・南佐久を問わず地元在住の会員に声をかけ、みんなで地域の遺跡を巡ろう。』という目標のもと出発した佐久考古学会の埋蔵文化財パトロールも今回で３回目を迎えた。第１回目に南牧・川上村、第２回目に臼田町を巡り、地域の実情を少なからず長野県教育委員会に報告してきた。今回は春の総会時の計画通り八千穂村・佐久町を巡るべく去る11月28日の日曜日に実施された。今回八千穂村と佐久町が選ばれたのは今後この２地域が『中部横断道』の建設にさいして否応なく大規模な開発が行われていく地域であるという事と八千穂村と佐久町が合併予定であり広域の行政体として文化財保護に取り組んでいってもらうためである。

当日は八ヶ岳山麓が小雪舞うような寒い日であった。しかし、９時30分八千穂村役場前集合の約束に９時20分には八千穂村在住の佐々木・島田会員は既に集合し出発を待ちわびていた。今回は事務局長が事前に八千穂・佐久の遺跡地図を用意してくれており、道案内は八千穂在住五十うん年の佐々木会員、記録は島田会員と今までこれほど完璧な準備の整ったパトロールがあったであろうか。パトロールを始めて３回目にして地元在住の会員が２名も参加、且つ又、これほどの準備、保護委員としては感無量、涙・涙……の出発式であった。

まず、午前中は八千穂村を中心にパトロールが行われた。まず黒澤酒造を通りすぎ穂積地区にはいる。学史的にも有名な崎田原遺跡を巡る。遺跡の周辺は静かな農村風景が広がっていたが周辺の地形を考慮すると遺跡範囲はもう少しひろがるのではないだろうか。次に埋蔵文化財とは異なるが明治の秩父事件の史跡として『秩父困民党散華の地』の石碑が建つ場所を尋ねた。

**佐々木会員の談**　「周辺部の村落にはこの事件に遭遇した人々から話を聞いたという年輩者も多く存命である。新しい歴史かもしれないがこれも生きた大切な地域史だね。」

**参加者**　「へー・へイ・へイ」20へイ

次に千曲川を渡り松井・大石地区では中松井・東松井遺跡を回ったが、大規模な農地開発に驚いた。南牧村でのパトロールの折りも同様の光景をみたが、南佐久郡においてはこのような大規模な野菜の為の農地造成と遺跡保護は重要な問題である。

**佐々木会員の談**　「遺跡保護も大事であるが、世界的に見て21世紀は食糧問題と地球に優しい生活、このバランスが課題だね。」

**参加者**　「へー・へイ・へイ・へイ・へイ」50へイ

山麓の細い道を抜け畑地区に出る。近年、県埋蔵文化財センターで調査された馬込遺跡が眼前に広がる。広域農道建設と言うことであるが、丘陵が大きく開削され大形重機が何台も置かれていた。あたかも、その光景は今後起こるであろう『中部横断道』建設の予兆を示すようであった。パトロールは午前の最後佐口城跡に近づいた。城跡のふもとに広がる佐口の集落はひっそりと晩秋のたたずまいで、

**佐々木会員の談**　「佐口の地名は社口に繋がり、諏訪信仰の古い形態をジャグジ信仰といい、現在も屋敷神様を『社口神』として祀っている家も少なからずあるんだよ。」

①「秩父困民党散華の地」の石碑
　周辺の岩山には当時の鉄砲の弾痕が残っているとされ戦闘の激しさを物語っている。

②「黒岩酒造の遠景」
　明治以降、数多くの偉人を輩出し南佐久発展に尽力した黒澤家。これらの甍は「中込学校」とともに佐久の貴重な近代化遺産ではないだろうか。

**参加者**　「へー・へイ・へイ・へイ・へイ・へイ・へイ・へイ・へイ・へイ・へイ」100へイ

午後は佐久町へと入る。まず日本一大きな『北沢川の大石棒』を見学する予定で一行向かう。しかし道が分からず西小学校裏の畑にいた地元の方に石棒の所在を尋ねる。

**佐々木会員**　「この近くに日本一大きな石棒と呼ばれる大きな石で作られた石の柱みたいなものがある筈なんですが、場所を存じないですか。」

**地元の方**　「この近くにそんな物あるでやすかい？」

**佐々木会員**　「へー・へイ」10へイ

図録『佐久町の文化財』掲載の写真を頼りに車を走らせること３分、佐久町観光協会により建てられた綺麗な『北沢川の大石棒』の案内板をみつけ、やっと田んぼの畦に２メートル近い石棒を発見。参加者一同その威容さに感心する。その後、下原遺跡・海瀬城跡を巡り楯六郎館跡の標柱に辿り着いた時には既に日は西にだいぶ傾き寒さが一層増してきていた。花岡の狼煙台跡を横目に見ながら参加者一同帰路に就くこととする。

以上、第３回目の学会主催の埋蔵文化財パトロール報告ですが、現在周知の遺跡として八千穂村には53箇所、佐久町には58箇所の遺跡が登録されています。今回はそのほんの一部しか回れませんでしたが、巡っての感想としては全体として開発等の波にさらされず遺跡がよく保存されているという感想を持ちました。また、特に八千穂村では指定文化財等の標柱や案内板がよく整備されており、訪れた人への配慮が伺えました。ただ、先にも述べましたが、この２地域は今後大きな開発が行われる可能性があり、地元在住の会員とともに注意深く見守っていく必要があると考えます。

次回は千曲川を少し上って小海・南北相木近辺を考えております。案内が回りましたら地元在住の皆様よろしくお願いします。

③八千穂村松井地区周辺
　八ヶ岳から伸びる丘陵を大規模に削平・或いは谷を埋め立てての大規模な農地造成が行われている。これらは中松井遺跡の範囲外であるが、地形的には中松井遺跡と同様で、今後は遺跡範囲の見直しも必要と考えられる。

④「北沢川の大石棒」
　説明板もあり見学しやすいが、田んぼの中の畦であり、見学は水田が終わってからの時期が良いであろう。

# 新事務局長　あいさつ

桜井　秀雄

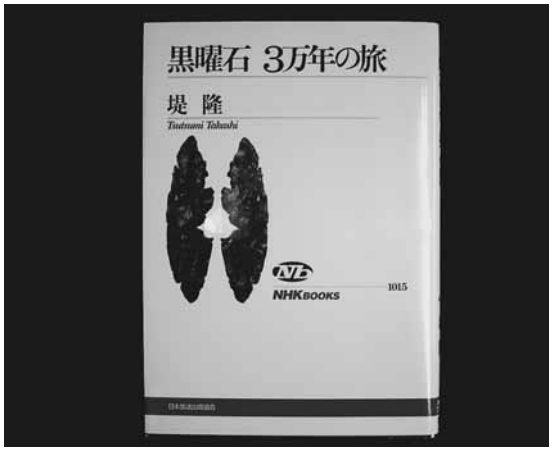
このたびの役員改選により、小山岳夫さんから事務局長の重責を引き継ぐことになりました。佐久考古学会は昭和45年の設立から、今年で35年目を迎えます。前号の特集「佐久の考古学を支えた人々」からは、考古学会を支えてこられた諸先輩方の熱いいぶきが感じられてきます。そして改めてその歴史の重さを痛感します。設立当時にはまだ５歳だった若輩者の私でありますが、この歴史ある佐久考古学会の良き伝統を踏まえ、さらによりよい学会になるように努力してまいります。

昨今はとかく忙しい世の中になってきていますので、会員の皆さんも考古学会にかけられる時間がどうしても減ってしまう状況にあるかもしれません。しかし私たちの考古学会です。研究活動に、保護活動に、そしてボランティア活動にと、佐久考古学会が果たす役割は大きくなってきています。また考古学に魅せられた者が集う学会として会員相互の親睦もより深めていきたいものです。佐久の地域に根ざした考古学会として、さらなる活動を進めていきましょう。会員の皆さんのご協力をいただきながら、微力ですが私もお役に立ちたいと思います。よろしくお願いいたします。

## 新刊紹介
## 『黒曜石　３万年の旅』堤隆著

旧石器時代から縄文時代まで、これまで黒曜石についての研究を続けてこられた堤隆会員が、その成果を分かり易く綴ったのが本書です。

南牧村矢出川遺跡の細石刃など堤会員の得意分野から、長野県内の黒曜石原産地についてはもちろん、北海道白滝はじめ、東京の神津島や南九州日東など、日本各地の黒曜石原産地へ、果ては海外にまで、その探求は続きます。さらに多面的な調査研究により、一読すれば、後期旧石器時代から弥生時代まで、黒曜石を求めた人々の様子が理解できる構成は、堤会員ならではのものです。ぜひご一読、いやご購入をおすすめします。（藤森）




日本放送出版協会　NHKブックス　税抜き920円

## 水野正好先生講演会
## 『三寅剣と金銀象嵌刀剣の世界』開催される

雪の降りしきる１月16日、本会と浅間縄文ミュージアムの共催により、奈良大学元学長水野正好先生による講演会が開催されました。水野先生の研究は時代や地域を越え実に多岐に及びますが、平成５年、南佐久郡誌の仕事に関わられた際、井出正義氏がたまたま話題にしたことから、小海町松原の畠山家に伝えられていた「三寅剣」について深い興味を持ち、その歴史的価値を見いだされました。講演では古代を中心とした刀剣の資料をもとに、これら象嵌剣にまつわる話を、先生の豊富な知識と巧みな話術で、分かりやすく伝えてくださいました。

またこれにあわせ、浅間縄文ミュージアムでは「佐久の古代“金銀財宝”展」が開かれていましたが、ここには「三寅剣」も展示されており、多くの方が興味深く見学されていました。

50名近い参加者が、水野先生のお話に聞き入った。

# きっちりした仕事とお人柄

## ― 由井明さんを憶う ―

島田　恵子

佐藤敏氏　　由井茂也氏　　島田　　由井明氏
（川上村居倉にて）

由井明さんが昨年８月16日に享年92歳で人生の幕を閉じられました。昭和45年に佐久考古学会が発足して以来の古い会員のお一人がこの世を去り、淋しい限りです。

大正元年９月17日に川上村御所平に生れ、10代の頃より馬場平遺跡で石器を採集して以来、考古学に興味をもち、20～30代の頃は由井茂也氏と共に、佐久町高野町の高見沢融作氏に誘われ、八千穂村～佐久町～臼田町方面にまで表面採集に訪れている。昭和20年代は「佐久史談会」が活発に活動していた時で、各地で耕作中に出土した考古資料も、佐久史談会に持ち込まれそれらの発表や議論がなされ、大いに啓発された。

初めて発掘調査に参加したのは42歳の秋であった。昭和28年11月２日に馬場平遺跡で、ローム層中より槍先型尖頭器が出土する様子を確認した時は深い感銘をうけた。この発掘を機に農閑期は柏垂遺跡、野辺山の矢出川遺跡にも足を延ばし表面採集に力を入れている。

三沢遺跡で安全祈願をする由井明氏

60歳代になると農業後継者を長男に譲ったため、時間的に余裕ができたので、10月～11月にかけて発掘調査に参加している。昭和48年臼田町の井上遺跡を皮切りに、佐久市の後沢遺跡、周防畑遺跡、北西の久保遺跡、軽井沢町の茂沢南石堂遺跡、佐久町では宮の本遺跡、後平遺跡、地元川上村では、川上村遺跡詳細分布調査、三沢遺跡などである。丁寧できれいに遺構を仕上げるので、常に感心して見とれたものである。

70歳後半からは、ご自身の体をいたわられ発掘調査には参加されないで、もっぱら採集した石器の註記・整理にあたられた。佐久考古学会の総会、研究会、忘年会には、由井茂也氏と一緒にジーゼルに乗り、途中小海から井出先生、羽黒下で島田、青沼で三石さんが同乗し、５人で参加した日々がなつかしい。

明氏は大の愛煙家で、体中に臭いがしみついていた。一本気で曲がったことが大嫌いであった。これは、先輩の皆さん全員に通じる尊きお人柄であるといえよう。

前列左より：島田、由井明、三石延雄、横山
後列左より：森泉定勝、大井今朝太、神津敦、佐藤敏

# 新入会員紹介

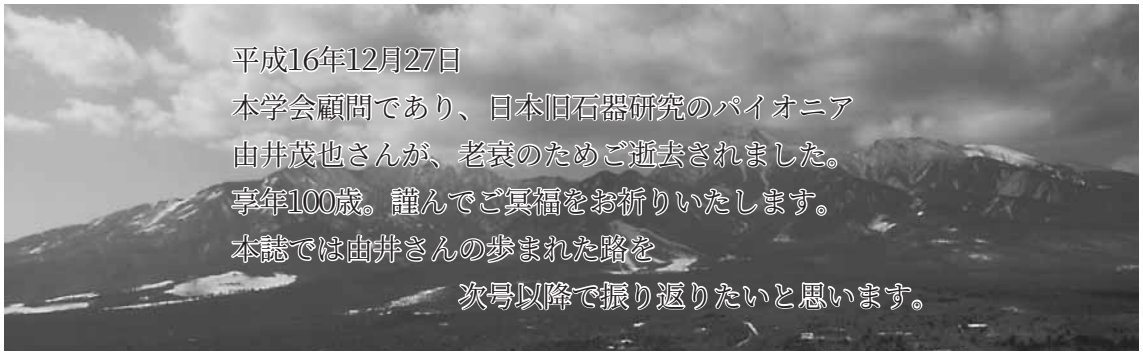
## ○井出　浩正○

私は佐久市の出身です。現在は大学院博士後期課程に在籍しています。そもそも考古学とは小学校６年生の時に出会いました。社会の歴史の時間に縄文時代について勉強したのをきっかけに興味を持ち始め、地元の友達と「探検団」を結成して土器や石器を拾い集めておりました。その後大学では考古学を専攻し、主に縄文時代中期について勉強してきました。現在は縄文時代中期阿玉台式土器について学んでおります。
大学時代から親元から離れて東京で暮らしはじめ、また研究フィールドを関東地方に置いたせいもあって、これまで故郷を題材にした勉強はおろそかになっていました。今後は故郷佐久市の歴史について、考古学や歴史を含め幅広く勉強をしていきたいと思っております。よろしくお願い致します。

## ○高橋　陽一○

はじめまして、高橋陽一と申します。このたび佐久考古学会に入会させていただきましたので、ご挨拶も兼ねて自身の紹介文を投稿させていただきました。
考古学に興味を持ち始めたのは小学生の頃からです。その頃から土器を拾いに行ったり、その関係の本を読んで研究者の真似事をしておりましたら、高校に上がる頃には、おぼろげながらも将来は考古学関係の仕事に就こうと考えるようになっていました。そこでまずは大学を目指すことにし、入学したのが立正大学です。大学では主に奈良・平安時代の祭具を専門にしておりましたが、専門にこだわらず色々な時代、色々な分野について教授を受け、見識を広げることに努めました。大学、大学院と計６年間、考古学を学び、今は小諸市役所で勤務しております。小諸市役所を選んだのは、郷土の文化財を調査・保存し、観光や生涯学習等の分野で活用する仕事をしたいと考えてのこと。一般事務職のため必ずしも関係部署に配属されるわけではありませんが、個人的でもいいから、生涯をかけて活動していきたいと考えております。

# 訃報　由井茂也さん　ご逝去




### ♪　編集後記　♪

浅間縄文ミュージアムの企画展で、ある佐久の俳人の句を知った。心にすっと入ってきた。2004年は、肉親も含めいくつもの死に接した。その中には若い命もあり、彼のことを思うと今でも本当に辛い。これからもっと、共に生きたかった。人は、幾万もの屍の上を生きる他ない。過去に生き、消えていった想いの延長に私たちはいる。そして、その過去を知るもの言わぬ遺物を研究する喜びを知った私は、それだけでも幸せだと思う。改めて、この句を口にする。
「鳥は飛ぶ　獣は走る　俺は静かに歩いてゆく」関口江畔
（藤森）

**佐久考古通信　№91**

発行所　佐久考古学会
〒384-0091 小諸市御影新田1945-6
桜井秀雄　方
郵便振替　00570-9-2842
☎ 0267 (22) 8536

発行者　藤沢平治
編集者　藤森英二
印刷所　ほおずき書籍㈱

佐久考古学会
シンボルマーク

SAKU 佐久考古通信
佐久考古学会
ARCHAEOLOGICAL
2005.7.3.　No.92
JOURNAL

★ 目　次 ★

世界の遺跡・日本の遺跡17　マチュピチュ遺跡　―ペルー―　……1
＜研究ノート＞
　中部地方北東部における沈線文土器群終末期の土器編年　―長野県内を中心として―……領塚　正浩……2
佐久平の弥生遺跡　―特に清水田遺跡表採の子持勾玉をめぐって―……土屋　長久……11
黒曜石は海原を越えて　―矢出川遺跡の神津島産黒曜石資料―……堤　隆……15
訃報　井上行雄さん、ご逝去……事　務　局……16
佐久考古学会　シリーズ講座　考古学が語る大昔の佐久……事　務　局……16
編　集　後　記……16

## 世界の遺跡・日本の遺跡17

# マチュピチュ遺跡

―ペルー―

空中都市　マチュピチュ

多くの謎に包まれたペルーのマチュピチュは尖った絶壁の山々がそびえるウルバンバ渓谷の山間、標高2,280mの頂上にある。遺跡は、文化、自然の両者の価値を兼ね備えた複合遺産として、1983年12月９日世界遺産に登録されている。

マチュピチュとは老いた峰を意味するらしいが、山裾からはその存在を確認できないことから“空中都市”とも呼ばれる。

この遺跡は、スペイン人から逃れるために、あるいは復讐の作戦を練るために、インカの人々が作った秘密都市だったともいわれている。しかし、マチュピチュの成立にまつわる多くの謎は、未だに解明されていない。

マチュピチュの総面積は５㎢、その約半分の斜面には段々畑が広がり、西の市街区は神殿や宮殿、居住区などに分かれ、周囲は城壁で固められている。16世紀半ば、インカの人々は高度な文明が栄えたマチュピチュを残し、さらに奥地へと消えてしまう。その後遺跡は、400年以上にわたって人の目に触れることがなく、草におおわれていた。

1911年、アメリカ人歴史学者でインディー・ジョーンズのような外見のすらりとした白人ハイラム・ビンガムが発見されたとされるこの遺跡だが、じつはクスコの農場主アグスティン・リサラガが、ビンガムより９年早い1902年７月14日に発見していたというのがほんとうのところらしい。

マチュピチュは、年間45万人もの観光客を受け入れる世界遺産であるが、受け入れ態勢の不備なども手伝い、遺跡の保存・保全がきわめて深刻な状況に陥っている、とユネスコは述べている。

マチュピチュへの交通は、ペルーのクスコから遺跡の下の村アグアス・カリエンテスまで列車で約３時間半、そこからバスで約20分である。ペルーの治安はあまりよくないので注意が必要である。現在、遺跡へは入山許可が必要で、１ヶ月前までにとらなければならない。

＜研究ノート＞

# 中部地方北東部における沈線文土器群終末期の土器編年

## ― 長野県内を中心として ―

領塚　正浩

## はじめに

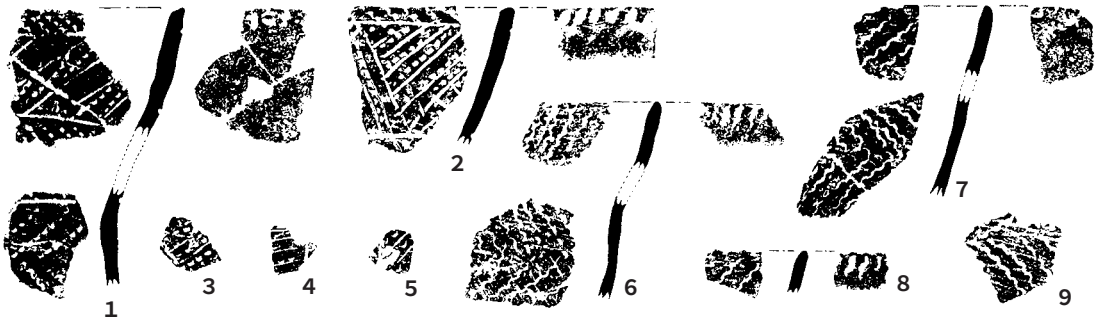
平成７年に長野県考古学会が開催したシンポジウム『押型文と沈線文』では、中部地方と周辺地域から出土した押型文土器や沈線文土器が集成され、各地域における調査・研究の現状が明らかになった（長野県考古学会編1996）。長野県内は、これまで押型文土器が主体的に分布する地域と考えられてきたが、近年の研究で押型文土器群の後半には沈線文土器が貫入する頻度が増し、東・北信地域では沈線文土器が主体的な分布を示すことがわかってきた（中沢2005）。東・北信地域から出土した終末期の沈線文土器は、東北地方南部や関東地方の沈線文土器と型式学的に近い特徴を持っており、比較資料の増加にともなって先行･後続･併行する土器群にも目安が付きつつある。したがって、拙稿では、これらの土器群の相対編年や併行型式に言及した上で、東北地方南部や関東地方の沈線文土器と対比し、広域編年の枠組みに位置付けてみたい（註１）。

## 1．鍋久保式土器の設定

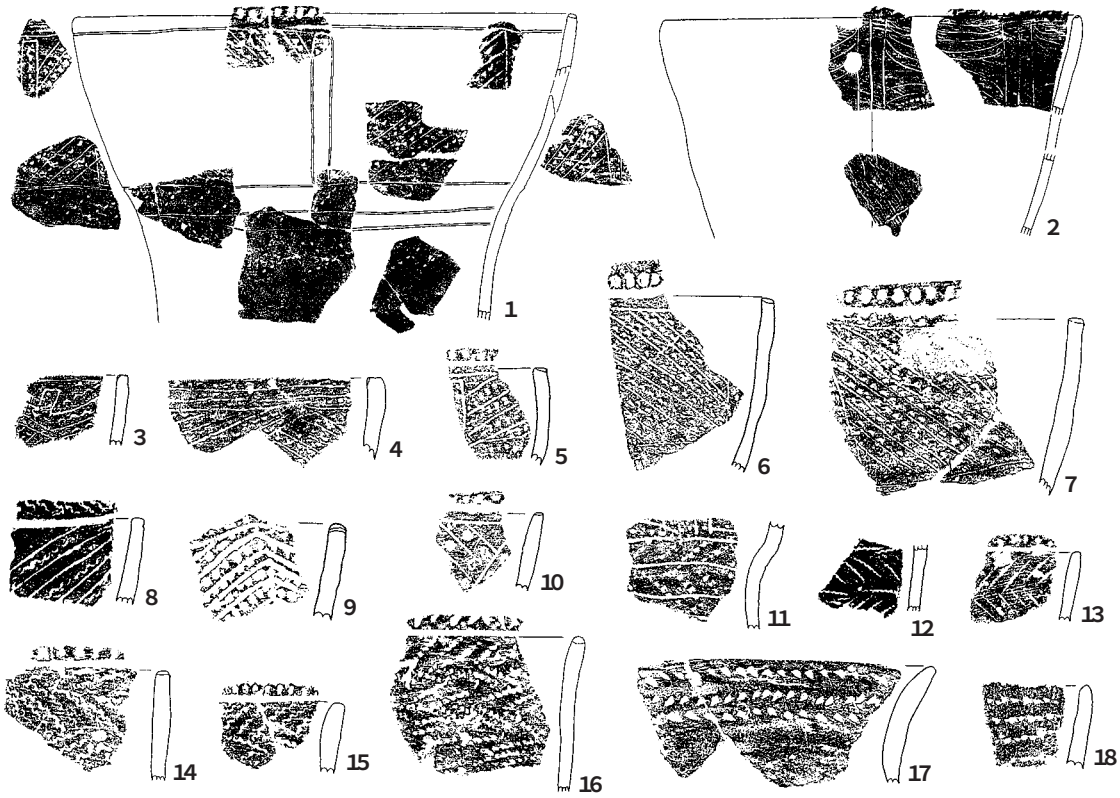
北佐久郡望月町にある新水B遺跡は、昭和55年に望月町教育委員会が調査し、沈線文土器の良好な資料が出土した（福島1981）。シンポジウム『押型文と沈線文』で同遺跡出土の早期縄文土器が多数図化され（長野県考古学会編1996）、細久保式の押型文土器と関東地方の田戸下層式～子母口式に併行する土器が出土したとされる（福島・中沢1997）。筆者は、望月町教育委員会の福島邦男氏のご好意により、それらを実見させていただいた上で、一部の土器の編年的位置に言及したことがあるが（領塚1997a）、すべての土器を編年的に位置付ける力量はない。そこで、まず口縁部に細沈線文と貝殻腹縁文を交互に施文して鋸歯文を描き、頸部に横位の細沈線文を介在させて、以下に羽状貝殻文を描いた第２図１の土器に着目した。この土器は、鋸歯文と羽状貝殻文が同一個体の土器に描かれており、両者の同時併存を裏付ける有力な根拠になる。北信・東信地域にある当該期の遺跡を瞥見したところ、長野市鍋久保遺跡（笹沢ほか1976）、望月町平石遺跡（福島1989）、御代田町塚田遺跡（中沢ほか1994）・戻場遺跡（中沢・贄田1996）などから、鋸歯文や羽状貝殻文が描かれた土器がともなって出土し、鋸歯文と羽状貝殻文が併存することが裏付けられた（第１・３・４図参照）。さらに、東北地方南部に目を転じてみると、常世１式にも羽状貝殻文と鋸歯文を描いた土器がともない（領塚1997a）、前記の各遺跡出土土器と共通した特徴が認められた。筆者は、この鋸歯文が先行型式の入り組み文や対称蕨手文の結束が弛緩し、成立したものと考えていたが、飯山市新堤遺跡（常盤井ほか1991）・信濃町貫ノ木遺跡（中島ほか1998）・東裏遺跡（中村2004）などの事例から、少なくとも中部地方北東部では田戸下層Ⅱ式に併行する時期の鋸歯文が断絶せず、田戸上層式の古い部分に併行する時期にも継承されることがわかってきた。したがって、新水B遺跡・鍋久保遺跡・平石遺跡・塚田遺跡・戻場遺跡の土器に見られる鋸歯文は先行型式の鋸歯文を母体とし、成立した可能性が高くなってきたのである。筆者は、このような鋸歯文と羽状貝殻文がはじめて出土し、適切な編年的位置が示唆された鍋久保遺跡の土器を標式資料とし（第１図１～９）、常世１式に併行する中部地方北東部の一型式として、「鍋久保式」を設定すべきではないかと考えている。鍋久保式には、北海道地方西南部で成立した中野A類型（領塚1996ab･1997ab）の影響が認められることから、同類型に特徴的な横位多段の構成をとる文様が卓越しており（第１図６～９）、こうした文様に着目する限り、先行型式との間に型式学的な隔たりを認めざるをえない（領塚1997a）。中野A類型の土器は、北海道地方西南部の住吉式・東北地方北部の鳥木沢式・東北地方南部の常世１式に組成し（領塚1997a）、中部地方北東部の鍋久保式にも組成することがわかったので、さらに連鎖の輪が広がったことになる。羽状貝殻文を描いた土器を組成する鍋久保式は、中部地方北東部の当該期編年の一翼を担うだけでなく、広域編年にも連動する重要な土器型式といえよう。

## 2．鍋久保式土器の先行・後続型式

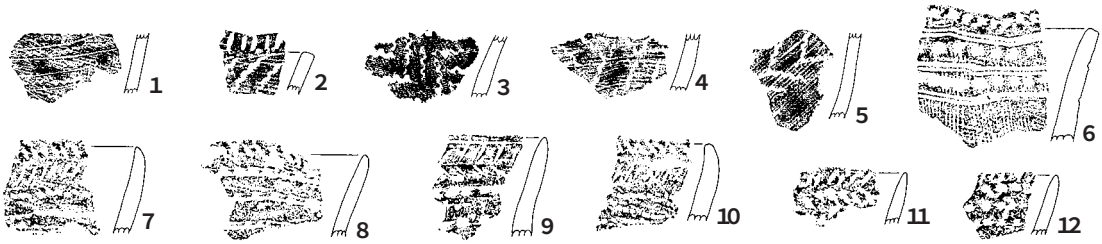
鍋久保式土器の先行型式には、長野県内では飯山市の新堤遺跡（常盤井ほか1991）・鳴沢頭Ⅱ遺跡・下境大原遺跡（中島ほか1992）、信濃町貫ノ木遺跡（中島ほか1998）・東裏遺跡（中村2004）、大町市の南入日向遺跡（島田ほか1992）の出土土器が該当し（第５・６図参照）、入り組み文や対称蕨手文などの図形文様が描かれていることから、東北地方南部の明神裏Ⅲ式（新しい部分）や関東地方の田戸上層式の古い部分に併行する。この先行型式の図形文様は、入り組み文や対称蕨手文などが入り組まず、左右対称あるいは非対称のクランク文（第５図１・２・７、第６図１・２）



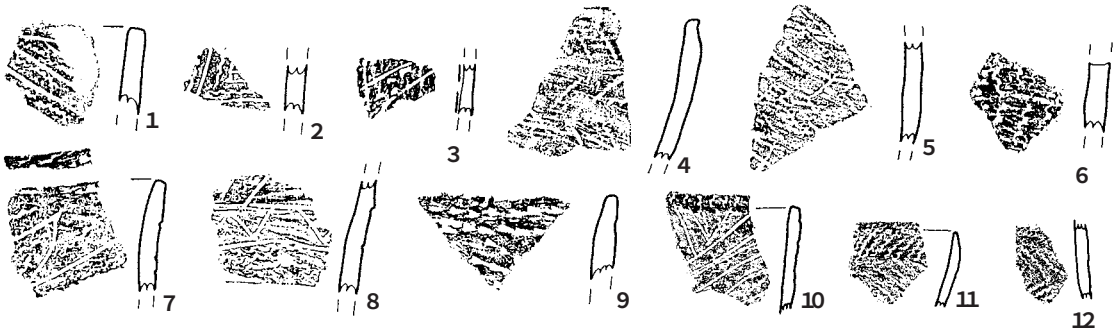

**第１図　鍋久保遺跡出土土器**（S:1/4）



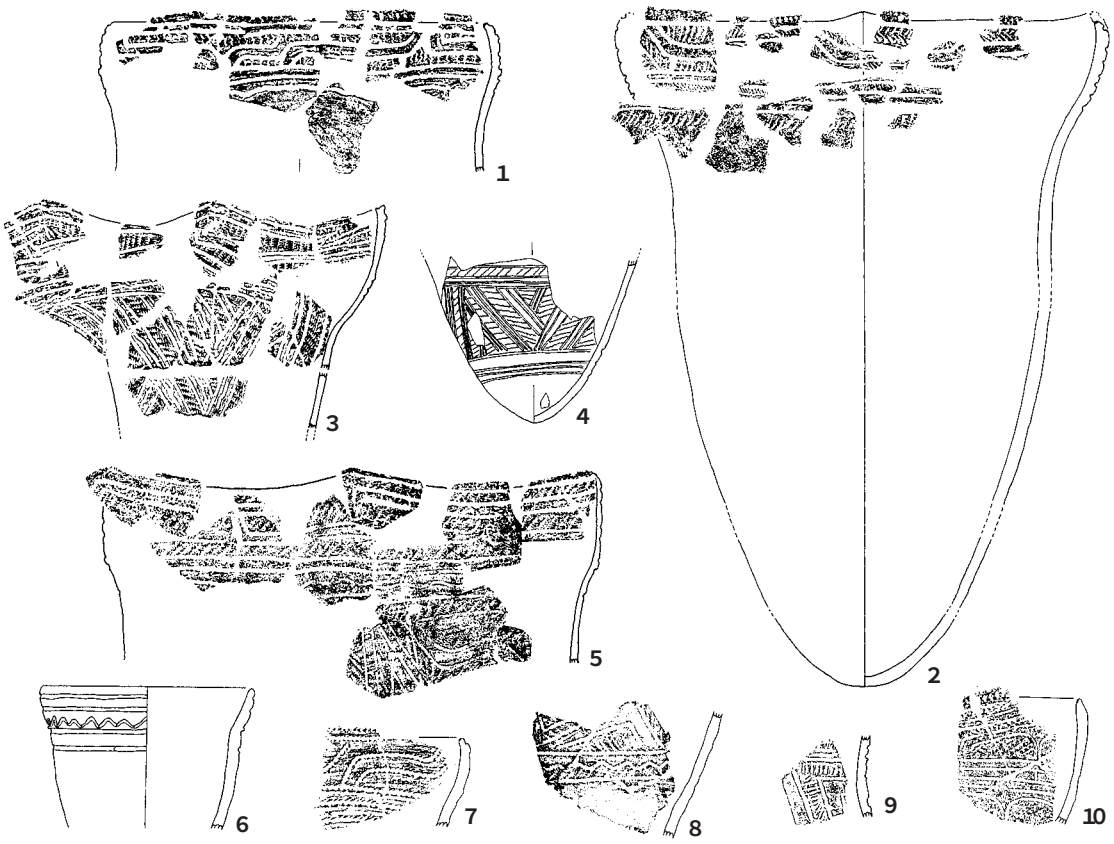

**第２図　新水Ｂ遺跡出土土器**（1･2＝S:1/5、3～18＝S:1/4）




**第３図　平石遺跡出土土器**（S:1/4）

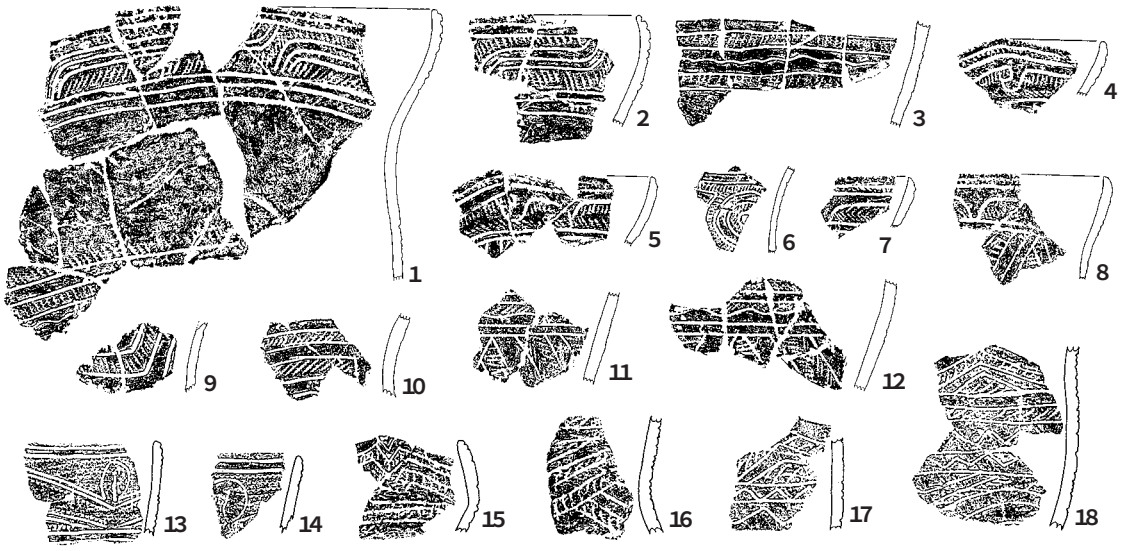



**第４図　塚田遺跡**（1～9）**及び戻場遺跡**（10～12）**出土土器**（S:1/4）

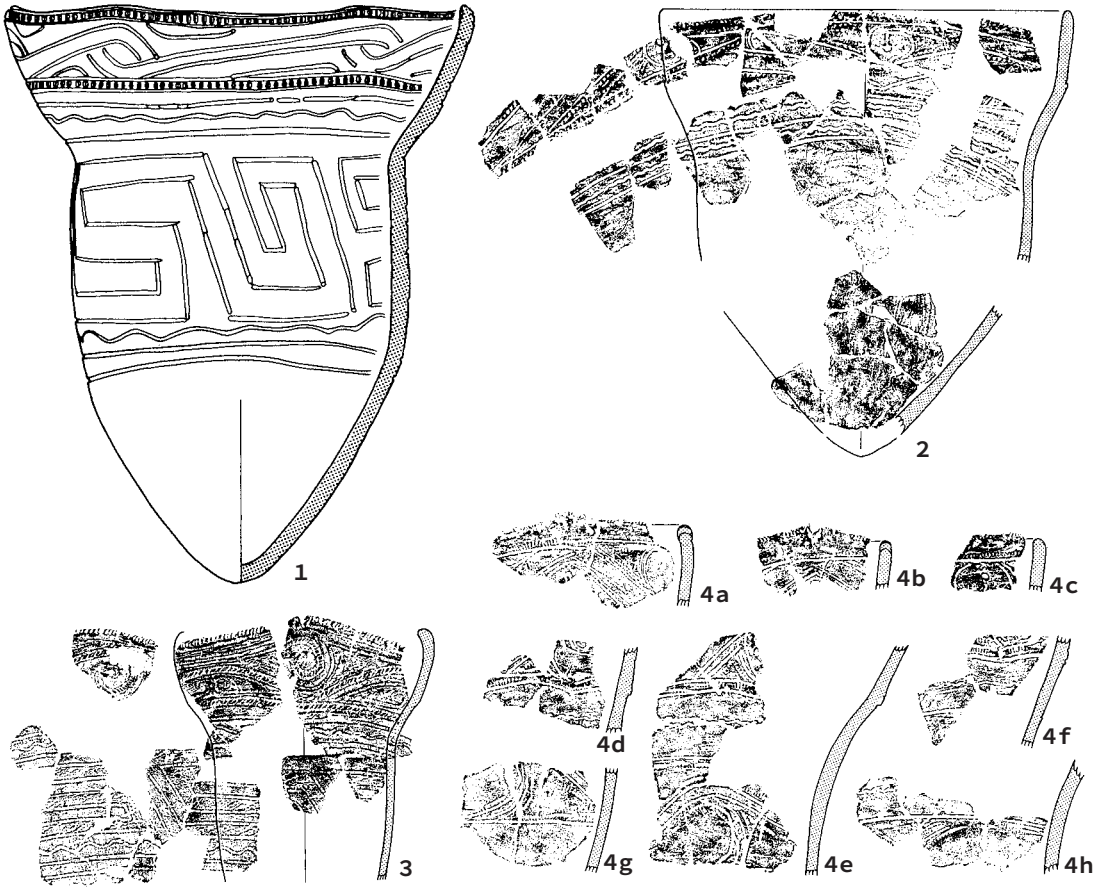



**第５図　貫ノ木遺跡出土土器**（1～6＝S:1/5、7～10＝S:1/4）

となったものを含んでおり、蕨手文がJ字状になったもの（第６図４・５）があること、鋸歯文（第５図４、第６図11・12）が含まれていることなどから、明神裏Ⅲ式（新しい部分）や関東地方の田戸上層式の古い部分（第７図参照）とは異なっている。雷文に近似した文様は、図形文様の内部に貝殻腹縁文（第５図５）が充填されており、鍋久保式のように細沈線文と貝殻腹縁文を交互に施文していないことから、文様要素の組み合わせ方に相違点が認められる。同様な文様は、千葉県の新東京国際空港№７遺跡（西川ほか1984）から出土した田戸上層式の古い部分の土器にも描かれているが（第７図１・３参照）、周辺地域の報告事例が増加した結果、田戸上層式の古い部分に一般的な文様ではなく、中部地方北東部を中心に分布する文様であることがわかってきた。また、口縁部の施文帯（文様帯）が極端に幅狭である場合、入り組み文などの図形文様が省略されて、平行細沈線文や波状文が描かれることもわかった。これらの一群は、器形・施文帯（文様帯）・図形文様の一部が田戸上層式とは異なることから、地域性を加味して別型式と考えるべきである（註２）。信

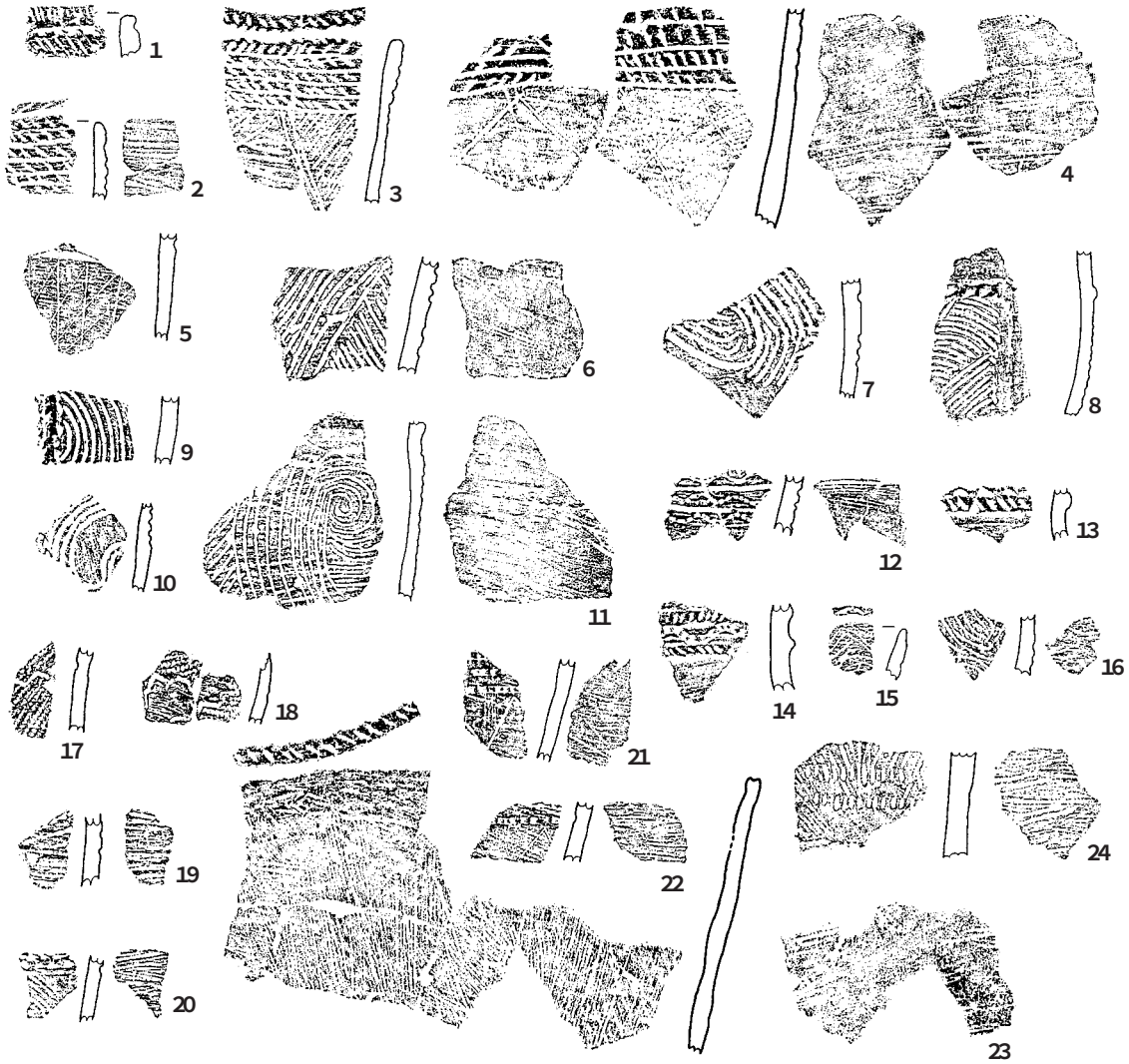



**第６図　東裏遺跡**（1～12）**及び新提遺跡**（13～18）**出土土器**（S:1/4）




**第７図　新東京国際空港№７遺跡出土土器**（S:1/5）

濃町の貫ノ木遺跡では、この時期の良好な資料が出土していることから（第５図１～10）、「貫ノ木式」を設定するのも一案であろう。鍋久保式の後続型式には、関東地方の子母口式に対比できる土器が存在するはずであるが、資料不足で私見を述べるまでには至らない。新水B遺跡からは、絡条体圧痕文を羽状に施した土器（第２図16）も出土しているが、沈線文や刺突文を羽状に施した土器（第２図13・17）も出土しており、この土器のみに絡条体圧痕文が施されていることから、子母口式やその併行型式に対比されるものではなく、羽状貝殻文を模倣して文様要素を置換した鍋久保式のバリエーションと考えられる（領塚1997a）。東北地方南部の常世１式にも、櫛歯状工具による刺突文や貝殻腹縁文を絡条体圧痕文に置換した土器が見られることから、絡条体圧痕文と子母口式を直接関連付けることは避けるべきである。早期末葉の絡条体圧痕文が子母口式と認識された研究史を振り返り、「絡条体圧痕文＝子母口式」という単純な図式は捨て去るべきであろう。また、茅野市の判ノ木山西遺跡（小林1989）の土器（判ノ木山西式）に注目し、口唇部直下の刺突文を重視して子母口式併行とする意見がある（会田・中沢1997）（阿部1997）。口唇部直下の刺突文は鍋久保式の一部（第４図11）にも見られることから、その直後に判ノ木山西遺跡の土器（判ノ木山西式）が後続し、子母口式併行となる可能性も否定できないが、折り返し口縁に絡条体圧痕文を施した土器や細い隆線文を施した土器がともなわないこと、型式内容がいま一つはっきりしないことなどから、現状では位置付けを保留しておきたい。



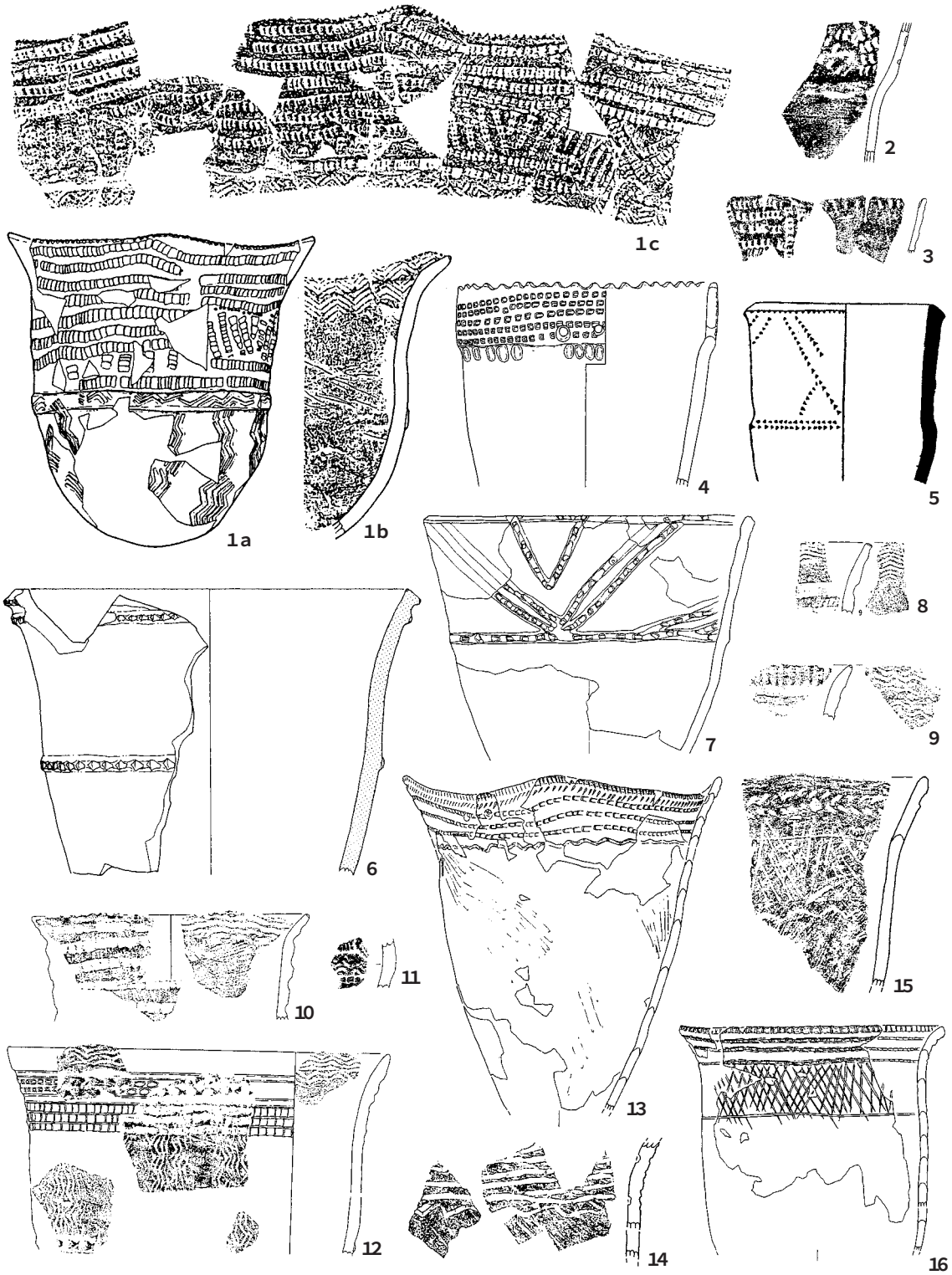

**第８図　下荒田遺跡出土土器**（S:1/4）

## 3．塚田遺跡出土土器の編年的位置

塚田遺跡は、北佐久郡御代田町に所在する遺跡であり、平成３年に同町教育委員会によって調査され、平成６年に調査報告が刊行されている（中沢ほか1994）。筆者は、中沢道彦氏のご教示で同遺跡出土の早期第Ⅱ群土器（第４図１～９）の存在を知り、御代田町教育委員会の堤隆氏のご好意により、資料を実見する機会を与えていただいたが、その折は知見が狭かったこともあり、適切な意見を述べることができなかった。その後、シンポジウム『押型文と沈線文』で長野県内の資料が集成され、周辺地域の様相も明らかになってきたことから、筆者なりの編年観を持つに至った。阿部芳郎氏は、このシンポジウムで関東地方の田戸上層式併行の土器群が「塚田遺跡―新水B遺跡―下荒田遺跡―（平石遺跡）―禅海塚遺跡」と変遷するとし、禅海塚遺跡の一部と判ノ木山西遺跡の土器群を子母口式に併行させると同時に、「複列刻文帯」を特徴とする下荒田遺跡の一群を「下荒田式」、「原体刺突文」を特徴とする判ノ木山西遺跡の一群を「判ノ木山西式」と命名し、前者から後者への変遷を型式学的に説明している（阿部1997）。こうした阿部氏の編年試案を受けて、中沢道彦氏は塚田遺跡早期第Ⅱ群→下荒田式→(「平石遺跡」)→判ノ木山西式に至る編年試案を提示している（中沢2005）。筆者は、塚田遺跡の早期第Ⅱ群（第４図１～９）と平石遺跡出土の横位多段の押し引き文（第３図７～10）が東北地方南部の常世１式に対比できると考えており、田戸上層式の古い部分に貫ノ木式、新しい部分に鍋久保式が各々併行すると考えているので、阿部氏や中沢氏の編年観とは大きく異なる。塚田遺跡では、細沈線文と貝殻腹縁文を交互に施文して鋸歯文を描く土器（第４図１～３）と羽状貝殻文を描いた土器（第４図４・５）がセットで出土しており、鍋久保遺跡・新水B遺跡・平石遺跡・戻場遺跡の出土土器と共通することから、早期第Ⅱ群土器の大半は鍋久保式に相当するものと考えられる。阿部氏や中沢氏は、塚田遺跡の早期第Ⅱ群土器と平石遺跡出土の横位多段の押し引き文を施した土器の中間に「下荒田式」を位置付けているが、細沈線文・刺突文・貝殻腹縁文で文様を描いた土器群の中間に、隆線文で文様（区画文）を描いた「下荒田式」を介在させると、型式学的な説明に窮することは否めないのである。「下荒田式」については、蕨手文に近似した文様が見られること、区画文に横位の隆線文が用いられていることから、どちらかといえば鍋久保式より貫ノ木式に近い印象を受けるが、横位多段の刺突文（第８図21）が一部に見られることなど、東北地方南部や関東地方の編年と連動しない部分もあり、型式内容をより一層整備する必要があるかもしれない。したがって、中部地方北東部の編年の基準とするには、材料不足の感が否めないことから、ここでは編年的位置付けを保留したい。

## 4．横位多段の押し引き文をめぐって

相木式土器は、南佐久郡北相木村の栃原岩陰遺跡を標式遺跡とする土器型式であり（小松・西沢・新村1976）、押型文土器群の終末を考える上で重要な位置を占めているが、標式資料が僅かに１個体の土器（第９図１）であることから、型式内容がいま一つはっきりしないことは否めないし、隆線文を共有する穂谷式との関係にも検討の余地が残る。したがって、当面は山形文（押型文）を地文、横位の隆線文を区画文とし、幅広の太い押し引き文や沈線文で重層的な鋸歯文や横位多段の文様を描き、口縁部が外反する丸底の土器を「相木式」と考えておきたい。筆者は、北相木村教育委員会の藤森英二氏のご好意で標式資料を実見し、この土器が横位の隆線文を上下の区画文とし、鋸歯文や横位多段の太い押し引き文を施すこと、底部が丸底であることなどから、東京都戸場遺跡（小薬ほか1984）や千葉県城ノ台北貝塚の第五類土器（吉田1955）の一部と対比し（第９図５～７）、田戸上層式の新しい部分に併行させたことがある（領塚1997a）。岡谷市の禅海塚遺跡から出土した「相木式」（第９図12）には、田戸上層式の新しい部分に見られる横位の隆線文（第９図６）や常世１式に見られる横位多段の刺突文もしくは押し引き文（第９図４）が施されており、地文に「相木式」に特有な山形文（押型文）が施されていることから（会田・小坂1988）、田戸上層式の新しい部分・常世１式・「相木式」が併行関係にあることを示す一例として重視したい。シンポジウム『押型文と沈線文』の席上でも述べた通り、「相木式」に見られる横位多段の押し引き文は常世１式（中野A類型）の影響下に成立した文様であり、「相木式」と鍋久保式は「Ⅰ文様帯」（山内1964）と横位多段の文様を共有する併行型式といえよう。中部地方の押型文土器群は、「Ⅰ文様帯」の拡散によって終焉を迎えるが、その過程で相木式のような土器が出現するらしい。押型文土器群の終末には、粗大な楕円文や山形文が用いられるが、沈線文土器群との折衷土器には山形文のみが選択されており、沈線文土器群と山形文との間に親和的関係が生じている。高山寺式とその併行型式は、近似した土器が広域に分布することが知られているが、隆線文による横位の区画文を欠落することから、沈線文土器群の後半に併行するとはいえ、折衷土器がほとんど見られず、細別編年レベルでの併行関係は未確定である。高山寺式併行の土器から「相木式」に移行する過程で楕円文と山形文の比率が逆転し、やや崩れた粗大な縦位の山形文が出現する背景には、鍋久保式の羽状




**第９図　相木式土器関連資料**

1　長野県栃原岩陰遺跡　　2・3　福島県常世原田遺跡　　4　福島県塩喰岩陰遺跡　　5・6　千葉県城ノ台北貝塚
7　東京都戸場遺跡　　8～12　長野県禅海塚遺跡　　13～16　山梨県笹見原遺跡　　(1～5･8～12･14･15＝S:1/5、6･7＝S:1/6、13･16＝S:1/8)

**第１表　東日本における縄文時代早期中葉の土器編年**

| 中部地方北東部 | 関東地方 | 東北地方南部 | 東北地方北部 | 北海道地方西南部 | 北海道地方西部 | 北海道地方東部 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| (浜弓場) | 田戸下層Ⅰ | (前原Ａ) | 寺の沢 | ノダップⅠ(古) | | |
| | 田戸下層Ⅱ | (タタラ山) | 白浜 | ノダップⅠ(新) | (牛舎川右岸?) | |
| 貫ノ木 | 田戸上層(古) | 明神裏Ⅲ | 物見台 | 中野Ａ | (中野台地B) | |
| 鍋久保 | 田戸上層(新) | 常世１(大寺) | 鳥木沢 | 住吉 | 虎杖浜 | 沼尻 |
| | 子母口 | (竹之内) | 吹切沢 | 根崎 | 有珠川２ | 暁(テンネル) |

※太字のみは型式名、(　　)は遺跡名・型式別称・新旧を示す。

貝殻文や羽状沈線文などの図形文様が関与している可能性もあり、調査事例の増加と研究の動向を注視しておきたい。何れにしても、押型文土器群と沈線文土器群の研究は、個別研究の限界を認識すべき段階を迎えており、閉塞した編年観から脱却する必要性を痛感する。最近、山梨県の笹見原遺跡で横位多段の押し引き文を施した尖底土器（第９図13）が出土し（三田村ほか2003)、平石遺跡出土の押し引き文土器（第３図７～10）との関係が注目されている。中沢道彦氏や三田村美彦氏は、こうした横位多段の押し引き文の土器を関東地方の田戸上層式に対比しているが（中沢2005)（三田村2005)、横位多段の構成をとる文様は北海道地方西南部で成立した中野Ａ類型に特徴的な文様であることから（領塚1996ab・1997ab)、むしろ東北地方南部の常世１式に対比すべきであろう。関東地方の当該期編年のみを偏重せず、周辺地域の併行型式にも目を向ける必要がある。笹見原遺跡には、横位多段の押し引き文を施した土器（第９図13）と横位の平行太沈線文を施した土器（第９図14）があり、「相木式」の押し引き文（第９図10）や平行太沈線文（第９図８・９）と共通することから、こうした文様から両者に併行関係を想定することもできる。中沢道彦氏は、平石遺跡や笹見原遺跡の出土土器に基づいて、「平石式」や「笹見原式」を設定しようとされているが（中沢2005)、平石遺跡からも鍋久保式に比定できる羽状貝殻文の土器（第３図３～５）が出土していること、新水B遺跡からも横位多段の押し引き文を施した土器(第２図18)が出土していることから、「平石式」や「笹見原式」に該当する土器が鍋久保式のバリエーションとして捉えられる可能性もあり、その点が明らかにならない限り、型式設定には賛同することができない。

## ま と め

以上、長野県内を中心として、中部地方北東部における沈線文土器群終末期の土器編年について、いつもながらの粗削りな私見を述べてみた。長野県内では、沈線文土器群の終末期に先行型式である貫ノ木式の系統を一部に引きながら、東北地方南部の常世１式（中野Ａ類型）の影響下に成立した鍋久保式と押型文土器群の系統上にありながら、関東地方の田戸上層式の新しい部分や東北地方南部の常世１式（中野Ａ類型）の影響下に成立した「相木式」が南北に対峙し、やや入り組んだ分布を示すことがわかった。したがって、関東地方の当該期編年を偏重した形で、中部地方北東部の沈線文土器を理解しようとする従来の編年観は、基本的に改められなければならない。仮に、「相木式」が最終末の押型文土器であるとすれば、少なくとも中部地方北東部では押型文土器群と沈線文土器群の終焉がほぼ同時期となり、田戸上層式の新しい部分に併行する時期にまで、押型文土器が一部に残存していたことになる。押型文土器群の終焉は、「Ⅰ文様帯」（山内1964）の拡散すなわち西漸と密接に関係しており、鍋久保式や「相木式」の分析は、その過程を究明することにも繋がっている。筆者は、折りに触れて「Ⅰ文様帯」の出現と拡散を究明してきたが、小稿もその一翼を担うものであることを強調しておきたい。

小稿をまとめるにあたり、会田　進・大竹憲昭・小笠原永隆・小坂英文・堤隆・中沢道彦・福島邦男・藤森英二・毒島正明・三田村美彦の各氏、岡谷市教育委員会・北相木村考古博物館・㈶長野県埋蔵文化財センター・望月町教育委員会の各機関に大変お世話になった。明記して感謝の意を表したい。

**〈補　註〉**

註１）ここでは、沈線文・刺突文・貝殻文・隆線文などを文様要素とし、主として尖底や丸底を呈する縄文時代早期中葉の土器群を「沈線文土器」あるいは「沈線文土器群」と呼称しておきたい。

註２）筆者は、数型式（数段階）にわたって系統的に文様が描かれる一定の施文部位「施文帯」と定義し、縄文時代早期前半に位置する土器群の分析概念に用いている（領塚1987ab)。施文帯は、今村啓爾氏の文様帯（今村1983）に相当するものであり、筆者はa・b・c・d　の４つの施文帯を仮設している。施文帯bは、おおむね山内清男氏のⅠ文様帯（山内1964）に相当するが、必

ずしも一致しない部分がある。

**〈引用・参考文献〉**


吉田　格　1955「千葉県城ノ台貝塚」『石器時代』第１号

山内清男　1964「縄文式土器総論・Ⅴ文様帯系統論」『日本原始美術１・縄文式土器』講談社

笹沢　浩ほか　1976「長野県更級郡大岡村鍋久保遺跡の調査」『長野県考古学会誌』23・24

小松　虎・西沢寿晃・新村　薫　1976「栃原岩陰遺跡出土土器１例について」『長野県考古学会誌』27　藤沢宗平氏追悼号

福島邦男　1981『新水―長野県北佐久郡望月町新水Ａ・Ｂ遺跡緊急発掘調査報告書』望月町文化財調査報告書第７集

今村啓爾　1983「文様の割りつけと文様帯」『縄文文化の研究』第５巻　雄山閣

西川博孝ほか　1984『新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書　№７遺跡』㈶千葉県文化財センター

小薬一夫ほか　1984『町田市戸場遺跡』町田市戸場遺跡調査会

領塚正浩　1987ａ「三戸式土器の再検討」『東京考古』第５号

領塚正浩　1987ｂ「田戸下層式土器細分への覚書」『土曜考古』第12号

福島邦男　1989『平石遺跡―緊急発掘調査報告書』望月町文化財調査報告書第17集

常盤井智行ほか　1991『国営飯山農地開発関係遺跡発掘調査報告Ⅰ　新堤遺跡・トトノ池南遺跡』飯山市教育委員会

中島英子ほか　1992『国営飯山農地開発関係遺跡発掘調査報告Ⅱ　鳴沢頭Ⅰ・鳴沢頭Ⅱ・カササギ野池・休場・下境大原遺跡』飯山市教育委員会

島田哲男ほか　1992『長野県大町市埋蔵文化財包蔵地緊急発掘調査報告書　南入日向』大町市埋蔵文化財調査報告書第21集

芳賀英一・小暮伸之　1994「六郎次・塩喰岩陰遺跡」『東北横断自動車道遺跡調査報告25』福島県埋蔵文化財調査報告書第296集

中沢道彦ほか　1994『塚田遺跡―長野県北佐久郡御代田町塚田遺跡発掘調査報告書』御代田町教育委員会

領塚正浩　1996ａ「東北地方北部に於ける縄文時代早期前半の土器編年」『史館』第27号

領塚正浩　1996ｂ「東北地方北部に於ける縄文時代早期前半の土器編年」『史館』第28号

中沢道彦・贄田　明　1996「長野県北佐久郡御代田町戻場遺跡採集の縄文土器について」『縄文時代』第７号

長野県考古学会編　1996『シンポジウム「押型文と沈線文」資料集』

会田　進・中沢道彦　1997「シンポジウム開催にあたって―中部高地の早期中葉土器編年の課題」『シンポジウム「押型文と沈線文」本編』長野県考古学会

福島邦男・中沢道彦　1997「長野県北佐久郡望月町新水Ｂ遺跡の遺構と遺物」『シンポジウム「押型文と沈線文」本編』長野県考古学会

小笠原永隆　1997「関東地方における田戸上層式・子母口式土器の様相―認識の再確認を中心として」『シンポジウム「押型文と沈線文」本編』長野県考古学会

領塚正浩　1997ａ「常世式土器の再検討―常世１式土器の成立過程と編年的位置をめぐって」『シンポジウム「押型文と沈線文」本編』長野県考古学会

阿部芳郎　1997「判ノ木山西遺跡出土土器の分類と編年」『シンポジウム「押型文と沈線文」本編』長野県考古学会

領塚正浩　1997ｂ「子母口式土器の成立過程」『奈和』第35号

中島英子ほか　1998『一般国道18号（野尻バイパス）埋蔵文化財発掘調査報告書　貫ノ木遺跡・西岡Ａ遺跡』㈶長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書35

会田　進・小坂英文　1998『間下丸山・禅海塚遺跡―平成７・８・９年度緊急地方道路整備事業（街路）に伴う間下丸山・禅海塚遺跡発掘調査報告書』郷土の文化財20　長野県岡谷市教育委員会

森　幸彦ほか　1999『常世原田遺跡―吉田格氏昭和23年調査資料』福島県立博物館

三田村美彦ほか　2003『笹見原遺跡発掘調査報告書』忍野村教育委員会

中村由克　2004『東裏遺跡東浦団地地点・町道柴山線地点発掘調査報告書』長野県信濃町教育委員会

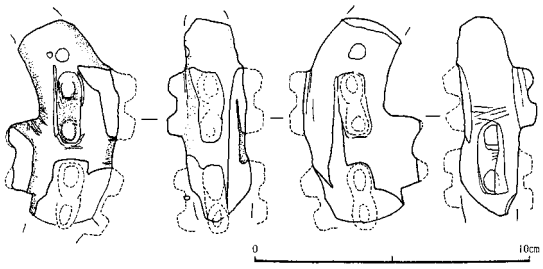
中沢道彦　2005「長野県における早期沈線文土器群後半期の様相」『第18回縄文セミナー早期中葉の諸問題』縄文セミナーの会

三田村美彦　2005「山梨における沈線文土器群終末期前後の様相」『第18回縄文セミナー早期中葉の諸問題』縄文セミナーの会

# 佐久平の弥生遺跡

## ― 特に清水田遺跡表採の子持勾玉をめぐって ―

土屋　長久




**第２図　円正坊遺跡群出土の子持曲玉**
（佐久市清水田遺跡収録）

### 1

佐久平の弥生文化は、佐久考古学会企画の『赤い土器を追う』のごとく、昭和初年藤森栄一は、これを「岩村田式」「町田式」と設定され、その学史は臼田武正の「佐久の弥生文化」で扱われている（註１）。

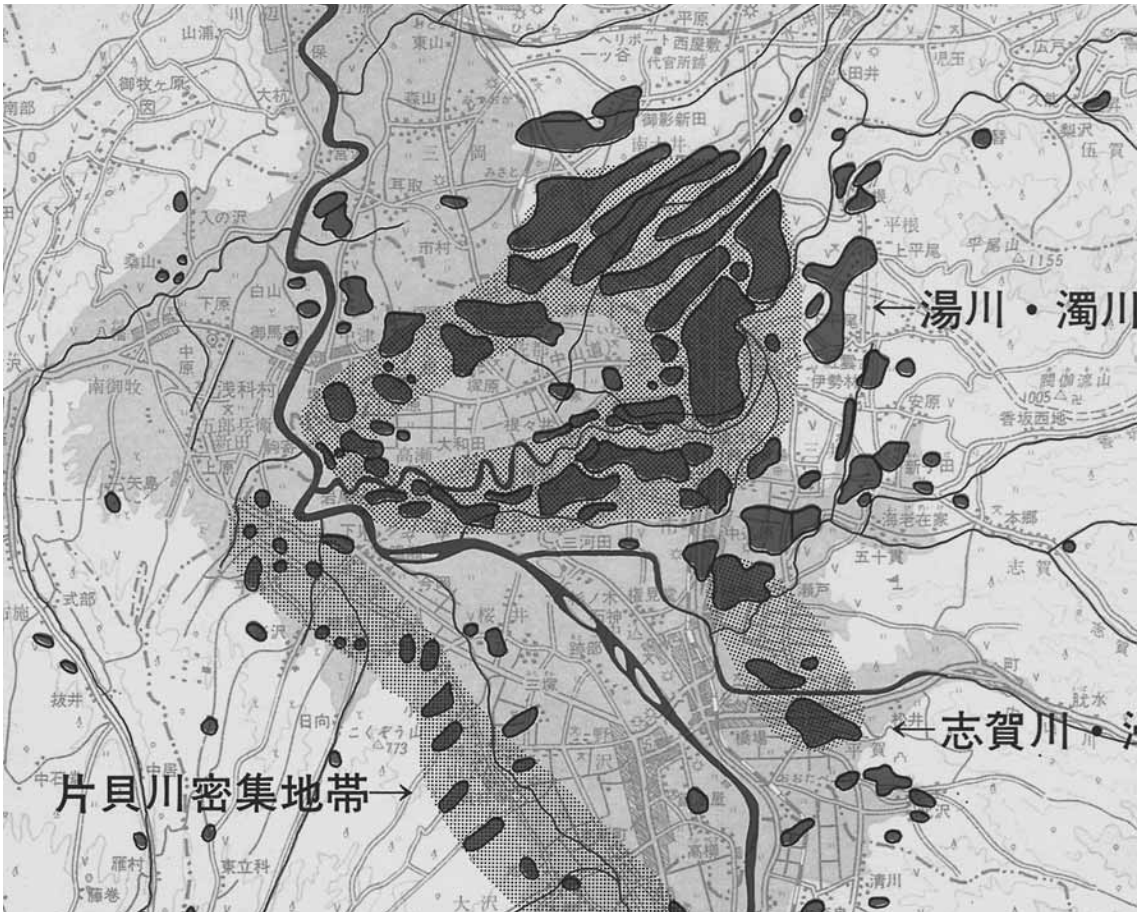
当時、一本柳弥生遺跡調査をし、その分布は第１図のとおりで、弥生時代の環状の分布を知ることができる。

第２図の子持勾玉は、佐久市清水田遺跡の円正坊遺跡群からの表採で、この点をふまえて述べたい。

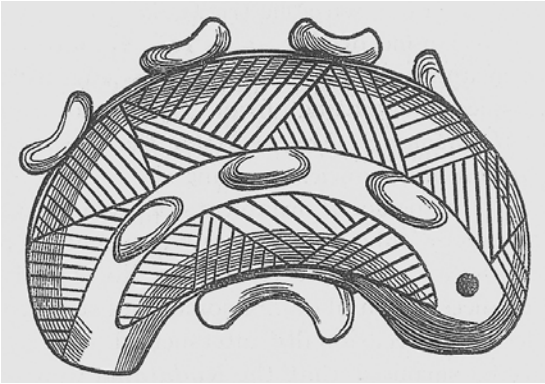
大場磐雄は子持勾玉を集成したが（註２）、本資料は佐久平では初めてのものである（註３）。１、２点気づいたことを述べたい。

### 2

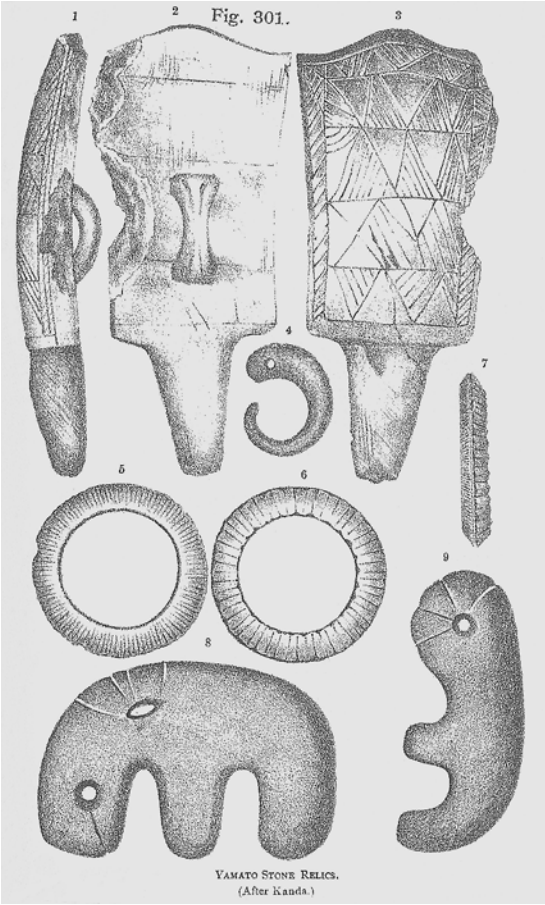
N･G･マンロー氏『先史時代の日本』（昭和50年復刻）（註４）によれば、神田遺跡３点の子持勾玉がある。『全国祭祀遺跡分布図』にはないが、当時の東京都台東区神田に比定され、横浜市周辺には神田はみえない。明治45年代では、「神田明神」「湯島聖堂」があり、これは想像であるが、「神田明神」の子持勾玉伝世品と考え




**第１図　佐久平弥生遺跡**



**第３図　マンロー『先史時代の日本』**
**PREHISTORIC JAPAN459頁　子持勾玉**
**全影**
11ヶの子持勾玉をつけている。




**第４図　マンロー『先史時代の日本』**
**PREHISTORIC JAPAN459頁**
８・９が子持勾玉。滑石製品と伴出している。
５～６世紀。

られる。東京湾は狭く、この付近の弥生遺跡は東京大学本郷出土の弥生式土器はあまりにも有名であり、この付近に比定される。子持勾玉の形状は、マンローはすでに層位学からして縄文と祝部土器の中間として、弥生式土器を予測している。

子持勾玉を“大和トンボ”として、章・節では、「先史時代、記念物と石」として述べている。スケールは入っていない。第３図１は滑石製で、勾玉を腹に１、背に４あり、良く線刻されている。第４図８～９は滑石製で、形状のみで古くなる。１は特に優品で、これだけの遺物は表採でなく古墳等と考えられ、神田明神社の伝世品であることも想像される（第３・４図）。

## 3

佐久市円正方遺跡群からであるが、清水田遺跡からも祭祀遺物がある。大場磐雄はその「祭祀概論」からして、玉類と子持勾玉を分化した。桐原健集成による全国300余点の内神社に玉依賣姫命を祭祀した、玉依賣神社のものが含まれ、長野県では50点とし、佐久平のものが加わる。円正坊遺跡は表採で、その性格を追究はできない。

マンローの子持勾玉について、彼は医師でもあり、日本人の祖先をアイヌ人とし、一方東京大学坪井正五郎教授はコルボックス説で論議し、今では考えられない日本国の考古学であった。英国では考古学が確立し、英二世アーネスト・サトウ氏は、明治13年群馬県前橋の古墳出土品を報告している。

外国人のマンロー医師が興味を持ったのは、日本人の病をいかに防ぐか、これを「ミソギ」「カジキトウ」と述べ(註７)、先者は後世、神社となる神道考古学である。後者は仏寺となり、仏教考古学がそれである。

近年、國學院大學史学科教授の小林達雄氏は、再検討し改めてN・G・マンローの業績をたたえている(註８)。

## 4

日本人のこころは、考古資料にはないが、マンローは「土偶」「石棒」を祭祀遺物とし、防疾病のものとしている。日本人の考古学者はあるいはそうではあるまいかと考える。

マンローは、御代田町宮平遺跡、軽井沢町茂沢南石堂遺跡を発掘調査及び踏査し、その出土品ではないが、旧軽井沢在住の小林幸夫に磨製石斧３点をやり、調査のために「軽井沢町歴史民俗資料館」に持ち込まれた。みると、佐久市榛名平遺跡出土品とそっくりである。軽井沢のローム層から、旧石器がでる問題点を提示したのは、マンローに次いで元東京大学教授上野佳也で、八風山の南側からは、下茂内遺跡等著しい。軽井沢町内に求めると、碓氷山系があげられる。マンローの他遺跡出土土器は、京都府同志社大学が引き継ぎ、近く『研究紀要』がでるようである（昭和58年、同志社大学生及び同大学教授が来館し、マンロー病院の診察台、顕微鏡等を見学の折の話である）。

御代田町で宮平遺跡は、マンローは全て地主に返している。八幡一郎は、東京大学へ寄贈している。大井源寿は、耳飾りを家宝としている。

後年長野県史で宮下健司・線田弘実等東京大学内「東京総合博物館」の収蔵品を調査している。

## 5

N・G・マンロー調査にかかわる子持勾玉は、おそらく大場磐雄が集成され（註11）、『情報祭祀考古』に３点、伊那谷を集成した岡田正彦（註12）は５点としている。

従って、桐原健集成で50点が県内55点、全国で300点が453点と再集成される。

弥生時代については、『祭祀空間』（註13）で水野正好は、古墳の棺内の文物は死者の遺愛の品物であり、「霊代（たましろ）」と扱い、祭祀は人には見せないもの、大事な神秘な祭式とし、古墳時代には天の世界とか地の世界とか、日月星辰という知識は全部揃っている。これに先行する弥生時代は、金閣恕が、「池上曽根遺跡」を取り上げ、建物・大型井戸・土坑をあげている。水野正好は、この頃になると男・女の生殖が、稲の実りにひもといて、水辺の祭祀等が顕著となってくる（註14）。

佐久平、清水田遺跡からの浅間山の眺望はすばらしい。従って、清水田弥生ムラの所から出土した可能性がある。式内社大伴神社に近い。

桜井秀雄（註15）は、峠神奉斎の滑石製品はヌサなのか論考している。大場磐雄は『神祇資料』からである（註16）。当時、峠神は祭祀遺跡とし、全国約6,000ヶ所ある中で、峠神奉斎は信州の３遺跡と東北の多賀城峠に１遺跡である。滑石製品の盛行は古墳時代中葉の５～６世紀である。大場はその著書で述べている。桜井秀雄論文は、つまり滑石製品はヌサではないとしている。昭和44年11月、入れ峠祭祀遺跡調査団顧問の一志茂樹は、滑石製品が浅間山に向かい、低くなる傾斜地から破棄されたものが多く、『神祇資料』にみる「きりゆうのはらい」としている。報告書では、剣形滑石製品に接合できたものをあげている。

佐久平の祭祀遺跡は、三千束等にみられる。峠神奉斎も、入山峠、瓜生坂、雨境峠、御坂峠、それぞれ年代は異なって祀られている。

桐原健は点から点へ、官道をイメージする「古東山道」はない。裏付け資料が全くない。

この道は、上野国のプレ東山道（内山峠越）とつながる。

瓜生坂祭祀遺跡は、望月町誌で試掘し、地点がはずれ、この遺跡を除去している。『長野県歴史博物館　紀要６』で縄田弘実は、東京大学博物館収蔵品を再調査し、確実的なものとし、滑石製臼玉、手捏土器27点、峠道に関係する祭祀遺物として、注目されている。

大方諸兄の御教示を賜れば、幸甚である。

（平成17年２月25日）

註１　藤森栄一「岩村田式弥生遺跡について」『考古学』臼田武正「佐久の弥生式土器」『信濃』昭和58年

註２　大場磐雄『祭祀遺跡』昭和50年。同「子持勾玉私考」『上代文化』15、昭和13年

佐久市教育委員会「清水田遺跡」『佐久市埋蔵文化財年報４』平成６年　佐久市埋蔵文化財課林幸彦氏御教示。

註３　国立歴史民俗資料館『紀要第７集　古代の祭祀遺跡について』昭和57年

註４　N・G・マンロー『先史時代の日本　PREHISTORIC JAPAN』（昭和50年復刻）第一書房

註５　桐原健「子持勾玉覚書」『考古学叢書所収』昭和63年

註６　註２に同じ。『文化財発掘出土情報』2004の５　㈱ジャパン通信センター

註７　註４に同じ。英国では既に考古学は成立していた。アーネスト・サトウも明治13年、群馬県前橋市古墳の副葬品を報告している。前橋市大室古墳群中、前二子古墳は明治11年３月調査され、副葬品の配列状態は『根岸文書』に記録されている。

「ANCIENT SEPULCHRAL MOUNDS OF KOUDZUKE」『Journal of the Asiatic Society of Japan』『日本アジア協会紀要』８巻３号。『群馬県遺跡大辞典』平成11年　上毛新聞社

信州大学医学部　岡元和文、天野直二、両教授は災害医療を学ぶとしていて、災害後しばらくして症状が出る（Post Traumatic Stress, Disorder）。

善光寺大地震、天明３年浅間火山噴火直後、児玉幸多他『天明３年浅間火山噴火史料』平成３年　財団法人東京大学出版会。東京大学出版所。御代田町文化財審議会『天明三年浅間山大焼記録集』昭和44年

これでは、浅間火山の翌年「ホウソ」が流行し、20歳代の女性が死亡し自殺か判然としない。

『御代田町誌』をみると、コレラ（Cholera）等流行し、追分には神岡、里見の両医者が江戸時代より診察していたが、N・G・マンローが軽井沢ホスピタルに就任したのは、大正13年である。里見医師は堀辰雄をみ、又堀辰雄の小説に、N・G・マンローが登場する。

註８　小林達雄『縄文の世界』平成７年　吉川弘文館

註９　堤　隆「N・G・マンロー氏について」『御代田町町誌歴史篇上』平成10年　御代田町誌刊行会

註10　上野佳也・西田民雄『軽井沢町茂沢学石堂遺跡』

平成５年　軽井沢町教育委員会
註11　『御代田の文化財』文化財シリーズ２集　昭和52年　御代田町教育委員会
註12　大場磐雄「上代子持勾玉私考」『上代文化』15　昭和12年。同『祭祀遺跡』昭和45年　雄山閣
註13　岡田正彦「飯田・伊那の祭祀遺跡」『情報祭祀考古』23　平成14年。
註14　註13に同じ
註15　桜井秀雄「峠神奉斎について――滑石製品はヌサか？」『信濃』49の10
大場磐雄他「神道要語集」『日本文化研究所　紀要15』昭和43年　國學院大學
註16　『神祇資料』昭和２年　皇朝秘笈刊行会。三橋健一「日本人の祈り」『長野県國學院大學院友神職会』平成５年
註17　大場磐雄、杉山林継『入山峠』平成５年　軽井沢町教育委員会

（敬称は略させていただいた。御含みください）

（平成17年２月28日）

**〈追記〉**

さらに文献を見ると、シーボルト『日本交通貿易史』呉秀二訳に、「日本の原住民の石製武器・石刀・天狗の飯匙」、つまり「天狗の飯匙」として、第29図として剣、石棒、そして子持勾玉６点（第５図）のごとしである。日本の『雲根志』からとし、これは全て神話的古代即所神氏としている。

ここに写せる。「石槌」Stein schägeln。そして近江国の栗本野をあげて『栗太郎の誤り』古より一仏寺あり、神社を建て、祭祀せり。

そして、我素朴な土民は、彼地方の原住民の残せりる、棒状の石を天上の番衛人の用ゆる、戦の斧と名づけし。之を直ちに、彼等の古代のシォイスとも云べき、雷神（ライデン）（Raiden, bomer una Blets）も日本の神話史には、雷電を以って、双角がある。

シーボルトも、神道即ち、心の道（Sin）、神の心（Geist Gottes）すなわち神祇の精神。法は仏道

**第５図　シーボルト『日本交通貿易史』から**

（Buddha）、又は神道は本来支那の発音にして、純然たる日本語にては、「カミ（kami）」、２つの称は古き日本に属する精霊、神祇を意味し、「ブツ」とは、外来の神をいうなり。

日本国の創業者は一様に、日、月の後裔と認められ、殊に天照大神は日本語にて扱われている。

N･G･マンロー氏は、子持勾玉にふれず、シーボルトは神石として、５点。『雲根志』から扱っている。シーボルトは、オランダ付として、近世より少しくだるが、日本が開国した国で、それぞれ引き継がれていた。英人、N･G･マンロー氏は明治20年来日。

**〈再追記〉**

赤崎敏男・金子裕之・椙山林継「祭祀具」『古墳時代の研究３　生活と祭祀』子持ち勾玉３点みられ、内１点は、第２・３図のマンロー記載の線彫がある点、すこぶる似ている。平成２年度で、全国230余点、単独出土で不明が６割をしめるという。

## 佐久考古学会 2005年度総会開催

７月３日㈰2005年度総会および講演会が、浅間縄文ミュージアムで開催された。総会では、2004年度の会計・事業報告、および2005年度の会計・事業案の説明があり、無事承認された。

一般講演会では、林幸彦副会長が「佐久地方の原始・古代の謎」と題して講演をおこない、50名近くの参加者を得て、盛況な講演会となった。

**林副会長の講演会風景▶**

# 黒曜石は海原を越えて

## ― 矢出川遺跡の神津島産黒曜石資料 ―

堤　　隆

日本は火山国であるがゆえ、火山ガラスである黒曜石の原産地は数多くあり、白滝・置戸（北海道）、男鹿（秋田）、月山（山形）、高原山（栃木）、和田峠（長野）、柏峠（静岡）、隠岐島（島根）、姫島（大分）、腰岳（佐賀）などが知られている。太平洋上に浮かぶ神津島（東京都）も、代表的な黒曜石原産地のひとつである。

黒曜石は、原産地ごとに元素組成の違いをみせることから、遺跡から出土した石器の元素組成を測定・比較すれば、その産地がわかる。これはいわば、石材のDNA鑑定のようなものである。こうした黒曜石の原産地分析による研究は、おそらく世界の中でも日本がもっとも進んでいるものと思われる。

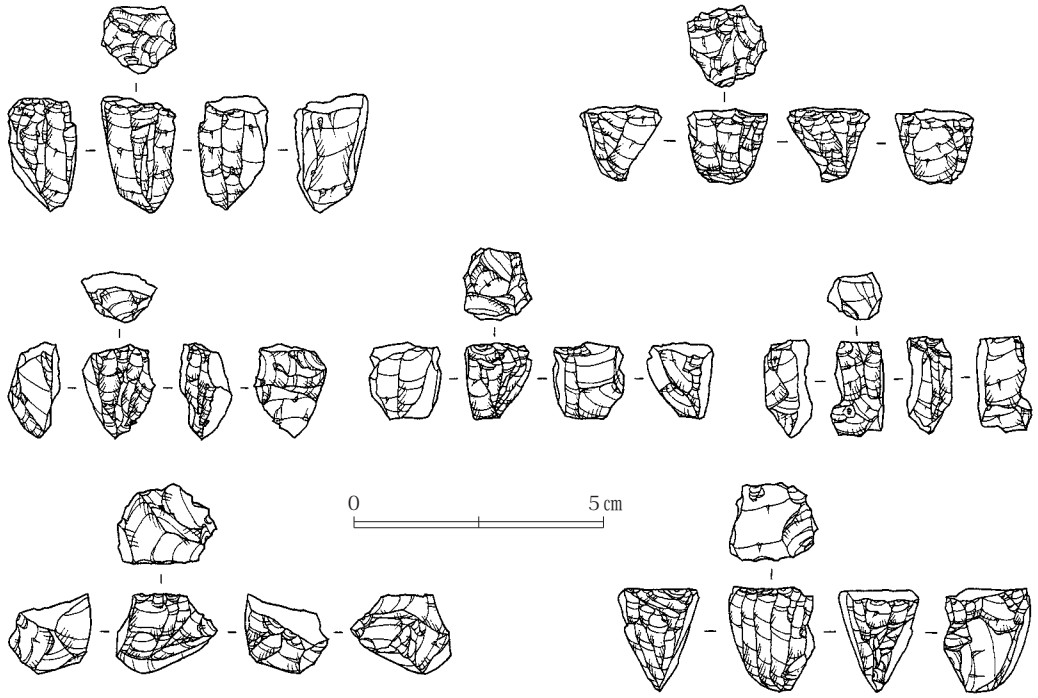
筆者らは、旧石器時代末期の矢出川遺跡の黒曜石細石刃石核等229点について、沼津工専の望月明彦研究室に依頼し原産地分析を実施することとなった。その結果、かなりの数の神津島産黒曜石が同定されたので、ここに報告しておく。

分析資料229点のうち、産地の内訳は、和田峠北の星ケ台産46点（約20%）、八ケ岳の蓼科産66点（約29%）、場所の確認されていないNK産28点（約12%）、そして神津島産78点（約34%）、それ以外が11点（約５%）、神津島産は３割強を占める結果となった。

矢出川遺跡と神津島は200㎞の距離を隔てている。また、氷河時代において海面低下が最大で140m起きたとしても、神津島と本州とは陸続きにならない。当然、航海が必要となってくる。神津島産の黒曜石の存在は、旧石器時代の舟の存在を浮かび上がらせる。

こうした最古の航海の証拠は、日本列島のみならず、オーストラリアとニューギニアを含むサフルランドへの４～５万年前の人類の移住にもみてとることができる。民博の印東道子さんによれば、２万年前、同地域ビスマーク諸島の黒曜石が少なくとも30㎞の海原を越え、つごう350㎞の距離をニューギニア北東沖のマテンベク遺跡まで運ばれており、原初的な交流システムが存在していたのではないかという。

氷河時代末期、野辺山高原にどうして神津島の黒曜石が運ばれてくることになったのか、興味は尽きない。




**矢出川遺跡の神津産黒曜石の細石刃石核**（S＝2/3　由井茂也氏蔵）

## 訃報
# 井上行雄さん、ご逝去

本考古学会の先達のお一人である井上行雄さんが、本2005年５月29日午前11時に永眠されました。享年95歳でした。

井上さんは1910年生まれ、佐久考古学会の創生期より、学会を支えて来られました。

謹んでお悔やみ申し上げます。

**中佐都家地頭１号墳での井上さん**

**中込学校での井上さん**（前列左より２人目）

佐久考古学会　シリーズ講座
# 考古学が語る大昔の佐久

佐久の考古学のエキスパートたちが、古代のナゾにせまります。浅間縄文ミュージアムと佐久考古学会の共催の講座です。

場所：浅間縄文ミュージアム　２階会議室

１回　８月７日（日）　１：30～３：00
**旧石器時代　「佐久地方最古の人びと」**
**川上村教育委員会　学芸員　長崎　治**

２回　９月18日（日）　１：30～３：00
**縄文時代　「花開く縄文文化」**
**北相木考古博物館　学芸員　藤森英二**

３回　10月16日（日）　１：30～３：00
**弥生時代「稲作を始めた人々」**
**佐久考古学会　森泉かよ子**

４回　11月13日（日）　１：30～３：00
**古墳時代「古墳が造られた時代」**
**佐久市教育委員会　冨沢一明**

５回　12月３日（日）　10：30～12：00
**奈良・平安時代「古代のムラは語る」**
**長野県埋蔵文化財センター　桜井秀雄**

**講座は申し込み制です＜定員50名＞。**
**浅間縄文ミュージアムまで、お電話でどうぞ！**

**☎ お申し込みダイヤル**
**0267－32－8922**

### ♪　編集後記　♪

近頃は、由井明さん、由井茂也さん、そして井上行雄さん、大先輩のみなさんが立て続けにお亡くなりになり、考古学会もほんとうに寂しくなってしまった。

いつもの自転車で、ナップザックを背負い、砂田からはるばる現場にかけつけてきた井上さん。白い肌着に、紺地の前掛け、唐鍬を振り上げ、若者よりずっとパワーがあった。今ごろ、早くに先立たれた奥さんと、天国で久しぶりに語り合っているのだろうか。

井上さんが残した北西の久保の五輪等は、その供養をするかのように、空を見上げている。　（堤）

**佐久考古通信　№92**

発行所　佐久考古学会
〒384-0091 小諸市御影新田1945-６
桜井秀雄　方
郵便振替　00570-9-2842
☎ 0267（22）8536

発行者　藤沢平治
編集者　堤　隆
印刷所　ほおずき書籍㈱

佐久考古学会
シンボルマーク

SAKU 佐久考古通信
佐久考古学会
ARCHAEOLOGICAL JOURNAL
2005.11.15. No.93

★ 目　次 ★

シリーズ　日本の遺跡・世界の遺跡18　北黄金貝塚　―北海道―……青野友哉……1
考古逸品　骨製大型刺突具……藤森英二……2
矢出川南遺跡採取の縄紋時代中期後葉の土器……寺内隆夫……4
先史時代における黒曜石資源の利用　―矢出川遺跡の細石刃石器群を対象として―……堤　隆……5
佐久の弥生時代洞窟・岩陰遺跡　その調査レポート　……藤森英二……8

世界の遺跡・日本の遺跡18

# 北黄金貝塚

―北海道―

北海道伊達市の国指定史跡北黄金貝塚は1948年に峯山巌により発見され、以後地元伊達高校の郷土研究部や札幌医科大学解剖学教室、伊達市教育委員会によって度重なる発掘調査がなされてきた。

これらの調査により明らかとなった遺跡の特徴は、①５箇所の貝塚の変遷から縄文海進・海退に伴う集落の移動が明らかになったこと、②14体発見された貝塚出土の縄文前期の人骨は北海道の人のルーツを明らかにしうる人類学的に貴重な資料であることなどである。

さらに、1997年に史跡整備事業に伴い湧水周辺を調査したところ、大量の礫石器が集中した祭祀場と考えられる遺構が発見され、台地上の貝塚と住居域・墓域とともに低地を含めたムラの状況が明らかになってきた。

この礫石器集中遺構は東西30m、南北15mの楕円形の範囲内に自然礫と礫石器が混在した状況である。調査面積240㎡中に1,209点の礫石器が出土している。石器の種類は北海道式石冠と呼ばれるすり石と石皿が大半である。

この遺構の性格について、調査者である伊達市教育委員会は、礫石器の99%が破損していることと、底部穿孔の可能性のある土器を含む４箇所の土器集中箇所や、安山岩のフレーク集中、線刻礫の集中など祭祀的な様相の濃い出土状況から、礫石器の廃棄に際する祭祀の場である可能性を考えている。

北黄金貝塚では台地上の貝塚や墓で、人や食糧となった動物、つまり生き物全体を弔う祭祀を行い、低地の湧水周辺では道具を弔う祭祀を行っていたのである。これらの遺構を残した縄文人の生活が祭祀と切り離すことが出来ないものであったことが想像される。

なお、遺跡は現在、史跡公園として整備され、年間約二万人の人に利用されている。

（伊達市噴火湾文化研究所学芸員　青野友哉）

北黄金貝塚の礫石器集中遺構

すり石（北海道式石冠）の出土状況

考古逸品

# 骨製大型刺突

山国信州では、骨角器の発見が貝塚のある地域程に恵まれるはずも無いが、北相木村の栃原岩陰遺跡では、それが多量に見られる。

ここに紹介する品は、その中でも最も長大なものの一つである。

シカの中足骨を縦割りし、丁寧な研磨がなされ、表面は光沢さえある。基部には直径７㎜の穿孔も見られる。同じような作りの骨角器は他にも確認されているが、ここまで見事なものは二つとない。

これが、果たしてどのような機能を有していたのか。今後の研究課題でもある。

相木川沿いの小さな岩陰である栃原岩陰遺跡は、輿水利雄、新村薫の両氏により1965年に発見された。以後、信州大学を中心とした調査団により発掘調査が行われ、主に縄文時代草創期から早期の大量の遺物が出土している。

土器や石器は無論であるが、人骨、獣骨、骨角器も実に多い。このような有機質の遺物が残されたのは、岩陰内の温度湿度が変化しにくいことに加え、当時大量に燃やした木の灰が、カルシュウム分を分解せずに保存したのが理由とされる。

ここに示した見事な刺突具は、出土層位より草創期末、表裏縄文土器の時期である可能性が高い。

この他骨角器としては、釣り針や縫い針などもある。

## Data

### 骨製大型刺突具

- 時　代：縄文時代草創期末
- 出土地：南佐久郡北相木村 栃原岩陰遺跡
- 長　さ：17㎝
- 用　途：刺突（狩猟具？）
- 特　徴：丁寧に研磨され、穿孔もある
- 所蔵・展示：北相木村考古博物館

# 具

藤森英二

ほぼ実物大の骨製大型刺突具　（写真提供：北相木村教育委員会）

# 矢出川南遺跡採取の縄紋時代中期後葉の土器

寺内　隆夫

今年度、長野県埋蔵文化財センターでは、南牧村・野辺山地区で農道拡幅工事にともなう発掘調査を行いました。場所は、矢出川の南側、飯盛山に連なる山地の末端部で、野辺山Ⅰ期（堤 1993）に遡る可能性がある石器ブロック１箇所が見つかりました。報告書はすでに刊行していますので参照してください。

ところで、ご承知の通り野辺山地区では、ご自分の土地から採取した石器や土器を保管されている方が多くいらっしゃいます。この点が、矢出川遺跡群をはじめとする遺跡の学術的な価値を高めていることは言うまでもありません。調査に参加された佐久考古学会会員の中島芳栄さんにも、コレクションの幾つかを見せていただく機会がありました。

今回紹介する資料は、同じく調査に参加された三石房子さんのお宅で保管されていた資料です。この一点を紹介する理由は、周知の遺跡範囲（矢出川南遺跡）から外れた地点の採取品であること。そして、既存の情報にはない縄紋時代中期末の土器片であること（南牧村詳細分布調査団 1993）、によります。三石さんの承諾を得て拓図を発表することとしました。

この他、三石さんが採取された資料には、矢出川南遺跡内にあるご自分の畑地や牧草地で採取した黒曜石の剥片類が多数あり、その中に縄紋土器や、弥生前期の条痕紋土器らしきものが混じっていました。

以下、縄紋中期の土器片について紹介します。

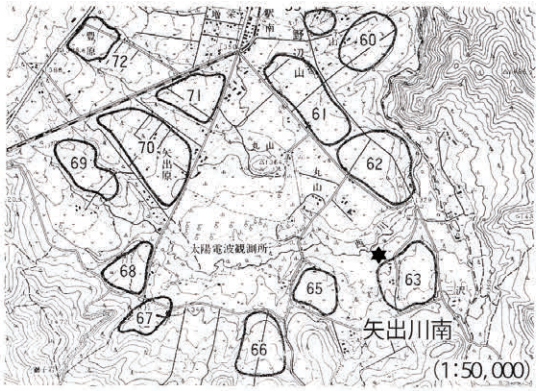



図１　採取地点（南牧村教育委員会 1993に加筆）

図２　採取土器（１２）

採取年月日：不　明
採取地点：南牧村大字野辺山二ッ山。矢出川南遺跡の周知の遺跡範囲の北西側で、矢出川に向かって傾斜する丘陵の末端部近く。現在は、牧草地となっている（図１）。
採 取 者：三石武彦氏
採取状況：農作業中。この地点は表土直下で礫層になるため野菜には不向きで、牧草地として活用しているとのことであり、包含層は深くなさそうである。
採取遺物：縄紋時代中期後葉の加曽利Ｅ４式土器口縁部直下破片（図２）。
遺物の特徴：深鉢形土器。にぶい黄褐色。白色粒や砂粒を含みずっしりとした質感がある。内面には粗い横磨きが認められる。装飾は、ＬＲ単節縄文を縦位に施文後、沈線＋磨消縄紋帯で彎曲気味に垂下する装飾を描いたと見られる。
現保管者：寺内隆夫
そ の 他：同一地点か否かは不明であるが、コレクション中には、縄紋時代と認定できる資料の一つに打製石斧がある（写真）。

南牧村の分布調査報告によると、標高1340mを越える野辺山高原に縄紋時代の遺跡が多く存在していたことがわかる。今後、高地での居住形態や生業に何らかの特色があるのか、検討を加えて行く必要があろう。

堤　　隆　1993『遠き狩人たちの八ヶ岳』
長野県埋蔵文化財センターほか2005『矢出川遺跡群』
南牧村遺跡詳細分布調査団1993『南牧村遺跡詳細分布調査報告書―縄文時代～中世―』
由井茂也　1970「野辺山高原の弥生式遺物について」『長野県考古学会誌』第９号

写真　三石氏採取資料

# 先史時代における黒曜石資源の利用

## ―矢出川遺跡の細石刃石器群を対象として―

堤　　隆

## 1　はじめに

今日、「信州ブランド」と呼ばれるような長野県の特産物の生産・開発に注目がなされているが、「最古の信州ブランド」といった場合、間違いなく「黒曜石」の名があげられることだろう。

その中でも和田峠原産地群の黒曜石は、優良かつ豊富な資源として、４万年前の後期旧石器時代初頭から利用されてきた。その利用は150～200㎞の範囲におよぶことが知られている。また和田峠に隣接する八ヶ岳原産地群の黒曜石も、やや和田峠のものより質が落ちるとはいえ、やはり４万年前から利用されたことが産地同定分析の結果などから判明している。

今日、石油資源や天然ガス資源などの資源開発や利用が、大きな社会的問題となっているが、そうした資源問題は、たとえば黒曜石利用にみるように、人類が経験した最初の時代、旧石器時代からすでに存在し、かつ人々の生存にかかわる重要な問題であった。

本研究においては、こうした点をふまえ、先史時代における黒曜石資源の利用について、八ヶ岳の裾野、南佐久郡南牧村野辺山高原にある矢出川遺跡を素材として取り上げ、検討してみたい。矢出川遺跡は現在国史跡に指定されており、昭和28年、地元研究者由井茂也や芹沢長介・岡本勇らによって、日本で初めて細石刃石器群の存在が確認された遺跡として重要であるとともに、後述するようにその遺物量でも国内有数で、検討材料としても適しているものと考えられる。

なお、本研究は、「先史時代における黒曜石資源の開発と利用」をテーマとし、財団法人長野県科学振興会より平成17年度に堤隆に交付された科学振興助成金の成果によるものである。

ここに掲載した矢出川遺跡の細石刃石核は、地元川上村の由井一昭氏が多年にわたり採集されたもので、その実測図は、今回の助成金により長野県考古学会の鳥居亮氏に作図いただいたものである。

## 2　矢出川遺跡群

長野県八ケ岳野辺山原の後期旧石器時代遺跡は、標高1,200から1,300m地帯の矢出川や西川といった主に中小河川流域に群集する。矢出川遺跡を含む流域遺跡群は、矢出川遺跡群として把握されている。

日本の細石刃遺跡の地理的背景を論じた鈴木忠司は、国内482個所の遺跡において、100m以内の地域に245遺跡（51%）が、200m以内になると372遺跡（77%）があり、圧倒的多数が200m以下の低標高地域に集中することを指摘している。一方、1,000m以上の高標高地域に遺跡が集中するのは、長野県のみで23遺跡がそれに該当、国内の遺跡数全体の５%に満たない数だという。したがって日本の細石刃文化の生活空間（領域）と土地利用形態は「低地・平坦地（平野）型＝平原型」を原則とすると結論する（鈴木 1983）。つまり野辺山高原にみられる「高地・平坦地型＝高原型」の立地はきわめて特殊な例ということができる。

## 3　細石刃石核類

日本の細石刃遺跡のうち、細石刃を取る母体となった細石刃石核について、出土点数の明確な国内の622遺跡をみると、およそ９割にあたる537遺跡（86%）は細石刃石核の出土が９個以下で、10個以上が55遺跡（９%）、30個以上が13遺跡（２%）、50個以上が10遺跡（２%）、100個以上が７遺跡（１%）という統計となる（堤 2004）。通常の遺跡では、細石刃石核は10点に満たない数しかないということになる。

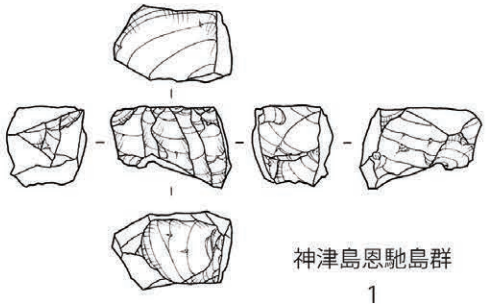
細石刃石核の多数出土遺跡の国内ベスト３は、長崎県泉福寺洞穴の743点、ついで矢出川遺跡の644点、鹿児島県加栗山遺跡の349点という順となる。

矢出川遺跡の細石刃石核の大量出土は何を意味するのか。その理由としては、①石器の数に比例し一度に大勢の人々が矢出川に集結したのか、②繰り返しこの地が利用された結果の集積として石器の数の多さを生み出したのか、あるいは③なんらかの理由で多量の石器がストックされることになったか、が考えられる。

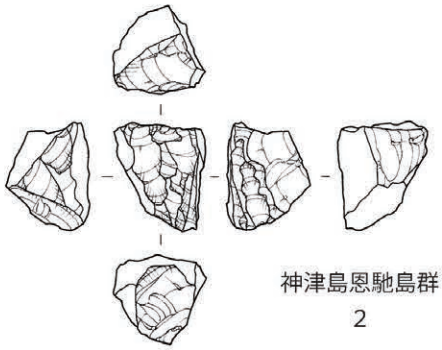
この中では①の可能性は低いものと考えられる。こうした多数の細石刃石核出土遺跡は、細石刃遺跡の分布集中地域に１から数遺跡程度存在しており、細石刃文化遺跡の総数からすれば数%に満たないその存在状況からは、通常の居住・消費地遺跡とは異なり、おそらくは③の理由、細石刃生産のための石核もしくは石核原材の補給基地としての機能を果していたことが想定される。

## 4　細石刃石核（第１図、第１表）

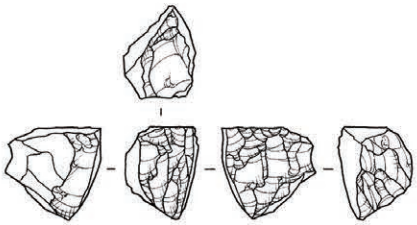
本稿では10点を図示し、その属性を記載する。いずれも由井一昭氏所蔵の黒曜石の細石刃石核である。これらの資料の中で、細石刃剥離のための打面についてみると、２が上下両側に設けられた両設打面である以



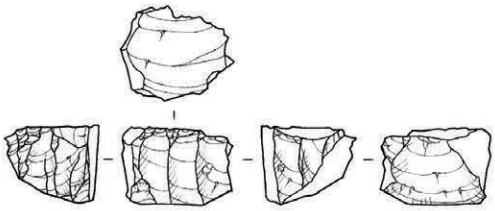
神津島恩馳島群
1



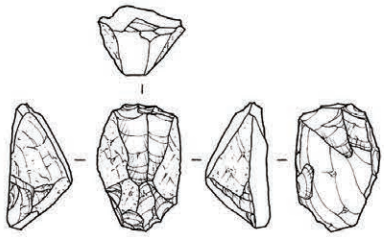
神津島恩馳島群
2



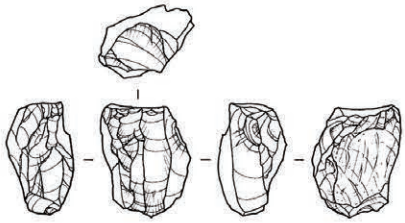
不明ＮＫ群　3



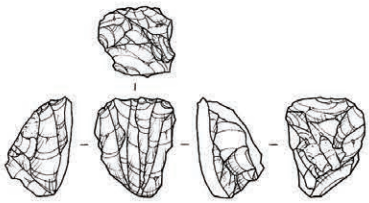
蓼科冷山群　4



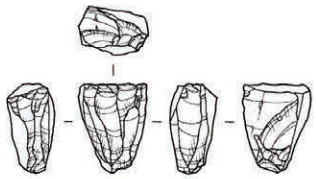
蓼科冷山群　5



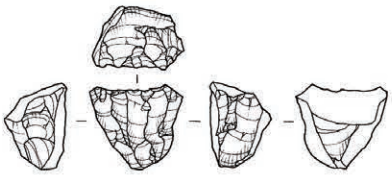
諏訪星ケ台群　6



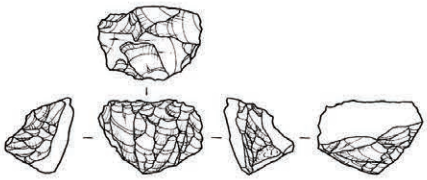
不明ＮＫ群　7



神津島恩馳島群　8



神津島恩馳島群　9



神津島恩馳島群　10

0　2：3　5cm

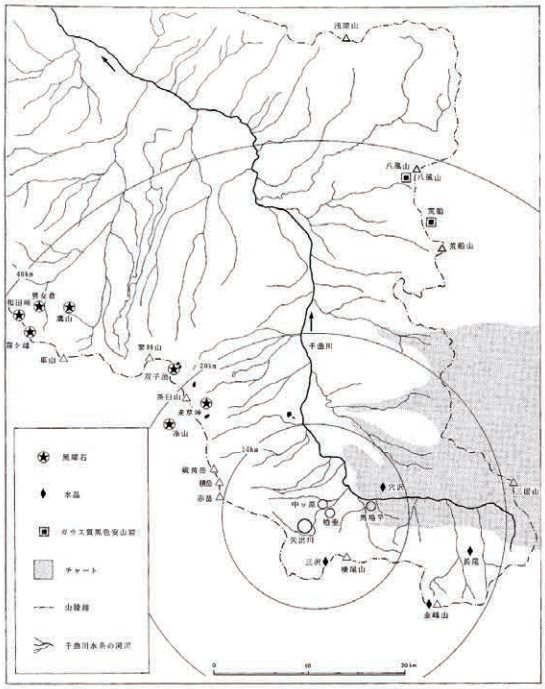
第１図　矢出川遺跡の細石刃石核（由井一昭氏所蔵）

第１表　矢出川遺跡　細石刃石核　一覧（由井一昭氏蔵）

| 番号 | 器　種 | 石材 | 産　地 | 高さmm | 幅mm | 厚さmm | 重量g | 打　面 | 打面細部調整 | 頭部調整 | 分析番号 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 細石刃石核 | 黒曜石 | 神津島恩馳島群 | 16.0 | 24.0 | 16.0 | 6.2 | 単剥離面打面 | なし | 有 | 83 | |
| 2 | 〃 | 〃 | 神津島恩馳島群 | 21.5 | 18.0 | 17.0 | 5.3 | 〃 | 〃 | 〃 | 84 | 両設打面 |
| 3 | 〃 | 〃 | 不明ＮＫ群 | 18.3 | 9.5 | 19.0 | 4.4 | 〃 | 〃 | 顕著 | 85 | |
| 4 | 〃 | 〃 | 蓼科冷山群 | 15.2 | 21.8 | 18.8 | 6.0 | 〃 | 〃 | 有 | 86 | |
| 5 | 〃 | 〃 | 蓼科冷山群 | 25.0 | 16.5 | 13.0 | 4.5 | 複剥離面打面 | 〃 | 〃 | 87 | |
| 6 | 〃 | 〃 | 諏訪星ケ台群 | 22.5 | 17.8 | 14.0 | 5.2 | 単剥離面打面 | 〃 | 〃 | 88 | |
| 7 | 〃 | 〃 | 不明ＮＫ群 | 19.3 | 15.3 | 13.5 | 3.3 | 複剥離面打面 | 有 | 〃 | 89 | |
| 8 | 〃 | 〃 | 神津島恩馳島群 | 17.6 | 13.5 | 9.5 | 2.2 | 〃 | 〃 | 〃 | 90 | |
| 9 | 〃 | 〃 | 神津島恩馳島群 | 17.0 | 18.5 | 12.0 | 3.0 | 〃 | 顕著 | 顕著 | 91 | |
| 10 | 〃 | 〃 | 神津島恩馳島群 | 14.5 | 20.5 | 14.0 | 3.5 | 複剥離面打面 | 有 | 有 | 92 | |

外は、いずれの資料も単設打面である。打面の状態は、単一の剥離から構成される単剥離打面のもの（１～４、６）、複数の剥離から構成される複数剥離打面のもの（５、７～10）の双方がある。打面細部調整は、９のように顕著なものがあるが、１～６の資料ではなされていない。頭部調整はすべてにみられ、３や９のように顕著なものもある。

これらの資料の黒曜石については、沼津高等工業専門学校望月明彦教授に依頼し、蛍光Ｘ線分析によって産地を同定した。その結果、和田峠原産地群と呼称される中に含まれる諏訪エリア星ケ台群の黒曜石が１点（６）、八ケ岳原産地群と呼称されるなかに含まれる蓼科エリア冷山群の黒曜石が２点（４、５）、神津島エリア恩馳島群が５点（１、２、８、９、10）であった。また、産地の所在がわかっていない不明ＮＫ群も２点（３、７）あった。




第２図　八ヶ岳東麓を中心とした石材環境と旧石器時代遺跡群

蓼科エリアと推定された資料には、５のように両側面に平坦な自然面を残すものがあり、ピンポン玉大程度だろうか、小形の原石を選択し、素材としている。

## 5　矢出川遺跡における黒曜石資源の利用

矢出川遺跡の細石刃石器群は、較正年代にして17000～18000年前の年代が与えられるものと考えられよう。その黒曜石資源の利用の特色を列記する。

まず、原産地別の黒曜石資源利用では（第２図）、20kmの距離にある八ケ岳原産地群、40kmの距離にある和田峠原産地群とならんで、200kmしかも太平洋をへだてた神津島の黒曜石が遺跡に持ち運ばれていることが、産地分析の結果からわかった。なぜそのような現象が起きているのかは、解釈に困難を要する点であり、今後説明が必要となる部分であろう。

黒曜石の資源採取の点では、細石刃段階では、縄文時代のような採掘坑を穿つような状況は認められず、おそらく転石を利用したものと考えられる。今回の資料中にも、原石面を残すものがあり、おそらくピンポン玉程度から、拳の半分ほどまでの大きさで、小なものが選択され、搬入されているものと考えられる

矢出川では、細石刃の大半（９割以上）が黒曜石で製作されており、黒曜石資源を重視した石材利用戦略がとられていたことがうかがえる。これは、シャープな刃部を希求した細石刃に、黒曜石という素材がもっともふさわしいものだったことを物語っている。

引用参考文献

鈴木忠司　1983「日本細石刃文化の地理的背景」『角田文衛博士古稀記念古代学叢論』古代學協会

堤　隆　2004『氷河時代を生抜いた狩人　矢出川遺跡』新泉社

本論は、堤隆が、財団法人長野県科学振興会より平成17年度に助成を受けた、「先史時代における黒曜石資源の開発と利用」の研究成果である。

# 佐久の弥生時代洞窟・岩陰遺跡跡

―その調査レポート―

藤森　英二

## 1　弥生時代の洞窟遺跡？

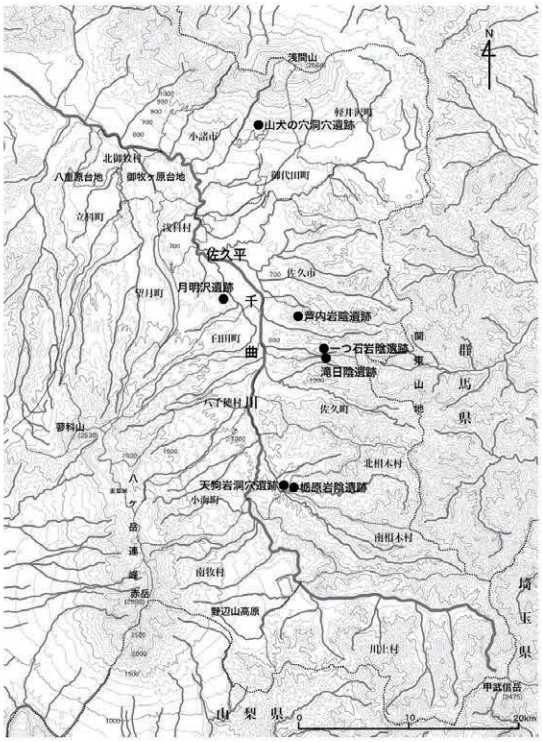
本誌№81に「佐久の洞窟・岩陰遺跡」というレポートを書かせていただいた（藤森 2001）。それからもう随分時間も経過していたが、今年になって、たまたまそれを目にした大学時代の同級生馬場伸一郎君から「佐久の洞窟遺跡をテーマに発表をして欲しい」と依頼があった。私の不勉強さを良く知る彼の勇気には敬意を表したいが、よく聞けば、それは「中部弥生時代研究会」という、歴とした研究会の例会であるという。一応縄文時代を専門にしている自分にとっては、かなり荷が重い課題であるが、当初は深く考えもせず、安請け合いをしてしまったところが若さ（？）と馬鹿さである。結果的に、例会の場にふさわしい発表には至らなかったが、久しぶりに楽しい体験でもあった。この時の成果は当日の発表資料としてまとめてあるが（藤森 2005）、ここでは発表に盛り込めなかった、多くの方々のご協力なども紹介し、佐久の洞窟・岩陰遺跡の現状について書き留めておきたい。

## 2　遺跡の再確認

佐久の弥生時代を知るには、本会刊行の『赤い土器を追う』や、各市町村誌、報告書、各種レポートや論考と材料は多い。しかし、如何せん佐久の弥生遺跡は次々と調査され、日に日に資料が増えている。最新の成果全てを把握するのはなかなか困難である。ぜひ本誌や本会のホームページを活用していければと思った。

それはさておき、前述のレポート（藤森 2001）でも、一通り佐久の洞窟・岩陰遺跡は捉えたつもりだったが、もう一度、弥生時代の遺跡という視点で文献を洗い直した。その結果、対象となりそうな遺跡は以下の通りとなった（第１図）。

・北相木村　栃原岩陰遺跡
・小海町　天狗岩洞穴遺跡
・佐久市（旧臼田町）　芦内岩陰遺跡
・佐久市（旧臼田町）　一つ石岩陰遺跡
・佐久市（旧臼田町）　滝日陰遺跡
・佐久市　月明沢遺跡




第１図　弥生洞窟・岩陰遺跡位置図
（市町村は合併前のもの）

・御代田町　山犬の穴洞穴遺跡

これらの遺跡について、とりあえず文献から調べていったが、実際に現地を知らない遺跡もあり、また遺物についても図や写真が確認出来ないものも多い。そこで出来るだけ現地を訪ねたり、あるいは遺物を実見するために各所を巡ってみた。以下、その結果をまとめておく。尚、御代田町山犬の穴洞穴については、案内して下さった渡辺重義氏に敬意を表し、個別に紹介する。

## 3　遺跡・遺物の紹介と現状

・北相木村　栃原岩陰遺跡

縄文時代の岩陰遺跡として著名であるが、そもそも1965年の発見は本会にもおられた輿水利雄氏と新村薫氏による。八ヶ岳起源の泥流を千曲川の支流相木川が削った複数の岩陰からなり、標高は約930mである。この栃原岩陰遺跡と次に紹介する小海町天狗岩洞穴遺跡は、ともに相木側右岸の県道脇に位置しているため、文献を手に現地を訪れれば誰でも確認出来る。

このように八ヶ岳起源の泥流が河川によってうがたれた洞窟・岩陰は、小海町と南北相木に無数に存在している。利渉幾多郎氏の調査によれば、その数は北相木村内だけで大小200に及ぶ（利渉 2001）。

さて遺跡は前述のように複数の岩陰からなるが、遺跡東北部の岩陰（天狗岩岩陰・写真１）では1999年の

写真１　北相木村　栃原岩陰遺跡・天狗岩岩陰部
（2005. 4. 17）

第２図　栃原岩陰遺跡　細密条痕文土器（S＝1:2）

試掘調査で縄文前期・中期、弥生、古代、中世、近世と時代幅の広い遺物が確認された（藤森 2002）。このうち弥生時代の土器について、報告書では出土した３点とも「中期から後期」としたが、その報告をした私自身がこの時期決定に自信が持てず、この機会に佐久市教育委員会の冨沢一明氏と森泉かよ子氏に見ていただいた。結果一部の資料について、佐久市東五里田遺跡や、ちょうど整理作業の行われていた下信濃石遺跡の氷Ⅱ式に伴う細密条痕文土器と良く似ているとご指摘を頂く。確かに、胎土、条痕ともに良く似ている。よって報告書を訂正し、この土器を縄文時代晩期の最末、若しくは弥生時代前期としておきたい（第２図）。尚、この天狗岩岩陰の開口部は現状で幅約10m、高さ約６m、奥行約９m。河床面との比高約20mである。

・小海町　天狗岩洞穴遺跡

前述の栃原岩陰遺跡の約１㎞下流に位置する。やはり泥流の分布域で、相木川が浸食した複数の岩陰部が連なる。調査を行った岩陰部では、最深部までの奥行きが10mを超える（写真２）。

本会の堤隆氏や中沢道彦氏をはじめとした有志の調査団が1995年に発掘調査を行った（天狗岩洞穴発掘調査団 1999）。この調査では平安時代の遺物の他、弥生後期と思われる文化層を確認している。灰層に伴う多量の獣骨の中にはカットマークのあるものも見られる。この他弥生後期の土器片、黒曜石の有茎石鏃、安山岩のヘラ状石器、加工痕のあるシカ角、骨鏃、イモガイ製装飾品などが出土。調査団では「弥生時代のハンティングキャンプなどとして利用され、動物などの解体がおこなわれた可能性がある」としている。

・佐久市（旧臼田町）　芦内岩陰遺跡

千曲川東側に連なる関東山地の西端。西方の沖積地に向かって伸びる狭谷の南斜面に位置する。

『信濃史料　第一巻』には縄文前期の土器等とともに「箱清水式―甕」、さらに時期は分からないが「犬の歯・骨・川真珠多量の灰中より出土」ともある。その後、大場磐雄・八幡一郎両氏も調査を行ったが、その記録は紛失してしまったらしい。

この後1964年に本会の藤沢平治会長も参加し発掘調査がなされた（樋口・藤沢 1966）。しかし弥生時代の遺物については確認されなかったようである。それでも遺物は藤沢会長から長野県立歴史館に寄贈されたということで、もしやの期待を込め、同館の川崎保氏にお願いし実見させていただくこととした。結果、やはり弥生時代の資料を目にすることは出来なかったが、縄文時代の貴重な資料は確認することが出来た。

現地については、藤沢会長とともに2002年に遺跡を訪れていた冨沢氏に地図と写真、そして「行けば大体分かりますよ」という力強いお言葉をいただいていた。しかし、実際は現地近くで農作業をされている方にお聞きしつつ、ようやくたどり着くことが出来たといったところだった（写真３）。標高は約1,000m。前面に

写真２　小海町　天狗岩洞穴遺跡（2005. 4. 17）

写真３　佐久市　芦内岩陰遺跡（2005. 4. 19）

は幅１m程の吉沢川が比高５mのあたりを西に流れる。開口部は1964年の調査時で、幅1.75m、奥行き2.5m、高さは最大2.4m程であった。

・佐久市（旧臼田町）一つ石岩陰・滝日陰遺跡

関東山地西側を西流する谷川の最上流右岸、山麓の小さな台地に孤立した高さ約８mの巨岩の周辺に遺物がみられたという。これが一つ石岩陰遺跡である。標高は約1,000m。『臼田町遺跡詳細分布調査報告書』（臼田町遺跡詳細分布調査団 1988）には、既出遺物として縄文、古代、中世の土器の他に、弥生後期の「箱清水式土器」と記載されている。

一方、一つ石岩陰の対岸、山麓傾斜地に位置するのが滝日陰遺跡で、折り重なった岩塊中の小岩陰とされる。縄文前期土器と「箱清水式土器（簾状文）」が既出遺物として記載されている（臼田町遺跡詳細分布調査団 1988）。

この一つ石岩陰と滝日陰遺跡について、島田恵子氏によれば、出土品に「赤色塗彩土器」も含まれていたらしい。また井出正義氏は「（群馬県側に抜ける）田口峠を越える弥生人たちのキャンプ地」とし、三石延雄氏は「狩猟を第一の目的としたキャンプ地」という以外に、土器の赤色塗彩の混入物採集地点の可能性を挙げた（いずれも『赤い土器を追う』より）。但し遺物については、分布調査等の資料を保管する佐久市臼田文化センターでも見つけることが出来なかった。一部は「三石延雄氏所蔵」とあるが、私が縄文時代担当ということで関わっている『臼田町誌』の調査の中で確認出来ればと思う。また、今回現地は確認していない。

・佐久市　月明沢遺跡

八ヶ岳北端蓼科山起源の火山噴出物の末端で、その足下は千曲川の支流片貝川の沖積地に接する。東流する沢や小河川が岩肌を浸食し、遺跡はこうして出来た岩陰群に含まれるとされる。

1965年、地元の有志により10数体分の人骨、土器、石斧、鹿角等が発掘されたが、このうちの一部を信州大学医学部で鑑定。その後1971年に西沢寿晃氏、小松虔氏らによって発掘調査された（西沢・小松 1978）。この時の調査でも、土器片の他、抜歯や焼かれたものを含む人骨、穿孔された人歯が出土した。また出土した土器について報告者は「貝殻腹線による条痕文土器」としている。標高約730mで河床からの比高は約20m。ほぼ東向きに開口し、幅約４m、奥行きは約1.5mであるとする。

この佐久市月明沢遺跡について、残念ながら今回遺物は確認出来ていない。某所にあるはずという噂は聞くが、貴重な人骨資料を含むだけに、いつの日かぜひ見てみたいものである。さらに現地については、佐久の重鎮林幸彦氏にお聞きするも、数年前の踏査で確認出来なかったとのことなので、今回は断念。とにかくこの遺跡は重要なだけに、今後要注意である。

## 4　浅間山山麓の岩陰―山犬の穴洞穴遺跡

さて、最後に紹介するのは御代田町山犬の穴洞穴遺跡であるが、この遺跡のみは浅間山麓に存在する。佐久の同地域では、現在のところ唯一の岩陰・洞窟遺跡とも言われている。地図上では標高約1,250mの小さな尾根の東斜面にある。

御代田町教育委員会の小山岳夫氏と堤隆氏のお話しでは、実際に発掘を行い全てを把握されているのは本会にも居られる渡辺重義氏であるとのこと。そこでお電話をしてみると、1974年に氏が中心となり発掘を行い、その後も森嶋稔氏や関孝一氏・水沢教子氏らを迎え３回ほど調査を行っているという。さらに話しの途中で「ぜひ、現地へ行きましょう！」となり、その場で日取りを決め、案内をお願いした。

しかし、当日の朝はあいにくの小雨。てっきりこれは無理かと決めていた私は、念のため渡辺氏にお電話を入れた。すると「なに、これくらいの雨。さあ、行きましょう！」というお返事。あわてて家を飛び出した。

御代田駅で渡辺氏と待ち合わせ、車で現地に向かう。

写真４　浅間山中の岩陰

写真５　浅間山中の豊かな湧水

写真６　御代田町　山犬の穴洞穴遺跡（2005. 4.11）

著名な真楽寺や塩野西遺跡群を通り越し、浅間南麓の標高1,000mを越えるあたりまで車を進めた。車を降り渡辺氏の記憶に従い山中を進む。幸い雨はほとんど止んでいたが、似たような風景が続き、すんなりとは見つからない。さらに渡辺氏は「この時期は平気と思うけど」と言いつつも、小さな尾根を越える時など要所要所でクマよけの火薬ピストルを鳴らす。無事生還出来るのか？という不安が胸をかすめた（ちなみにこのピストル、踏査の途中で落としてしまい増々不安は募るのだが、なんと落としたそれを一時間も後に発見するという奇跡を、渡辺氏は起こしている！）。

しかしこの道程で、浅間山麓の溶岩地帯には、豊かな湧水や数多くの岩陰地形が存在することを確認出来た（写真４・５）。私にとっては思わぬ収穫であった。

結局山に入ってから２時間以上経過しただろうか、ついに渡辺氏の記憶にある場所に到達。間違いなくそこが山犬の穴洞穴遺跡であった。現在の開口部は幅約2.5m、高さ約1.2m、奥行き約３m。遺物が出土した場所も渡辺氏に教えていただいた。必要な記録と写真を撮り、無事目的を果たすことが出来た。やはり遺跡は現地に立たないと、図面や人づての話しからのイメージでは情報不足であることを再確認する（写真６・７・８）。

下山後、渡辺氏のお宅でお茶をごちそうになりつつ、出土遺物を見せて頂いた。時期の分かる資料としては、縄文前期前半の土器底部の他、弥生中期後半栗林式の土器片があり、さらに弥生中期後半から後期と思われる土器の底部が見られた（写真９・10）。小型剥片石器も数点出土しているが、帰属時期は判断しがたい。また動物骨も豊富で50点程はあった。

## 5　まとめ

さて、一連の調査から生じた見解や今後の課題に付いては、前述の研究会の発表資料（藤森 2005）を参考にしていただきたいが、ここでは時期的な傾向についてのみ簡単にまとめておく。

写真７　山犬の穴洞穴内部

写真８　山犬の穴洞穴を調査された渡辺氏

・弥生時代前期末～中期前半

特に佐久地域南部においては、弥生再葬墓の可能性がある遺構・遺物が佐久市唐松Ｂ遺跡・佐久穂町館・中原遺跡等複数で見られることと、洞窟・岩陰を利用した再葬墓関連遺構（佐久市月明沢遺跡）が見られることが合致する。これは峠を越えた群馬県などでも同様であるが（外山他 1989）、この墓を残した人々の生活址の検出は、今後の大きな課題である（石川他 2004）

・中期後半以降

小海町天狗岩洞穴遺跡の例に代表される様に、キャンプ地的な利用の可能性が高いとされる。但し、その利用者が所謂「山住み」の民であったのか（小山 1998）、または水田稲作民であったのかは、意見が分かれるところである（山内 1995）。いずれにせよ、弥生時代と言えど山間部の食料は必要であり、また山を跨いだ移動もあり得たということであろう。

## 6　おわりに

読んで頂ければお分かりのように、やはり考古学は一人では出来ない。特に私のように、生まれも育ちもよその土地の人間にとっては、人の輪は大切な財産である。佐久に来て本当に良かったと思う。今後、まだ多くの洞窟・岩陰を有する佐久の地で、総合的な調査

写真９　山犬の穴洞穴出土土器　弥生中期～後期(?)

写真10　山犬の穴洞穴出土　弥生中期栗林式土器

を行いたいと考えている。ぜひまた多くの方のお力をお借りしたい。

最後に、この調査において、私のような半端な研究者にもお力添えをして頂いた多くの方々に、改めて御礼を申し上げます。

井出正義・臼田武正・大竹幸恵・川崎　保・勝見譲・小山岳夫・堤　隆・冨沢一明・中沢道彦・長谷川福次・馬場伸一郎・林　幸彦・樋口昇一・藤沢平治・水沢教子・森泉かよ子・渡辺重義（敬称略）

主な引用・参考文献


石川日出志他　2004「特集「再葬墓」研究の現状と今後の課題」『考古学ジャーナル』№524

臼田町遺跡詳細分布調査団　1988『臼田町遺跡詳細分布調査報告書』 臼田町教育委員会

大場磐雄監修　1956『信濃史料第一巻　上・下』信濃史料刊行会

小山岳夫　1998「第二編古代　第一章弥生時代」『御代田町誌　歴史編上』御代田町誌刊行会

佐久考古学会編　1990『赤い土器を追う』佐久考古学会

島田恵子　1998「第五章　弥生時代」『南佐久郡誌　考古編』長野県南佐久郡誌刊行会

外山和夫・宮崎重雄・飯島義雄　1989「再葬墓における穿孔人歯骨の意味」『群馬県立歴史博物館紀要』第10号　群馬県立歴史博物館

西沢寿晃・小松　虔　1978「長野県佐久市月明沢遺跡発掘資料について―人歯牙加工品の出土―」『長野県考古学会誌』31号　長野県考古学会

天狗岩洞穴発掘調査団（中沢道彦・堤　隆）　1999「天狗岩洞穴の発掘調査―弥生時代の洞穴利用―」『佐久考古通信』№75　佐久考古学会

樋口昇一・藤沢平治　1966「長野県南佐久郡臼田町芦内岩蔭遺跡調査概報」『信濃』18－11

藤森英二　2001「佐久の洞窟・岩陰遺跡『佐久考古通信』№81　佐久考古学会

藤森英二　2002『国史跡　栃原岩陰遺跡・天狗岩岩陰―保存整備事業に伴う発掘調査報告書―』北相木村教育委員会

藤森英二　2005「長野県佐久地域の弥生時代洞窟・岩陰遺跡」『中部弥生時代研究会　第10回例会発表要旨集』中部弥生時代研究会

山内利秋　1995「洞穴遺跡の利用形態と機能的変遷―長野県湯倉洞穴遺跡を例として―」『先史考古学論集』第４集

利渉幾多郎　2001「ノッチの形成史から復元される古水文史―長野県千曲川上流，北相木川のノッチと段丘を例に―」『第四紀』33


♪　編集後記　♪

少し前の話しになるが、ある夕暮れ時、長野県立歴史館で資料見学をした後、車で我が家に向かっていた。佐久市某所を通過するとき、数箇所の土の山と赤白のポールが見えた。発掘現場だった。すでに午後６時を過ぎ、人はいないかと思ったが、本会会員でもある某氏が調査トレンチをのぞき込んで写真を撮っていた。偉そうに資料見学なんて気取っていた自分が少し恥ずかしかった。オレンジ色に染まった光景はすぐに視界から消えてしまったが、目を閉じれば思い出すことが出来る。こうやって日本の考古学は支えられている。

（藤森）


佐久考古通信　№93

発行所　佐　久　考　古　学　会

〒384-0091 小諸市御影新田1945-６
桜井　秀雄　方
郵便振替　00570-9-2842
0267（22）8536

発行者　藤　沢　平　治

編集者　藤　森　英　二

印刷所　ほおずき書籍㈱

佐久考古学会
シンボルマーク

SAKU 佐久考古通信
佐久考古学会
ARCHAEOLOGICAL
2005.12.27. No.94・95合併号
JOURNAL

# 由井茂也顧問　追悼号

**私たちは由井さんのことをいつまでも忘れないでしょう**

**執筆者**　井出正義、臼田武正、大竹憲昭・大竹幸恵、桐原健、小山岳夫、桜井秀雄、柴田直子、島田恵子、鈴木忠司、芹沢長介、鈴木千里、藤沢平治、戸沢充則、堤　隆、林幸彦、平野雅子、藤田有利子、藤森英二、松谷幹子、宮下健司（50音順）

## 由井茂也（ゆいしげなり）さんのあゆみ

**1905（明治38）年　0歳**　1月23日、川上村御所平に由井保平の末子として生まれる

**1917（大正6）年　13歳**　尋常小学校卒業後、家業を手伝う

**1926（昭和元）年　20歳**　新潟の無産農民学校で学ぶ

**1930（昭和5）年　25歳**　御牧ケ原大運動会で反戦・天皇正反対・治安維持法反対などのビラをまく

**1937（昭和12）年　32歳**　群馬妙義町島田芳江と結婚。

**1942（昭和17）年　37歳**　長女伴子誕生

**1944（昭和19）年　39歳**　長男猛也誕生

**1946（昭和21）年　41歳**　次女明子誕生

**1947（昭和22）年　42歳**　川上村村議会議員当選、議長となる

**1949（昭和24）年　44歳**　次男茂樹誕生

**1953（昭和28）年　48歳**　馬場平遺跡の調査。矢出川遺跡で日本発の細石器の発見

**1954（昭和29）年　49歳**　矢出川遺跡の第1次調査

**1965（昭和40）年　60歳**　川上村文化財保護委員

**1973（昭和48）年　68歳**　佐久考古学会長となる

**1980（昭和55）年　75歳**　長野県考古学会より藤森栄一賞受賞。野辺山シンポジウム

**1981（昭和56）年　76歳**　長野県教育委員会より教育功労者表彰。野辺山シンポジウム

**1985（昭和60）年　80歳**　長野県考古学会矢出川遺跡保存対策委員長となる

**1992（平成4）年　87歳**　文部大臣より地域文化功労者表彰

**1993（平成5）年　88歳**　『草原の狩人ー由井茂也日記抄ー』刊行。文部大臣表彰と出版を祝う会

**1995（平成7）年　90歳**　矢出川遺跡国史跡指定

**2003（平成15）年　98歳**　矢出川遺跡発見50年

**2004（平成16）年　99歳**　白寿。11月、100歳を祝う会

**2004（平成16）年　12月27日**、享年100歳にて逝去

**昭和28年馬場平遺跡の調査**
右から由井、岩崎卓也、麻生優、芹沢長介、吉崎昌一、ひとりおいて戸沢充則

**昭和29年矢出川遺跡の調査**　（中央:芹沢　右端:由井）

**昭和32年直良信夫と雨の三国峠で**

# 闘士として
## ― 由井茂也の半生 ―

※　※　※　※

日露戦争勃発、日本海海戦前夜の明治38年１月23日由井茂也は川上村御所平に生れた。

この文章は1992年夏、由井茂也が静かに語ってくれた半生のエピソードの幾つかを短く構成し『佐久考古通信』№56号で紹介したものを、再録したものである。

□

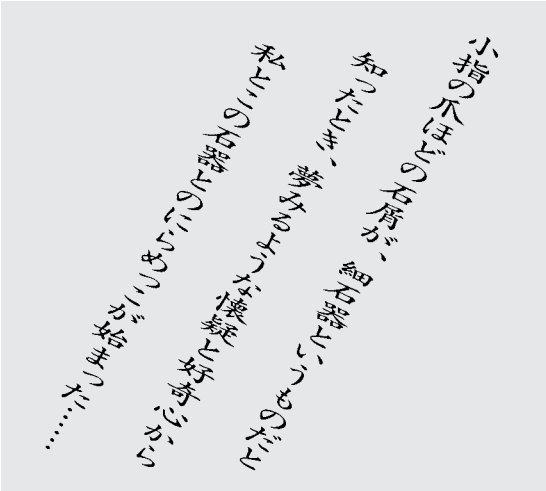
『信州少年』。13、14歳頃の多感な少年であった私の心をくすぐった雑誌があった。史跡や名勝の紹介・科学的な読み物などどれも少年の好奇心を満たすのに十分であったが、そのなかでの遺跡の散策や遺物の採集の記事が、思えば私を考古学へと導いた糸口であったのかもしれない。かつての県知事であった林虎雄や下伊那で自主青年連盟に身をおいた羽生三七なども『信州少年』の常連の投稿者であった。

それは大正年間のことである。寒村の川上で雑誌など買えようはずもない。長野や甲府にいった知人に購入を頼んだり、月遅れのものを東京の古本屋から郵送してもらい購読したことを憶えている。

□

時代が大正から昭和へと変わるそのとき、私はちょうど二十歳を迎えた。その頃農村は貧困化し苦しい農民生活の実感はつのるばかりで、私の中でしだいに社会問題への関心が高まっていった。その折り、新潟県木崎村で４年越しの小作争議の結果無産農民学校が誕生したことを知り、これに学ぶべく新潟へと旅立った。

木崎争議から学んだ、農民の自立と団結という貴重な教えを、「北越の農村から」という文章にして東信新報に投稿したのはその後であるが、この信州の片田舎




での農民への自立の呼びかけは、これが最初のものであったと思う。

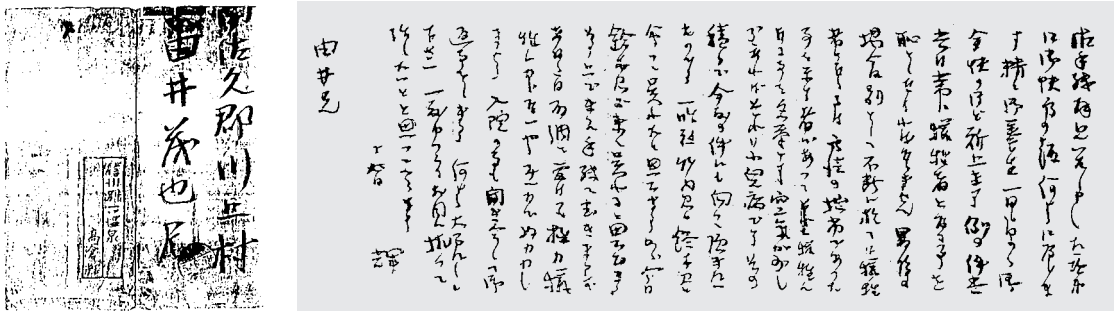
プロレタリア文学者で農民運動の指導者でもあった高倉輝を招いて川上の青年団で話をしてもらったのはその数年後のことである。演題は農村の貧困問題についてで、200名を越える聴衆が会場を埋めた。昭和５年御牧ケ原の事件の際、別所温泉に身を置いていた高倉が、私の身を案じてよこした書簡は今でも大切にしまってある。

※　※　※　※

ここで、昭和５年に由井茂也が竹内圀衛らと結んで行なった御牧ケ原大運動会での反戦ビラの撒布事件について紹介しておこう。それについては、大井隆男の『農民自治運動史』に詳しい。

「竹内圀衛が腹案をもって瓢然と川上村の由井茂也を訪れたのは昭和５年５月のことであった。二人で反戦プランを練った。機会は５月27日、竹内の生地＝御牧ケ原で挙行される大運動会に反戦のビラを撒こうというのである。この運動会は日露戦役最大の勝利＝日本海海戦を記念して行なわれたもので、北佐久郡下の全小学校尋常科３年以上が参加した。昭和５年は第25回にあたり、参加児童１万人観衆３万人、海軍中将中島資朋の参列もあった。

**御牧ヶ原大運動会**



**高倉輝からの手紙**

別所温泉にいた社会主義活動家高倉輝からの由井あての手紙。昭和５年６月19日の消印がある。由井の身体を気づかう書き出しで、社会主義運動で犠牲となる風潮があるが、それ自体は小児病のようなもので決して好ましい事ではなく、極力犠牲となる事を避けてほしい旨が記してある

由井と竹内は文案を練り、由井が原紙を切り、柳沢恰（あたか）が印刷、①治安維持法反対・②軍国主義反対・③帝国主義反対・④天皇制打倒・⑤戦争を記念する運動会の廃止の５項目を盛込んだ反戦ビラが作られた。竹内の回想によると運動競技に見とれている観衆の隙をうかがい風呂敷や脱いだ上着のポケットにビラを忍ばせたのだという。問題はこれに止まらなかった。運動会に出席した中島中将は引き続き小諸小学校講堂で講演したが、この時玄関に脱いだ彼の長靴から反戦ビラが発見されて大騒ぎになったのである。犯人は小諸署の厳重な捜査の結果柳沢恰ということが判明し、警官６名が柳沢宅を包囲して逮捕、１週間ほど拘留されて厳しい尋問を受けた。彼はビラは自分が書いたと主張して最後まで口を割らず、官憲側も警備の虚を衝かれた不面目もあって拘留で終った。

一方、由井茂也も駐在巡査の家宅捜査を受けた。検束された竹内の自白が新聞に載ったからだというが、事件発生の翌日、別所に住む高倉輝の使いで鈴木茂利（もり）美（み）が長村（現真田町）から自転車で馳付け、柳沢恰がビラは自分が書いたと由井に真似た筆跡を示して頑張っているから、絶対に事実を否認するように伝言した。

由井は指示に従い高熱をよそおって取り調べを引き延ばし、捜査でも証拠物件が発見されなかったため、有耶無耶の裡に事件は落着したのだという。」

（大井1980、pp376～378）

※　※　※　※

京都大学から別所温泉に身を移し、上小地方の農民運動や社会主義活動の指導・援助にもあたったプロレタリア文学者の高倉輝が、由井茂也に宛た書簡を上図に示しておく。日付は昭和５年６月19日とあるので、御牧ケ原の事件直後の書簡であることがわかる。

※　※　※　※

内容は、病身の由井を案じる書き出しで、例の件（＝御牧ケ原の事件）では、極力犠牲となることを避けてほしい、犠牲心の風潮は小児病のようなもので、そのつもりで今回の件に向かって欲しいとあり、犠牲にならぬよう繰り返し説かれているのが印象的である。

さきの引用にみる事件直後の高倉の配慮が、この書簡にもはっきりと読み取れる。手紙の中にある竹内君・鈴木君とは竹内囡衛・鈴木茂利美のことである。

□

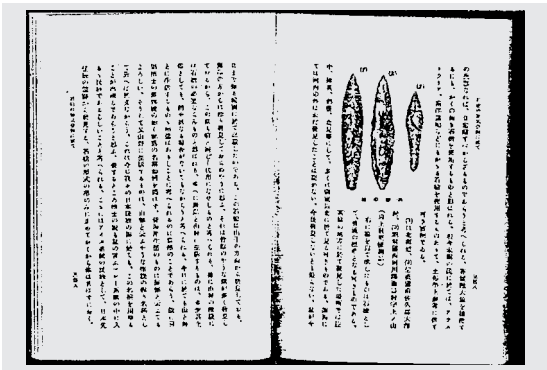
反戦行動や農民運動への参加から「アカ」というレッテルを貼られた私には、それ以後就職の口など有りようはずもなかった。そしてようやく佐久通運に就職ができたのは、昭和13年頃、30才を過ぎてからのことであった。

□

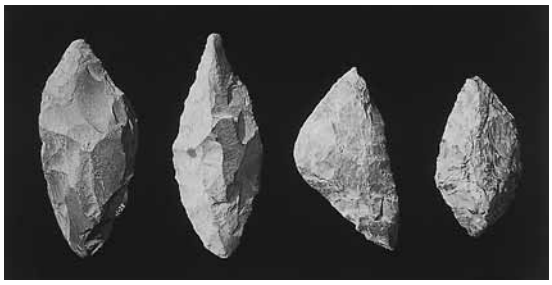
昭和17年頃、私は大野雲外の『日本古代遺跡遺物の研究』という本を手にした。その「石槍の形式分類に就いて」という文章のなかに、南佐久郡大澤村（現佐久市大沢）出土の石槍が掲載されており、私の関心をさそった。

この頃といえば、真珠湾攻撃が始まり日本は暗雲の道をたどっていった時代であった。しかし私の考古学への興味は途切れるものではなかった。

□



**大野雲外の紹介した佐久市大沢の石槍**
三本のうちまん中のもの



**馬場平の石槍**

矢出川での細石器の確認は、戦後の混乱期ではあったが、皇国史観から解き放され、新しい歴史をむさぼるように求めたそんな気運の中から生れた。

昭和28年12月26日、まさに年も暮れようというその時、私と芹沢長介・岡本勇の三人は、吹雪の矢出川にいた。人影もない荒野の果てで雪中を排御する黒い一団、私は遠くの銃声が気になり、熊と間違えられて撃たれぬよう大声を張りあげた。雪も激しさを増し、寒さにいたたまれない。もうあきらめて帰ろうと岡本さんを止めさせようとしたら、芹沢さんが「あれは闘士だから大丈夫だ」といって止めさせない。ふと私はおもしろかった。……ああ闘士か。そして懐かしかった。

□

やがて芹沢さんが黒い塊を掘り出したが、凍っていてわからない。矢出川に洗いに向かったが吹雪で先が見えない。仕方なく芹沢さんはその塊に最後の手段を加えた。自らの温かい液体を注ぎかけたのである。その瞬間、黒い塊は日本で初めてという「細石核」に変身した。やがて岡本さんも一本の細石刃を見付けた。とっさに芹沢さんは「消すな、消すな」と声をかけた。また霜柱かもしれないとおもったのである。しかし細石刃は決して消えることがなかった。

私にはいとも簡単にみつかったこの石器が、どうして日本で初めてという大きな意義をもつのか不思議でならなかった。それならとっくに、言われないうちに採集していたのに……様々な思いや興奮からその晩は寝つかれなかった。

小指の爪ほどの石屑が、細石器というものだと知ったとき、夢見るような懐疑と好奇心から私とこの石器とのにらめっこが始まった。

□

矢出川の本調査の前夜、芹沢さんたちが学生とともに私の家に泊まった。彼らに矢出川の石器を見せると生れて初めてみる石器に驚くだろうとひそかに思っていたのに、誰も一言もださない。しばらく沈黙がつづいてから誰かが「どうしちゃったんだ」というと、麻生優さんが「息が止まっちゃった」といって溜息をついた。ようやく緊張がほぐれ、皆が大声で笑いだした。

□

その矢出川の調査には、あの岩宿の発見者である相沢忠洋さんの顔もあった。その折り、相沢さんはカメラをもってきて私に記念写真を撮ってくれといった。ただシャッターを押せばよいのだという。私は生れてこのかたカメラなどいじったことなどなかったので、被写体である相沢さんの方にレンズを向けないままシャッターを押してしまった……。

□

群馬県赤堀村の相沢さんの自宅を訪ねたことがある。相沢さんの家は遺跡の上にあった。そして相沢さんはその家の遺跡を掘ってみるのだが、大家に「借家人の分際で人の家を掘りちらかすな」と怒鳴られたのだという。そこで相沢さんは、家の縁の下を、夜懐中電灯をつけて掘ったと聞いた。一方、布団を解いては、その綿を石器の下に敷くのに使っていた。自分はというと、それこそ藁の中で寝るのだという。

ここにも面白い人間がひとりいた。

□

いつもニコニコしていて、子供のように純真な心をもった相沢さん。戦後の食糧難であったその時代、我が家で炊いた温かい白い飯をすすめても、持参した黒い麦の握り飯を新聞紙で隠すように食べていた。彼一流の強がりと気遣いであったのかもしれない。

その相沢さんも逝ってしまった。またひとり同志を失ってほんとうにさみしい思いがする。

□

さて、農民運動や考古学との関わりについて私の思いつくままに話してきた。

最後に、これは以前にも述べたことだが、私はこれまで考古学という学問の裾野の広さの中に、大きな喜びを見出してきた。学問の高い山の頂点を目指し競っている研究者も当然いる。しかし、裾野には裾野の新鮮な研究分野があり、そこにいる私たちの役割もまた大切なのである。私の来し方とは、そうした学問の裾野に印されたひとすじの道のようなものかもしれない。

（『佐久考古通信』№56より転載）

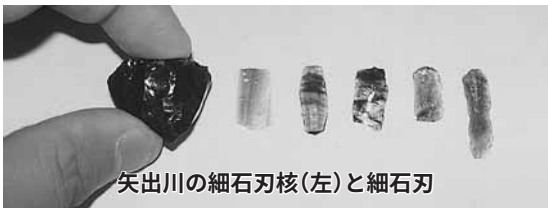
聞き取り1992年８月25日　堤隆

**遺跡を踏査する**

# 由井茂也さんを憶う

## 芹沢長介（東北大学名誉教授）

矢出川遺跡にて（左：由井、右：芹沢）



矢出川の細石刃核（左）と細石刃

今から約50年前、1953年の８月18日、川上村馬場平遺跡を訪れた私は、はじめて由井茂也さんにお会いし、馬場平で採集された多くの尖頭器など、貴重な資料を見せて戴いた。同年11月、私たちは馬場平のローム層中からみごとな尖頭器を発掘し、さらに同年12月26日、野辺山高原の降りしきる雪の中で矢出川遺跡の試掘をおこない、日本ではじめての細石刃と細石刃核をローム層の中から発掘することが出来たのだった。馬場平の発掘は、尖頭器文化が縄文時代早期の所産であるとする見解を打破したし、また矢出川の発掘は、日本には細石器文化が存在しなかったという永い間の妄説を吹き飛ばした。両遺跡の発掘調査の成果は、すべて由井茂也さんの不滅の功績であったと断言してよいだろう。

2005年の正月には、由井さんは満100歳になられるというお話をうかがったので、是非とも御元気な姿を拝見したいと楽しみにしていたのであった。しかし思いがけなく悲しい訃報に接し、無念やるかたない思いであった。川上村から野辺山高原にかけての諸遺跡を由井さんと二人で採集し歩いた日のことが、今でもあざやかに思い出される。

私たち考古学研究者は、由井茂也さんの功績を決して忘れないであろう。

## 雪と泥にまみれて

昭和28年の暮れもおしせまったころ、岡本勇氏（立教大学講師）と私は、長野県南佐久郡川上村在住の考古学研究家、由井茂也氏をたずね、いろいろな遺物を見たり、この土地の話を聞いたりしていた。多年にわたる由井氏の採集品の中で、とくに注意を引いた１個の石器があった。安山岩製の長さ８センチほどの石刃をもちいた削り具である。出土地はすぐ隣り村の南佐久郡南牧村野辺山高原であるとのこと。いまにも雪が降り出しそうな天気だったが、どうしてもその遺跡を調査してみたくなり、ともかくも強行軍をしても出かけることに決心した。

あくる朝、吹雪をついて10キロほど歩き、現場についた私たち３人は、スコップと移植ゴテを使って、すでに５センチほどつもってきた雪をとりのけ、土を少しずつ削りながら別々に石器をさがしはじめた。１カ所にかがんだまま５分か10分もすると、地下足袋の中の足がこおってしまいそうになる。岡本氏が突然とびあがって雪の上をぐるぐる走りはじめた。手足がこおらないように運動するのだという。私も指がこおりそうになると走った。そして体があたたまると石器さがしにかかった。

いっぽう由井氏は、ときどき立ちあがって両手をふりながら「オーイ、オーイ」と大声をあげていた。クマとまちがえられないように、遠くの人に知らせるのだという。このあたりにはいまでもクマが出没するので、雪中で動いていると、クマとまちがえられて鉄砲をうちかけられる危険性があるのだそうだ。それを聞いてからは、岡本氏も私もときどき手をふって大声をあげることにした。

吹雪はいっこうにやみそうもない。手足は感覚がなくなり、風は骨身をさすようにつめたい。しかし石器が見つかるまでは、ここを動くわけにはいかない。１時間ほどたって、長さ２センチ、幅５ミリほどの小さな石器が見つかった。雪と泥にまみれてよくわからないが、どうも細石器らしい。またウズラの卵ほどの石は、細石刃をはがす母岩である細石核のようにみえるのだが、泥がこおりついていてどうもよく形や特徴がわからない。私は下のほうを流れる川までおりていって、石を洗ってみようと立ち上がった。しかし少し歩くと寒さと雪で足が進まないので、石器を軍手の中に握りしめたまま立ち往生してしまった。

その時ひとつの妙案がひらめいた。手中の石の正体を、この吹雪の中で確かめるにはこれしかない。泥がかたくこりついた石を雪の上に落とし、私はあたたかい液体を注ぎかけた。湯気があがり、氷はとけ、泥は落ちた。青い半透明な肌をしたみごとな細石核であった。

（芹沢長介　1963　月刊『太陽』「雪と泥にまみれて」より引用）

# 由井茂也先生の「青春」は永遠である

戸沢充則
（明治大学名誉教授）

矢出川遺跡を掘る

由井茂也先生、ご生誕100年おめでとうございます。

そして、この素晴らしいお祝いの会を企画し、準備に努力して下さった佐久考古学会の皆さん、さらに遠い所からも、この会にすすんでご参集下さいました多くの皆様に、心から敬意を表します。

※

さて、２ヶ月ほど前、今日のお祝いの会の相談を堤さんから持ちかけられた時以来、由井さんが100年も生き抜いてこられた意義を、改めて、わが身の生きざまとくらべながら、折にふれて考えてみました。

といいますのは私も72歳、由井さんからみればまだ“小僧ッ子”ような者ですが、３年前に大学を選択定年ということでやめ、また考古学協会を退会するという形で、学界からの引退もいたしました。

それは、それまで50年余、無茶苦茶ともいえる勢いで、“馬車馬”のように考古学一本の道をつっ走ってきた間に、身体中にたまってしまった何かモヤモヤしたものをいったん清算し、自分の過去をふりかえってみたいと考えたからです。

世の中に“悠々自適”などという言葉があって、そういう境遇にある老人のことを、現役でバリバリ活躍している若い諸君は、自分は忙しいの何のといいながら、私のように現役を引退して暇をもて余している者をうらやましいというかもしれません。しかしそれはとんでもない話で、私など日々悠々自適の生き方とは、それがいかにむずかしいものかをいま思い知らされています。そして、これも過去70年、もの心ついて考古学をはじめてから50年余の、自分の生きざまに問題と原因があったのだと、この頃は反省ばかりしています。

※

ところで、いまは由井茂也先生の100歳のお祝いの言葉を申しあげているのに、私ごとの愚痴っぽい話をしてしまいました。それはわが身を省みて、由井さん100歳の意義を考えてみたかったためですので、お許し願います。

さて、今日このお祝いの会の記念品として、皆さんのお手元に、1980年、81年の矢出川遺跡群総合調査の時に、皆さんと共に現場で毎日発行していた、なつかしい『野辺山ニュース』を覆刻版としてお届けしてあります。そしてその中扉に「青春とは歳を問うのではなく、こころの持ち方の問題である」と、由井さんの長寿を祝い、それ以上に由井さんの生き方に、心からの尊敬の気持ちをこめて書かせていただきました。

由井さんは生まれてこのかた一世紀、この佐久の大地にしっかりと足をつけ、地道に、着実に「青春」を生き抜いてこられました。それは私のように、上すべりでなく、また特急列車で走りまわるような人生ではなく、若い頃から地域の人びとの幸せを願って農民運動に加わったり、戦前の激しい思想弾圧の下で、反戦平和の行動をおこしたりする闘いの中で、研究の上でも地域を愛するひた向きの気持ちで、考古学と歴史の地域研究を理屈としてでなく実践されてきたのです。

こうした由井さんは、名誉とか地位といったことは超越し、分けへだてなく誰とでも接し、多くの人びとを愛し、「青春」の感銘をみんなに与え続けてこられました。多少とも名誉欲とか権勢欲等の渦に巻きこまれがちな学界とか大学とはちがった世界で、澄んだ清らかな生き方、学問の道を、100歳を迎えられたいまでも由井さんは貫ら抜いてこられたのです。そのことは私のように、大学を退き、学界を去ると同時に、自分のやってきた考古学は何だったのだろうかなどと悩んで、「青春」の心の灯りが消えそうな生き方とは大ちがいなのです。

※

100歳の祝賀会で（右から由井、戸沢、土屋忠芳）

野辺山シンポジウム1979の研究者らと

以上、言葉は足りませんが、いえることは、由井茂也さんは100歳を迎えたいまでも、「青春」の真只中に居られるということです。今日お集りの佐久考古学会の皆さんは、30年近い任期を全うされた由井会長のリーダー・シップの下で、そして多くの諸君は20数年前の「野辺山分布調査」や「矢出川遺跡群総合調査」等の機会を通じて、由井さんの「青春」を間近かに学んだはずです。そして今日この場で、100歳の由井さんのお元気な姿にも接して、みんなの、それぞれの、日々現実の生活の中で、心の持ち方の問題である「青春」を生涯をかけて貫くことの大切さを、改めて教えられたと思います。

そうした想いを新たにすることが、由井さんの100歳を祝う、私たちみんなの気持ちでなければいけないと思います。その気持ちをこめて、ここで「由井茂也先生の青春は永遠である」という言葉を皆さんで贈り、由井先生への感謝とお祝いの意を表します。

最後に、これからも毎年、由井さんを囲んで、この野辺山でお逢いいたしましょう。（2004年11月20日）

※

**追悼のことば**　野辺山での会が終わって１ヶ月余を過ぎた年末12月27日、淋しさと悲しみをこらえて、由井茂也先生のご葬儀に参列した。そして霊前に「先生が私たちの心に深く刻みつけて下さった、“人間・由井茂也”の魂と面影は、私たちにとって永遠の宝物です」と、弔辞を捧げた。

---

もう30年以上も前、野尻湖、小諸、諏訪を巡る旅行の途次のことだった。矢出川遺跡をたずねた帰路、先生のお宅を訪ね、いろいろお話をうかがったのがお目にかかった最初と記憶する。会話の内容は思い出せないが、あれこれと話題は尽きず、時刻を気にしつつ予定の汽車を何本もやり過ごしたことを思い出す。本当に話し好きな先生だった。それからずいぶん長い間、野辺山、矢出川、川上村に通うことになった。

私の研究に欠かせない土地であったこと、京都女子大学考古研の分布調査をお手伝いすることになったこと、明大の野辺山シンポジウムをはじめ、堤さんを中心として企画された研究会が何度も開かれたことなどにもよるが、由井先生をはじめ、由井昭さん、一昭さんなど、川上村の皆さんとのご縁によるところも大きかった。

何度もお会いした先生だったが、いつも情熱的に野辺山を、矢出川を、考古学を、そして人生を語る姿が思い起こされる。その一方で私にとっての先生は、矢出川の発見者というより、京女考古研の活動の後見人であり、指導者であり、よきアドヴァイザーであり、慈父のような温かい眼差しで女学生たちを見つめ、彼女たちに囲まれて野辺山の遺跡を歩きながら、いかにも楽しそうに微笑んでいるもう一人の由井さん、という印象が強い。大勢の女学生に囲まれているときの先生は本当にお幸せそうだった。

最後にお会いしたのは数年前の矢出川発見50周年を記念するシンポジウムの折だった。司会者に促されて話を始められた先生は、矢出川遺跡にまつわる興味深いお話しを、すすめられた椅子には見向きもせず、起立されたままずいぶん長い間披露された。近くで拝見していて矍鑠という言葉を絵に描いたような元気なお姿が今も鮮明によみがえってくる。若い頃から矢出川に通いつめて鍛えられた身体と矢出川への愛着、学問への情熱が、その健康を支えたのであろう。

川上、野辺山では先生の薫陶を受けた堤さんをはじめ多くの気鋭の後継者が育って、今も活発な研究活動が展開されている。矢出川発見以来、先生がまいた種が大きく育ち、先生の志しが次世代にしっかりと継承され、矢出川発見が起こした波紋と同様に、いまも考古学界に大きな発信をし続けている。そういう野辺山、矢出川の空へ先生は安心して旅立ち、にこやかに見守っておられことであろう。

**1979年野辺山シンポジウムで**

**学問とのかかわり**

由井茂也さんは川上村御所平の由井保平の末子として明治38年（1935）に生まれた。保平の父由井茂平は菩提の住職から漢学・和歌・暦算を学び医師を業として子弟を教え、父保平は村長、郡会議員として地方行政の発展に努めている。

このすぐれた家庭に育った茂也さんは、学問を好み村内・地方事情の研究にも熱心であったが、第一次世界大戦後の社会的混乱・恐慌の余波をうけた農村の社会問題に関心をもって農民運動に参じ、全日本無産同盟のバッジを胸に活動したが、特高警察のいやがらせをうけてやむなく帰宅して、昭和２年農民自治会佐久連合会に参加して、農民自治運動に情熱を燃やし、昭和５年５月27日の第25回海軍記念日の御牧原運動会（北佐久郡）に、治安維持法反対、帝国主義反対、天皇制打倒、戦争を記念する運動会廃止等のスローガンをかかげて反戦運動にもかかわっていったので、警察につきまとわれ、結婚や就職等にも大きな支障をうけて、樺太（サハリン）までも放浪の旅をしている（『草原の狩人―由井茂也日記抄―』参照　臼田武正・島田恵子・宮下健司）。

こうした農村社会の改革に情熱を燃やす若き日の由井茂也さんは川上村や佐久地方の歴史や文化には少年時代から深い愛着を持っていた。村内第一の学者や文化人の祖父や父の感化は由井家の中に深く根づいていた。漢籍・和歌・俳句・行政・宗教その他各種の古文書は祖父の談話や家庭行事などの伝承と共に、少年茂也の心の中に深く浸透していったもので、これが後年馬場平遺跡（中に由井家の土地もある）矢出川遺跡等の発見の端緒となって吹き出したものである。

**京都女子大学の皆さんと**

後年京都女子大学の考古学研究会の卒業生たちが昭和49年（1974）～昭和56年（1981）まで８年間にわたって茂也さんを常任講師に委嘱して川上、南牧両村にまたがる広大な野辺山高原一帯を追って、先土器時代遺跡の分布調査を行い、その成果を1978年・1980年に長野県考古学会誌に報告した。更に同会有志は、由井茂也さんの所蔵する大量の重要遺物に合わせて村内有志の所蔵する遺物の実測図を作成し、これを集大成して、『川上村誌先土器時代編』を出版することが川上村教育委員会との間に成立している。

この間に昭和49年（1974）には川上村は村内の主要の有力野菜生産団地柏垂地籍の中に「先土器時代遺跡保存指定地」を設定して、同村内の先土器時代遺跡地保存の重要性を示した方針を示したもので、由井茂也さんらを中心とする有識者の活動の重要性を示しているものと考えられる。

**由井さんのおだやかで納得できる説明力**

―「矢出川と板橋川」―

今から２～３年位前になるであろうか。御代田町で佐久考古学会の総会が行われたときと思われるが、老年の由井会長が１時間ほど熱弁をふるってくれたことがあった。

講演は、板橋川と西川（矢出川）の相違について約１時間位、私の聞いた会長最後の熱弁と思う。

主題は、矢出川の流れはゆるやかで、矢出川遺跡付近は特に湧水が多く、水量が豊かで、昆虫や水草などが多く、昆虫や魚類の餌となるものが豊富で、初夏の頃には水面や地面が見えなくなるほどの大群が現出したと当時の様子を語った。特にひきがえるの大群は初夏には地面も水面も見えなくなるほどの大発生を現出したという。夏から秋にかけては、は（か）しばみ、きのこなど、人・畜の食料物が豊富であった。魚類では“イワナ”ばかりではなく、マスの類まで産卵のために上ってくる魚類が多かった。

これに対して板橋側の方は急流で岩石が多く、産卵に適した場所が少なかった。急流で水量は多く、高緯度まで上っていたが、産卵の適地は少なかったと述べていて納得できる。京都女子大生に対する説明も明確でよく納得が得られたものと想察されるのである。

**長野県考古学会で藤森栄一らと**

# 由井さんと初対面のこと

桐原　健（前長野県考古学会会長）

佐久での県考古学会大会にて

学問を実学と閑学とに分けると考古学は後者の筆頭にくる。明治政府は青年に学問による立身出世を奨励したが、その学問は勿論前者で薩長土肥がこれを独占し、閑学は問題外とした。そのことは近代日本考古学の基を築いた坪井正五郎は御家人の児という出自が証明している。

敗戦という外力で考古学は日の目を見、以来六十年が経ったが、閑学であることに変わりはない。昭和二〇・三〇年代までの考古学研究者は喰う為に得た定職を程々にこなし、家族の理解、協力のもとに産み出した時間を調査研究に使ってきた。このシステムに叶う職種は学校の教員で、薄給ではあるも自由になる時間は他に比して多い。七〇代以上の大方は教員と研究者の二足の草鞋を履いている。

冗長な前文を記したのは恵まれない地方研究者の中でも殊に厳しい条件下にありながら野辺山の風土の中で黒曜石の剥片を追い続け、細石刃文化研究の端緒をひらいた由井さんの学績を強調したいが為と、初対面に受けた由井さんの印象の今までに接してきた先輩のそれとの微妙な異なりを自分なりに証明したかった為でもある。

初対面は昭和四七年の五月で、要件は川上村柏垂遺跡の保護協議だった。初めてお逢いするには心構えがいる。二八年の細石器発見は既に伝説化しており、明治大学など東京の質の高い研究者との交流の厚いことは承知していた。そんな先入観念の故かお逢いした時はいささか緊張気味で、まずどうお呼びしたらよろしいか。前歴が教員ならば抵抗なく「由井先生」とお呼びしていた筈である。「由井さん」では憚られる。もごもごと口篭ったままで本題に入ってしまった。

そういう次第で、協議は言葉を撰んでの当り障りのない遺取で終始していしまい期待していた研究者としての由井さんの肉声は聴かれなかった。初対面で行政にかかわる話であってみれば望む方が無理である。柏垂遺跡の保護については大切な先土器時代の遺跡だから範囲を広くとって早急に村指定史跡にしたい。後には県史跡に持っていきたい。吶々とした弁には迫力があり、考古学の闘士としての面目を観た思いがした。遺跡は平成八年に村史跡になっている。

# 由井茂也さんを偲んで

藤澤平治
（佐久考古学会会長）

由井明さんと

由井さんは日露戦争の中、1905年川上の地にお生まれになり、第一次大戦、太平洋戦争を含む激動の時期を冷静に見つめられ、反戦運動に、農民運動にと参画されてこられました。

神代から始まる皇国教育の中で、遺跡・遺物に関心を持たれ採集されておられました。1953年馬場の平遺跡の調査、細石器の矢出川遺跡を世に問い、戦後の新たな歴史観の裏付けをなされました。ある時「先生」と呼んだとき、と言うより口にしてしまったという方が正確かもしれませんが、すかさず「わしゃあみんなと一緒に、ここにある物を見つめていく仲間だに」と窘めるように言われて、生き方を教えていただいた気がして、「有り難うございます。」と言った時のこと、訪れる者誰にでも温かいまなざしで迎えてくださった目、何かを知ろうとする時の鋭く輝いた目を忘れる事はできません。今日に至る迄に、民間にあって優れた研究をしている者に与えられる「藤森栄一賞」を受賞され、長野県より「教育功労者」・文部大臣より「地域文化功労者」として表彰されました。まさにこの地に腰をすえ、奢らず、休まず歩まれてこられ、考古学とはアルケオロジーであると教えてくださった由井さんにこそ与えられる賞であると思います。

百歳の由井さんに会いたくて集まったあの日が昨日のようです。願わくばこれからも高原に訪れるアルケオロジスト達を温かく見守ってください。

**芹沢長介先生と中ッ原の石器を見る**（1993年野辺山）

奥様がお亡くなりになられて間もなくすると――なつかしい川上の我が家に戻りました。遊びに出かけて下さい。――という葉書をいただき、すぐに電話をしたものの、『佐久町誌原始・古代・中世』編の総仕上げに忙殺され、由井さん宅を訪ねたのは一年後だった。久しぶりだったので大変喜んで下さり３時間も話し込んでしまった。99才とは思えないほど食欲旺盛で、お菓子・果物・アイスクリームなどをゆっくりとほおばっていた。

最後にお会いしたのは11月12日だった。かくしゃくとしていた６月と８月のころと比べると由井さんの様子が異なり、話しかけても「うんうん」と笑ってうなずくだけだった。一瞬不安が脳裏をかすめた。

想い出は尽きない。右上の写真は矢出川遺跡総合調査で、植生の調査を山崎惇先生を中心に三石延雄氏と４人で実施し、由井さんが木登りしている珍しいスナップである。なぜ木に登ったかというと、杖に手ごろな棒を見つけたので、「杖にして下さい。」と差し出すと、「俺はまだ若いから杖など必要ない。」と怒り出し木に登って若さを強調したのであった。70代に佐久病院で検診したところ、50才代の体であると言われ、健康には自信を持っていたのであろう。

**新潟で**（由井70代、島田30代）

横の写真は新潟市へ火焔土器展を見学に行った時のものである。村長・郡会議員をしていた父保平の末子として、大切に育てられた茂也少年は、やがて青年期に入ると正義感に燃えて、農民運動へと傾倒していくのである。新潟は全日本無産青年同盟の一員に加わった忘れられない地でもあった。

**矢出川の植生調査で木に登って**
（左下：三石延雄氏、右下：島田、由井76才）

もう一つの忘れられない想い出は、矢出川遺跡保存運動である。すでに10年以上も経過しており、戸沢充則先生には並々ならぬご苦労をかけ、長野県・佐久考古学会、県文化課の皆さんにこれ以上迷惑をかけることは忍びない。村長と直に会って話し、承諾の有無に関わらずこれで終りにしたいからコンタクトを取ってほしい、と由井さんから依頼された。私はこの言葉を長い間まっていたのである。村長さんの性格からして親しい地元の者と交渉をした方が良いと考えていたからだ。菊池村長さんはその時南佐久郡町村会の会長職にあった。私は南佐久郡町村会の事業の一環として、南佐久郡誌刊行会に勤務していた関係からコンタクトはとれた。

誠心誠意二人で話せばわかってくれると確信していた。だがこの後の過程の中で気が変り、取り消されはしないかとの不安があった。そのための対策を二人はそれぞれに考えていた。当日、村長さんは、「茂也兄（あに）、久しぶりです」とにこやかに迎え入れてくれた。

二人は帰路、「今日は本当に良かったですね」「うん良かったな」と何回もどちらからともなく同じ言葉を繰り返し喜びをかみしめていた。由井茂也さんの矢出川遺跡に対する愛情と執念が、保存運動を積み重ねてきた大勢の研究者との思いが一つになった日であった。

由井茂也さんが亡くなってもう一年がたとうとしている。由井さんゆかりの野辺山高原に仲間が集まって100歳のお祝いをしてから、わずか１か月後に逝去の知らせを堤さんからいただいた時は、ただただ信じられなかった。

由井さんが矢出川遺跡で日本で初めて細石器を発見したのは、昭和28年（1953）12月26日だった。何とそれから満51年後の翌日である12月27日午後６時42分に、99歳11ヶ月の生涯を閉じられたのである。満100歳の誕生日まであと27日であった。100歳のお祝いの席では、最後まで千曲川へのサケの遡上の話をし、そのことに執念を燃やしていただけに無念でならなかった。

※

由井さんのことを思い出すと、由井さんとともに時間を共有した県史の調査、新潟へ火炎式土器を見に行ったこと、矢出川発掘・野辺山シンポジウム、鹿猟の猟場を求めて八ヶ岳山麓の林の中をいっしょに歩いたこと、何度か由井さん宅でお茶を飲みながら話したこと……、「あの日、あの時、あの風景」が鮮明によみがえってくる。その時の由井さんの顔つきや会話、ほどこしていただいた温かい思いやりや心遣いが、清らかな水が湧き出るように思い出されてくる。由井さんはそれほどまでに私にとって存在感のある大人（たいじん）であった。

由井さんは逢うたびに常に新しいテーマを持ってモノを見、考えていた人だった。その目は少年のように輝き、いつも純粋だった。由井さんの人生を一言でいうとすれば、「夢あるうちは青春」を100歳まで貫いた人生だったように思われてならない。

野辺山の大地から発せられるような由井さんのモノの見方、考え方、生き方は、新鮮かつ斬新でいつもハッとされられ、驚きと感動が伴った。その豊富な知識・経験・言葉はさながら哲学者のような重みを持って私に迫ってきた。きっと矢出川遺跡に住んだ人々と同じような目線、心持ちで野辺山高原の自然や遺跡、歴史、人の営みを見続け、その意味のありようを考え続けていたように思えてならない。

※

由井さんの生き様を記憶に留め、また多くの人に知ってもらいたいという思いから、由井さんの文部大臣賞受賞と米寿を記念して、1993年６月に島田恵子さん、臼田武正君と私の３人が中心となって、『草原の狩人―由井茂也日記抄』をほおずき書籍から出版した。それからもう11年が経過した。

その中で私は次のように由井さんの事を書かせていただいた。「私が常日頃考えている地域研究とは、ある土地に生まれ、その土地の自然や風土に育まれながら、東の山から顔を出す日の出と、西山に沈む夕日を毎日身体で感じ、土地の食習慣で御飯を食べ、土地の言葉で顔をつき合わせて話をする。その何百回、何千回という同じ日常生活の繰り返しの中で、気づき、疑問を抱いた問題を、何度も何度も現地に足を運び、調べたり、資料を採集したり、人に聞いたり、本で調べたりしながら、土地の歴史や民俗等を明らかにしていく姿ではないかと思う。その成果や研究に取り組む姿勢が土地の人々に影響を与え、地域社会にプラスの面で新しい変化を引き起こすことにつながる研究と考える。こうしてみると、由井さんが川上で生きた姿こそ、地域研究の典型といってもよいではないかと思うと。これは、当時77歳で藤森栄一賞を受賞した由井さんのお祝いに贈った言葉であったが、その思いは今も変わらない。由井さん自身もその後22年間もこうした生き方を貫き通し、野辺山の大地から常にモノの本質を考え続けていた人だった。

※

由井さんから身体を通して学ばせていただいたモノの見方、考え方、生き方はいつしか私の中にしっかりインプットされ、そのフィルターを通してモノを見、考える自分がいるように思えてならない。

由井さんへの感謝の気持ちをこめて。合掌。

**文部大臣表彰と出版記念の祝賀会（93年）**

茂也さんの百歳の長寿をお祝いする会が野辺山で開かれてから一ヶ月ほどした日に、まさかの訃報を耳にするとは思いもよりませんでした。年明けの23日は茂也さんの満百歳の誕生日にあたるので、正月には新年の挨拶も兼ねて改めてお祝いに伺おうと思っていたところでした。お祝いをする会の席では、表情も和やかにしっかりとした口調で話をされていただけに、折に触れ、今でも寂しい思いがしてなりません。

思えば、茂也さんとは私が学生の時に佐久考古学会の例会で出会い、以後ずっと佐久地方の発掘調査や矢出川遺跡保存運動などを通して、機会あるごとに数々の教えを賜ってきました。

８年ほど前、私は長年勤めていた遺跡関係の仕事を離れて教職に戻りましたが、奇しくも赴任地が川上村となりました。このため、週末の通勤途中には茂也さんの自宅に時々お邪魔をし、お茶をいただきながらよもやま話をしたことが、昨日のことのように思い出されます。また、冬の間は佐久市にお住まいの娘さんのお宅で過ごされていたこともあり、そちらにも寄せていただいたことがあります。

茂也さんと話をしていると、いつも矢出川遺跡のことが話題となり、遺跡の立地や細石器を使った人々の生業について興味深い話をお聞きすることができました。ある時、サケの生態に関することを問われましたが、いつもの不勉強から詳しく答えることができず、後日、資料を見繕って持参したことがあります。また、話の合間には、誰々さんは今どうしているやと、いろいろな方を気遣われてその近況を尋ねられもしました。

今思うに、茂也さんは90を超えるお歳にもかかわらず情熱的な探究心を生涯持ち続けられ、千曲川源流の川上や野辺山に生きた遥か遠き先人達に熱き想いを馳せていたのだと思います。

生まれ育った土地の自然や風土を愛し、そして多くの人々を愛し続けた茂也さんです。地道な資料採集、馬場平の発掘、矢出川における日本で初めての細石器発見、柏垂や矢出川の保存運動、地域における考古学研究の推進等々、考古学的な業績は広く知られているところですが、私にとっては一世紀を生き抜いた茂也さんの人としての生き方から学んだこと、そしてこれからも学ぶべきことがほんとうに数多くあるように思います。

まもなく一周忌を迎えるにあたり、茂也さんの志に一歩でも近づくことができるよう精進しなければと決意を新たにしました。

あの野辺山の満天の星空から、どうぞいつまでも見守り続けてください。

---

「おいは川上かい？誰の息子だい？」1973（昭和48）年夏上の城遺跡発掘調査由井会長との初めての会話である。25年間（1973～1997年）佐久考古学会の会長を歴任された由井茂也さんを32年間会長さんと呼ばせていただいた。

「おいは？」といって手を差し伸べられた。「おっ、いい手をしてるなあ。林君か？」といわれた。2004年11月20日100歳をお祝いする会野辺山荘の玄関、最初で最後の握手であった。理由のわからない涙が出た。

1978年恵林寺以後、毎年佐久考古学会研修旅行があった。伊勢塚古墳、新保遺跡、観音山古墳、埼玉古墳群、貝殻山貝塚、愛知県陶磁資料館、登呂遺跡、鳥浜貝塚、多賀城、芝山町はにわ博物館、一乗谷、高松塚古墳、菅谷館跡、吉見百穴、弘法山古墳、石垣山（一夜城）実に多くの所にお供した。

1980（昭和55）年以降10年間毎月の例会に、２時間をかけて80歳の高齢なのに毎回川上から下ってこられ、お仲間と語られ、若い者の話をにこやかに聞かれていた。顔ぶれを見回し、「おい、木内さんは、○○君は今日はどうしたい？」と、欠席の常連を気遣っておられ、とても寂しがられていた。

1991年の佐久考古学会新年会の折り突然「おらとうの学会は、戦争に反対しねだかい？」と言われた。はっとした。嬉しかった。８日前の１月17日中東湾岸

戦争が勃発した。アメリカが圧倒的な武力を持ってイラクに空爆を開始した。私は佐久市職員労働組合・佐久地区労連の仲間達と『湾岸戦争即時中止・政府の戦争協力反対・平和を守ろう』の佐久地区集会を５日後に控えていた。戦争反対のデモもした。宣伝のセスナ機も飛ばした。会長さんといえば、21歳で新潟県に誕生した無産農民学校に参加した。治安維持法の下、帝国主義反対・天皇制打倒・治安維持法反対のスローガンを掲げ御牧ヶ原で行われた第25回海軍記念日大運動会で檄ビラを配布したのは、25歳だった。

1974（昭和49）年８月４日午後３時川上村横尾遺跡。朝から快晴午後一時雷雨。実測を待つ焼失住居址の床材と屋根材。突然農道の上の方から地響きと共に泥水が襲ってきた。なすすべもなく全員息をのんで立ちつくしていた。しかし、泥水はことごとく住居址の脇に掘られた溝に流れ込んで事なきを得た。その溝は、何を掘っているズラ、無駄なことをしているなあ。と、怪訝に思っていた会長さんが掘っていた溝だった。自然と一体の生活と知恵だなあ、とつくづく思った。（この出来事を会長さんは高村・臼田・林に聞いてみたいと、17年後の佐久考古通信Ｎｏ52に「発掘史に例のない溝掘り」という思い出を載せられている。）

人と人の和を愛し、平和を愛し、遺跡を愛し、大自然を愛した会長さん。とてつもなく大きな人間力を持った会長さんに教えられたのは次のことだ。

「未来のために過去について学ぶ」

---

初めての出会いは確か、佐久考古学会の例会、明治大学による最初の矢出川遺跡の総合調査が行われようとしている頃だったと思う。当時、大学の誇り高い調査に地元の若造など参加できない心配があったのだが、「地元から参加したければ遠慮しなくていいんだよ」と由井さんはそんな杞憂を一蹴してくださった。「やさしくて、偉い人がいるんだな」そう感じたのが約25年前……。

24歳で地元に帰り、佐久考古学会の活動に本格的に参加させていただくようになる。由井さんとは以降７年間ほど毎月のように顔を合わせることになった。当時、佐久考古学会の活動は極めて活発で毎月のように研究発表が行われていた。由井さんはよほどのことがない限り、毎月川上から小海線で佐久平まで降って来られ会員の発表を寡黙に聞いておられた。時には集まりが悪く、由井さんと黒岩さん（当時副会長）に加えて若いもの数人ということもあったが、「今日の発表は良かったな」と暖かい言葉を投げかけて帰路につかれた。

そんな地味な積み重ねが1990年「赤い土器を追う」の刊行に結びつくことになった。執筆陣は二十代から八十代まで、まさに佐久考古学会の老若男女総力上げての一大事業で、地域研究のひとつのお手本となる仕事であった。これも常に由井さんの存在があり、心の支えになっていてくださったからこそ成し得たのだと思う。

個人的な想い出も多い。県考古学会の帰りに佐久市の実家へ立ち寄ってくださった際のこと、ど素人の小生の母親に旧石器発見の情景を昨日のことのように眼を輝かせて語ってくださったこと。

「おれはな、ラーメンやそばの汁は飲んだことがないんだよ。」とさりげなく長生きの秘訣を伝授してくださったこと（由井さんを思うたびに、自分自身ももっと節制した生活を心がけねばならないと感じる今日この頃である）。

「おれが生きているうちに、おれに祝辞言わせろや。」と私に対して特別に心配してくださったこと。そして結婚式の際には特別に心のこもった長い祝辞をいただいたこと。式後のご挨拶に窺った際には急であったにもかかわらず、おそばを打って振舞ってくださったこと。専門書をお借りして10年以上も返さずお叱りを賜ったこと。

齢50年以上も隔てた大人（たいじん）との想い出は尽きない。由井さんへの恩返しはこれからの生き方次第である。

**由井さんと共に歩んだご家族と芳江夫人**

由井さん100年、矢出川50年、そして私たちの青春の一コマに耀く野辺山シンポがちょうど25年。そんな、フレーズを頭に描きながら、由井さんの100歳を祝う冊子をつくったのがちょうど１年前のことである。几帳面なヒトには笑われてしまうかもしれない。私の職場のパソコンの画面には、そのときのイラストや由井さんの写真、そして、矢出川遺跡に集った、それこそ、由井さんにとっては、子どもや孫のような人たちから寄せられた、たくさんのメッセージが、今だに残ったままである。何の気なしに、クリックして時々眺める。そんなことを繰り返すうちに、あっという間に１年がたってしまった。

時間の観念というのは、とても長く、遠い昔に感じる時と、つい今しがたの事のように時間が止まって感じられる場合と、物事によって、実にまちまちである。100年という歳月は、その半分も生きていない自分たちにとって、想像もつかない時間である反面、75歳の由井さんに会った時は、つい昨日の事のようであり、また、お顔を拝見したときも、むしろ、周りの人たちのほうが年を重ねているように見えたのは、私たちだけであったろうか。

しかし、それでも写真を見るに付け、時間がたったことに気づく。でも、自分たちの中では、始めてあったときの由井さんのイメージが、25年たっても変わらないままであることも事実である。

私たちが、始めて由井さんにお会いしたのは、1980年の10月であった。「八ヶ岳東南麓における洪積世末期の自然と文化」というテーマの下に、前年度から３ヵ年に渡って行われた矢出川遺跡群の調査の時である。当時、私たちは、明治大学の学部生であった。研究史に燦然と耀く細石器のふるさとに調査団の一員として赴いた。前年度には、大学院の先輩たちがすでに植生調査に入っていた。調査が行われるらしい。そんな、噂を聞いて、是非、連れて行ってもらいたい。そんな念願を抱いていた学部生としては、憧れの矢出川遺跡群の調査に参加できるということで、かなり興奮していた記憶がある。

中央道を走り、須玉インターから野辺山高原へと向かう。真っ青な大きな空と広大な高原とを隔てるかのように連なる八ヶ岳連峰。その姿は、等しく雄大でありながらも、それまで何度となく訪ねていた茅野・諏訪方面から見る八ヶ岳の姿とは、また、異なる趣を見せている。

今、自分が立っている大地から険しい山脈の山裾へと、遮るもののないそのロケーションは、思わず駆け出していきたくなるような衝動を覚える迫力のある風景であった。この印象は、その後も変わっていない。私たちにとって、初めて先土器時代の風景を体感した瞬間でもあった。そして、いつも、この八ヶ岳を背景とする高原に立つ時、太古の狩人の姿を思い描き、たゆまなくその足跡を追い求めてきた考古学者、由井さんの情熱が、何となく、自分たちの中にも流れ込んでくるかのような気になる。

合宿所となった信州大学の寮に調査団が揃ったところで、地元、佐久考古学会の皆さんが激励に訪ねてきて下さった。会長の由井さんがご挨拶をされる。由井さんを知る多くの方々が言われるように、実に、穏やかで、やさしげな方であった。大変、不躾な言い方であるが、恐れを知らない女子大生の私は、かわいらしい素敵なおじいちゃんなどと思ってしまったものだ。しかし、言葉少なに、にこやかな笑顔をじっと奥から学生たちに投げかけていた由井さんが、一旦、考古学の話、遺跡の話、細石器と魚撈の話と、語りだすと、その眼差しからは、ご自身が取り組まれてきた研究に対する信念が、鋭い光となって聞く者を射し、静かに、言葉の一つ一つを確かめるかのように語るその口調には、清楚な研究者としての威厳を思わせる迫力があった。

お祝いの当日、100歳の由井さんから、「考古学の研究のために励んでください」という言葉を頂いたときには、一本筋の通ったまさに時代の人の姿を感じ、改めて感動を覚えずにはいられなかった。何かに付け、弱音を吐いて、ゆらゆらとしてしまう自分たちとは、やはり、まったく違うのだ。ほのぼのとめでたいという会場の雰囲気が、この言葉で、急に引き締まった。おそらく、何年先に行っても、由井さんの心は変わらないだろう。

由井さんに送ったメッセージ集の冒頭に、戸沢充則さん（すべての人をさん付けで呼ぶのが矢出川調査団方式であった。）が、「青春とは、歳を問うことではなく、こころの持ち方の問題である。」と書かれている。変わらぬ由井さんの瞳の輝きとその言葉は、まさに、そのことであり、私たちは、野辺山の地に狩人の姿を追い求める由井さんのこころを、けして忘れることは無いだろう。

## 佐久っ子だね。

**桜井秀雄**（佐久考古学会事務局長）

平成14年10月に、翌年に控えた矢出川遺跡発見50周年を記念して「野辺山シンポジウム2002」が開かれましたが、その際、私は席まで由井さんの手をとって、お連れする役目を仰せつかりました。

廊下で出番を待っているしばしの間、由井さんといろいろとお話をしていましたが、その時、由井さんは

「最近、目が悪くなって、あたり一面雪が降っているように見えるんですよ。」

と、ぽつりとおっしゃいました。その言葉は少し寂し気でしたが、いざシンポジウムに入ると、由井さんは野辺山の旧石器について、かくしゃくと、そして熱い口調で語り始められ、由井さんの考古学にかける情熱の強さを改めて感じました。

なかでも矢出川遺跡での細石刃発見の様子は、自分もその場所にいるかのように情景が思い浮かばれる臨場感あふれるものでした。由井さんからは以前にもその時のお話はうかがっていましたが、何度聞いても感動を新たにするものだと感じいりました。これは、日本考古学上でも屈指の遺跡発見のエピソードだと私は思います。

そんな由井さんに初めてお会いしたのは、私が佐久考古学会に入会させていただいた平成４年のことでした。総会後の懇親会で隣席となり、ごあいさつをしたことを昨日のことのように覚えています。

その席上で、私が小諸出身であることなどを自己紹介でお伝えしたところ、由井さんは「それじゃあ、佐久っ子だね。」とあのやさしい眼差しで言われました。その「佐久っ子」という言葉のひびきはとてもやさしいもので、いまだにその声が心に残っています。それまで私は「佐久っ子」という言葉はあまり耳にしたことはなかったのですが、以来私の大好きな言葉となりました。そして今もこの言葉を時折耳にするたびに由井さんのことを思い出します。

由井さんは昭和48年から平成８年までの24年間、本会の会長を務められ、その後も顧問として長く本会を支えていただきました。

現在私は事務局を預からせていただいていますが、佐久考古学会をより地域に根ざした、活発な学会にしていくために、全会員とともにがんばっていきたいと思っています。

どうか由井さん、われわれを静かに見守り続けてください。

## 由井さんのご自宅で

**藤森英二**（佐久考古学会）

埼玉県で生まれ育った私は、東京の大学を卒業後、平成８年の４月から北相木村の教育委員会に勤めることとなった。由井さんと初めてお会いしたのはその年の11月、もうカラマツの葉も散り始めていた頃だった。

卒業論文の資料見学という名目で、私の借りていた北相木の部屋に泊まり込んでいた大学の後輩横山真君と、川上村の大深山遺跡を訪ね、その足で川上村文化センターの資料を見学した。その時職員の方が声を掛けてくださり、自分たちが考古学を学ぶ者であると話すと、それじゃあぜひ、とその場で由井さんのお宅に電話して下さった。あまりに突然であったが、由井さんからは「寄っていきなさい」というお返事をいただいた。

さっそく私たちは、由井さんのご自宅を訪ねた。由井さんは奥様と二人、初めて見る私たちを温かく向かい入れてくれた。

話しは自然に考古学のこと、矢出川のことになった。由井さんの口から出る言葉は、そのまま考古学の歴史であった。凍てつく野辺山のこと。芹沢先生のこと。明治大学とのこと。そしてもちろん細石器のこと。

聞くうちに、本でしか知らなかった日本の旧石器時代研究の黎明期が、本当に昨日のことのように、目の前に浮かんで来た。

やがて話しは行政の仕組みや、由井さんの政治活動にまで及んだように記憶している。

２時間か、あるいは３時間程もお邪魔しただろうか。私と横山君は、何とも言いようのない感動に包まれて川上の里を後にした。

その夜、私たちは二人でささやかな鍋をした。彼は酒豪だったのでもちろんだが、私も大して飲めない酒を気持ちよく飲んだ。もうすっかり冬の様相だった相木の谷で、暖かい時間を過ごしたのを覚えている。

その後、個人的に由井さんとお話する機会はそう多くはなかったが、あの日お会い出来たことは、私にとって大切な宝となった。今でも川上のご自宅の前を通ると、いや、カラマツの葉が舞うのを見るだけでも、由井さんの淡々とした語り口を思い出す。そして、野辺山に立てば、ついつい細石器を探してしまう。

由井さんというパイオニアを失ったことは残念でならないが、その足跡は永遠だと思う。

どうか安らかにお眠り下さい。

## 川上村の由井先生のお家をお訪ねして

**鈴木千里（考研一期生）**

2003年秋、京都女子大学考古学研究会の卒業生は、川上村の由井先生のお家をお訪ねしました。

「皆さんお元気でしたか。私はもうすぐ百歳になります。足も目も弱くなって、お一人お一人の顔がわからないので申し訳ないです。」と、先生はやさしく私たちを出迎えて下さいました。はじめて先生のお家をお訪ねしたあの頃のように。

1974年、由井先生のご指導のもとに野辺山遺跡分布調査をはじめました。考古学の知識を何も持たずに、ひたすら遺物の表面採集をしました。そんな私たちといっしょに先生は歩かれ、野辺山の地形や動植物、遺跡発掘の話などを丁寧に語って下さいました。

土のついたキャラバンシューズが、玄関に並ぶと奥様は、お茶やお菓子、おもち等次々と出して下さいました。ただこの頃は、奥様のお姿はなく御遺影がかざられていました。

「これは皆さんの写真ではないですか。」と先生は学生時代の私たちの写真が貼られたアルバムを見せて下さいました。首にタオルを巻いた野辺山スタイルのまだ少女のような私たちです。数々の著名な考古学の先生方の写真が載せられたアルバムの中に私たちの写真を貼って下さいました。

「百歳のお祝いにまた来ます」とお別れを告げた私たちを、玄関に立たれ見送って下さった先生の温かい笑顔を忘れることができません。

12月、先生が亡くなられたとの訃報が届きました。

お祝いの品が献花に変わりました。私は不思議に悲しいとは感じませんでした。また野辺山原を歩こう。 川上村の先生のお家をお訪ねしよう。先生はあの時のように遺跡や遺物について、やさしく情熱を持って語って下さるように思えるからです。

大切な物を見失った時、私は川上村の先生のお家から望んだ信濃の山々の雄姿を思います。

由井先生にお会いできましたことを、先生と野辺山原を歩くことができましたことを深く感謝いたします。

---

## 野辺山と由井先生と

**平野雅子（考研二期生）**

32年前。昭和48年、京都女子大学入学。考古学がやりたかったその頃の私は、迷わず考古学研究会に入部。早速に夏の合宿からが野辺山。以後、49年から野辺山原の分布調査開始。春夏の合宿をはじめ四季折々この地を訪れました。

一日中、遺物採集の為、一帯の田畑を歩き回り、夢の中にまで黒耀石の石鏃や水晶のブレイドなどが出てくるほど…。とにかく足が棒になるまで歩き回った記憶だけは残っています。

由井先生との出会いもこの時からである。私たちと行動を共にして下さる為に、川上村からは歩いて来られていたのだろうか？記憶のかなたで思い出せない。

100歳の半分の50の声を聞いた今の私が思うことは、その当時、佐久考古学会長となられた68歳から71歳の先生に接した事になるのだが、とにかくお元気で健脚であった。20歳そこそこの私たちの方が弱音をはく位に、最初から最後までおつきあいして下さっていたことを思うと、さぞかしはがゆく思われていたのではないだろうか。先生と撮った写真をながめると、その当時の先生の歩まれる姿、息づかいが伝わってくるような気がします。

野沢菜はもちろん、いなごの甘露煮など信州の味を色々体験させていただいたのも由井先生宅でしたし、いつも孫を見守るかのようなまなざしで、奥様と共に世間知らずの私たちを受け容れて下さった事は感謝に耐えません。

私事ながら、新婚旅行先に野辺山を選び、76歳の先生ご夫妻に再びお逢いしにお宅を訪れたことからして、その頃の私にとっては野辺山原がいかに比重を占めていたかを物語っています。

由井茂也先生は、天寿を全うされました。ご家族の支えのもと、一つの道を歩み続けられ、多くの方々の心に温かさを残され、多くの方々に囲まれて過ごされた人生は、うらやましい限りです。

由井先生ありがとうございました。

# 由井先生と出会えた幸せ

松谷幹子（考研三期生）

由井茂也先生に初めてお目にかかったのは、1974年の夏、京都女子大学考古学研究会の一員として野辺山へ分布調査に行った時のことです。一年生の私は考古学の知識も何もない状態でした。先生は私達と一緒に歩いて下さり、遺跡のことや表面採集の意義といったことだけでなく、自然や風物、風習など色々なお話をして下さいました。

その後も年２回、春夏に調査のため野辺山を訪れ続け、その度に先生はいつもご一緒して下さいました。私達も一生懸命に歩きました。京都に帰る日には、ご挨拶と報告に先生のお宅へお邪魔します。大勢で机を囲み、わくわくしながら先生のお顔に注目し、でも何となく、はにかんだような空気が流れ、やがて先生がにこやかに穏やかにお話をされるのでした。こうした中で、私も石器にひかれ、自然にひかれ、野辺山全体にひかれていきました。そして、由井先生が、この土地にあってこその視点、愛着をもって遺跡や歴史、暮らしを見つめ考える姿勢に触れることができました。

大学卒業後も、私達は野辺山を忘れられず、何かをやりたい気持ちに駆られました。そこで、由井先生所蔵の石器の実測、観察を行うことをお許し頂きました。専門家ではない私達ですが、地道にこつこつと続けることだけは取り柄でしょうか。実測、観察は先生所蔵の物だけに留まらず、川上村内の他の方々の石器についても行うことになりました。ついには、それらを『川上村誌先土器時代編』としてまとめさせて頂けることになったのです。この身に余る仕事は、川上村始め本当に多くの方々のご理解とご助力を得て完成させることが出来ました。非力な私達をここまで動かす原動力は、ただ由井先生への思いと言ってよいでしょう。先生との出会いがなければ、数々の貴重な経験はありません。先生と野辺山を歩いた日々、お話をきいた日々に始まる私の大切な時間でした。

村誌を終えてからは、遠方に住んでいることもありご無沙汰を重ねてしまいました。一昨年、機会を得て学生時代のメンバーと先生のお宅へ伺いました。先生はとてもお元気でした。そして、30年前と同じように机を囲み、ちょっとはにかんだ空気の後、先生のお話に耳を傾けました。とても幸せなひとときでした。

今、30年を振り返り、改めて先生への感謝の思いで一杯になります。先生との思い出は、野辺山の風景と共に、いつまでも心にあり続けます。

先生、ありがとうございました。

# 由井先生の思い出

柴田直子（考研四期生）

私がはじめて由井先生にお会いしたのは、大学一回生の時の夏でした。考古研の先輩方といっしょに、川上村の由井先生のお宅へ、おうかがいしたと記憶しています。そこで見せていただいた、細石核に心をひかれたものです。あれから、30年近くたちました。先生との思い出を、ふりかえってみたいと思います。

分布調査をしていた頃の事です。だれかが、とても大きな石鏃の脚部をみつけました。それをごらんになった先生は、「山中鹿之助のかぶとみたいじゃない。」とおっしゃって、みんなを笑わせていらっしゃいました。

いつでしたか、先生と有志６人ぐらいで、川端下へシャクナゲの花を見に行った事があります。その時、山小屋のおばさんが、私たちを見ておどろいた様に、「おじいさん、みんな娘さんかい。」といわれました。みんなで、楽しく笑った覚えがあります。

ある時、野辺山へ誰が先に来たかという事が、話題になった事がありました。その時、先生は、「誰が先に来たかなんて事は、つまらない事じゃない。あそこにあっただもの。オレせえ知ってただもの。」と、おっしゃっておられました。

結婚いたしましてから、先生に、敬老の日にあわせて、巨峰をお送りする様になりました。そのお礼状に「敬老の日のやすらぎよ、ぶどう着く」と書いてこられた事がありました。先生によろこんでいただけた事がとてもよくわかり、本当にうれしく思いました。

いつでしたか、別所温泉に逗留しておられた、タカクラ・テル氏を、たずねていかれた若い頃のお話をされた事があります。その時の由井先生は、タカクラ・テル氏を先生と呼ばれて、若い頃を思いだされたのかとても楽しそうになさっておられました。

かぞえで百歳が近くなってこられた頃のお手紙に、こんな事を書いてこられた事があります。「ほぼ一世紀を生きてきた事になります。何のためかはわかりません。」充実した人生を送ってこられたであろう先生が、思いがけない事を書いていらっしゃったので、おどろいた記憶があります。

由井先生との思い出は、みんな楽しい事ばかりです。もっともっと、楽しい思い出を刻みたかった、京女生はみんなそう思っている事でしょう。本当に、立派な方とめぐり会えて、私は幸せでした。素敵な思い出を胸に、これからも生きて行こうと思います。

由井先生、本当にありがとうございました。

## 由井先生の思い出

藤田有利子（考研五期生）

青春の思い出の地を訪れても由井先生にはもうお会いする事が出来ないと思うと寂しくなります。

何となく面白そうと入部した考古学研究会は野辺山原の調査を始めて３年目でした。初めての合宿、お宅で見せていただいた美しい石器が並んだ沢山の箱は八ヶ岳山麓の雄大な風景と共に新鮮な驚きでした。

由井先生は有名な偉い方と緊張していた私達ですが先輩達は楽しそうに話しかけられ、先生もまた笑顔で答えられ、私達もそんなお人柄に引かれて行きました。調査の合間に、また大深山や井戸尻考古館への道すがら、先生は目にふれた事や気付いた事などさりげなく興味を引かれるような話をして下さり、そんな時は疲れた足取りも軽く先生の傍らに寄って行ったものでした。

ある調査の日お昼休みに「こんな物を持って来た」と少し照れたようにリュックから出されたのは沢山のおやきでした。20人分程もあったと思います。私達の為に朝早くから作って下さった奥様、それをお昼まで黙って背負って歩いて下さった先生に感謝しつつ美味しくいただいたことでした。それはお宅でいただいたおそばやお漬物と共に30年近く経た今も由井先生の味として忘れる事が出来ません。

私達が調査の中心となった３回生の頃、先生のご紹介で川上村の玉屋旅館に宿を移しました。調査地も梨ノ木平東部から立石方面であった為、朝先生をお誘いして歩いて調査に向かい、夕方お宅の前で別れ、夕食後またお邪魔するという今から思えば何と厚かましく充実した合宿でした。ほっとした一時、暖かいおもてなしに眠気を催す私達でしたが、当時70才を過ぎておられた先生のお元気さには今更ながらほんとうに驚かされます。

お宅で伺った話の中でも、矢出川遺跡発見当時を語られる姿、また時には考古学に関する話題に厳しく考えを語られる顔には迫力があり、普段私達を温かく見守って下さる笑顔とは違うものでした。それは百歳間近の2002年の野辺山シンポジウムで当時を語られた姿でも少しも変わる事なく、先生の考古学への並々ならぬ情熱を感じました。

シンポジウムを期に先輩の発案で、関係各位のご尽力を頂き、長年部員の願いであった地元への遺物返却が実現し、先生にもお会いしてご報告が出来た事は大変嬉しい事でした。ただ満百歳のお祝いに皆でかけつける事が出来なかったのが心残りです。

心から先生のご冥福お祈りいたします。

## たくさんのお話をする日のために

堤　　隆（八ケ岳旧石器研究グループ）

今年もまたあわただしく年が過ぎた。

由井さんが遠くに旅立たれてから、一年がたった。

昨年暮れ、急な由井さんの訃報に接し、すぐお宅にうかがったが、瞳を閉じたそのお顔を拝見しても、なぜか悲しい気持ちにはなれなかった。由井さんが亡くなったという実感が、私にはまったくわかないのだ。

今でも川上のご自宅にうかがってガラス戸を開けると、奥さんの芳江さんと一緒にコタツにならんで、「お茶でもどうだい」なんて声をかけられ、とりとめのない話に花が咲きそうな気がするからだ。

私が由井さんのことを知ったのは、中学２年生の時、藤森栄一著の『旧石器の狩人』を手にしてからだ。「雪の中の針」として、細石刃の美しい発見物語がつづられていた。それからというもの私の細石刃へのあこがれがつのり、小海線にゆられ、野辺山通いがはじまった。野辺山駅で下車し、矢出川・柏垂・馬場平と遺跡を表採して、夕方、川上駅へとたどりつく。結局、卒論も博士論文も細石刃がテーマとなり、ライフワークとなったのも、由井さんのお導きと感謝にたえない。

川上駅前の赤いトタン屋根、由井さんのお宅にはよく寄らせていただいた。由井さんは、歩き疲れ、腹をすかせた中学生にパンやお菓子などをだしてくれ、標本箱に大切に保管されたたくさんの細石刃をみせてくれた。駅前の食堂からラーメンをとってくれたこともあった。なつかしくもしょっぱい、あの味。私の祖母が由井さんと同じ明治38年生まれと話したので、あるいは孫のように思ってくれたのかもしれない。

一昨年、98歳になった由井さんが、私の勤めるできたばかりの博物館にやってくるという。しかも小海線に乗って。さすがに「大丈夫かな」と思ったが、心配するに足りなかった。ひととおり縄文の展示を見たあと、いつもの自説「先史時代のサケ漁」の熱弁をふるわれていった。その学究心にはほんとうに驚いた。

由井さんの告別式を終えたその夜、戸沢先生とともに佐久平駅前の居酒屋に陣取って、由井さんのこと、野辺山のこと、旧石器研究の将来のこと、たくさんのことに話におよんだ。想い出話も次からでて、少しは供養にもなったのだろうか。最終列車まで腰をすえた戸沢先生も、なんだか少し酔っていたように見えた。天国の由井さんは笑って聞いていてくれたのだろうか。

由井さんとの想い出はつきない。でも、もうこのへんでやめておこう。私の心の中にしまっておくのだ。川上のお宅でコタツにあたり、由井さんや芳江さんとまたたくさんのお話をする日のために。

# 裾野の考古学

## ― 馬場平遺跡から学んだこと ―

由井茂也

### 1

芹沢長介さんが初めて馬場平遺跡へ来た時の話しである。いくら探しても石器らしいものが見つからないので、付近にいたひとに馬場平（ばばだいら）という場所を尋ねると、そんな場所は知らないという。ではここは何と言うところですかと問いなおすと、バッパというところだとの応えである。土地の人たちは、馬場平のことをバッパ、あるいはバッパディラともいう。

馬場平は、御所平の東南隅に位置する藤塚という小山の裾のひらけた段丘である。東北に千曲川の流れを瞰下するが、そこまでには四・五の段丘面が存在している。きわだ坂・中平、住吉神社のある西平、その下が川上中学のあるまい下である。この模式的段丘を地質学者たちは川上段丘と名付けている。馬場平はその段丘の最上段である。

### 2

先土器時代の遺跡はこの馬場平段丘の一線に集中し、馬場平遺跡のほか、よしのしり・詰堀・菅の平などの地名をもつ遺跡が並んでいる。

馬場平遺跡の遺物がどんな頃から注意されるようになったか、それは分からない。が、随分古くから星糞石といわれて話題となっていた黒曜石や、火打ち石と呼ばれたチャートが拾われていたことは確かである。

昭和初年に南佐久教育会が八幡一郎先生の指導で南佐久郡の考古学的調査を行った。その時にも、馬場平から多くの石器が採集されている。それは、当時既にその存在を知っていた村人たちの示唆によるものであった。とにかくそうした古い時期から、馬場平の遺物が採集され、保存されてきたことは確かなようである。

昭和二十年八月、神国日本は有史以来はじめて敗戦・降伏という大きなダメージを受けた。不幸だった長い時代、土器や石器を集めてもこれが人類の本当の歴史だとは口に出していうことができなかった。しかしこんどはようやく周囲の人々に向かって、縄文とか弥生とか、長い原始時代の後に、古墳時代という権力者の時代が生まれてきたのだと公然と説明することができた。そしてこんどは先土器時代である。

### 3

昭和二十八年八月南佐久教育会の主催で、考古学講座が臼田の小学校でもたれ、講師に八幡一郎先生が招かれていた。私は竹内恒さんにさそわれ出掛けていった。第一日目が縄文時代、そして弥生・古墳時代という講義の予定であった。そうした重要な講義に際し、資料の１枚も配られていないことは、戦後の貧しさを象徴していた。さて、当時すでに著名であった大学教授の講義を受けた楽しさに明日も出席する予定で家に帰ると、夕方学徒が訪ねてきてまた明日早く訪ねてくるからといって帰ったところだという。

次の日朝、約束どおり早くに人が訪ねてきた。名刺に明治大学芹沢長介とあり、初対面であった。昨夜は近くの旅館に泊まり、宿で馬場平遺跡の話をすると、そんなことなら近所の私に聞けといわれて来たのだという。要件は馬場平遺跡の状況を聞き遺物を見たいということであった。話が長引き、今日の講義を諦めなければならなくなり、わたしは当惑した。しかし、しだいに芹沢さんの話に引き込まれていった。そして、馬場平遺跡では石器だけが見つかって土器や石鏃はほとんど見つかっていないことなどを話した。

とにかく石器をということで、私が見て石器だと思えるようなものばかり選んでおいて見せた。芹沢さんは「すばらしい、すばらしい」の連発だった。もっと屑でもよいからみんな見せてくれというので、小屋の中に散らばっている石屑と思っていたものを見せるとこれがほとんど立派な石器だという。そしてそのひとつひとつに名称を付け、初めて発見したもののように感激した。木の葉形の石槍以外は、石屑か石器の作りかけかと思っていたものが、ほとんど完形で、ブレイド・スクレイパー・ドリルなどと呼ばれてそれぞれの用途があることを知った。それらは間違いなく縄文時代より以前の遺物で、当時それはプレ縄文と呼ばれた。

私は初めてプレ縄文の存在を知り、すでに昭和24年群馬県岩宿遺跡が発見されて以来、研究が続けられていることを知った。また、岩宿遺跡の発見者相沢忠洋さんについても面白おかしく話を聞かされた。その日八幡先生の講義をのがしたことを悔やみつつも、最先端の考古学の話を聞くことができたとおもい感激した。

そして、馬場平遺跡の学術調査の話しがまとまった。

### 4

幾度となく打ち合わせが続けられ、十月がきた。

川上村の秋は早く、木々の葉も落ちて、馬場平は荒涼たる風景に変わっていた。トレンチは、最初に遺物が最も多く採集された畑に入れてみた。ところが表採が多くできる場所ほど地層が撹乱されていた。何箇所かの試掘に失敗した後、表採は少なかったが高めの畑

にトレンチを入れたところ、実に美しいローム層が現れた。今日まで「赤土」と呼んでどこでも普通にみられ何の疑問ももたれることがなかったその土層が、「ローム層」と呼ばれ、今から一万年以上も前の火山の噴出により堆積したものであることを教えられた。あらためてこのローム層は、今一万年前の眠りから覚め太陽の光りにめぐり会ったのだと思った。そしてローム層は堆積したばかりのようなつやめきで輝いてみえた。

このローム層中にはたして一万年以上も前の人類の生活面があり、遺物が包含されているのであろうか。ローム層中の調査は丹念におこなわれた。それは今日のように多くの参考論文や報告書がある時代ではなかった。むろん予備知識といっても今日のような豊富なものではなくむしろこの調査が出発点なのである。

ローム層はほとんど撹乱されておらず、原初の堆積状態をとどめており、掘り進むにつれて遺物の発見が相次いできた。石器が出るとそれらは皆の手から手へと渡り、撫でられた。そしてついに目標としたポイントが発見された。そのとき、誰かが大声で「論文取り消せ」といったので、皆が大声で笑った。それからというもの、ポイントが出る度に「論文取り消せ」の声が合唱され、「電報打て」と続けられるのであった。当時は岩宿発見からすでに四年が経過しているので、プレ縄文に対する見解もそう不安定ではなくてもよさそうなものだが、専門家たちの間にはまだまだ様々な見解があったのだという。「論文取り消せ」は、著名な考古学者の論文に対する反論であることは、聞かなくともわかった。それまではプレ縄文の存在自体は認めても、石槍（ポイント）はプレ縄文ではないという見解が強かった。そしてポイントがプレ縄文の所産であるという動かし難い事実を突きつけたのがこの馬場平の調査の意義であると私はおもった。

発掘調査の、予定の５日間はあっという間に過ぎた。けれども成果は大きかった。ポイントを主体とする一連の石器群、さらにマサカリのような刃部を上にむけて据え置かれていた礫器や深く埋められていた台石などは、当時の人々の生活を偲ばせるもので感激した。その調査を通じ、馬場平遺跡には小形のポイントとそれに付随する石器群も存在することが予測されたが、その確認は次期の調査にまつことにした。その後の表面採集調査で小形ポイントと小形切出形石器の伴出する遺跡が、馬場平の段丘に連続して存在していることが明らかになってきている。

## 5

馬場平遺跡の発掘調査を通じて私の理解したものは、まずプレ縄文という遺跡と遺物であった。ことに石器は、縄文のそれとは明らかに区別できるもので、用途は同じだとしても形態は異なっていた。また、土器や石鏃が発見されず、それによって無土器文化などとも呼ばれた。決定的な相違は、遺物包含層がそれまで無遺物層といわれてきたローム層中にあったことである。

そうした馬鹿の一つ覚えのようなもののなかから、無学な私なりの考古学に対するひとつの考え方が生まれた。考古学というものは、非常に高い山のようなもので、その頂点をめざし大勢の研究者たちが競っている。そうした難しい学問家たちの研究の後を一生懸命追いかけたところで、それは到底及ぶものではない。考古学の頂点は高くてとても登れないが、その山の裾野はまた、はかり知れないほどひろい。そこにも頂点と同じように新しく新鮮な研究分野がある。それは馬場平の調査を通しての立派な教訓でもあった。ことにプレ縄文の研究はまだ端緒についたばかりで、裾野に住むものではなければできない調査が数多くまっているのではないかという期待でもあった。そしてこの馬場平の調査のように、難しい講義を聴いているような堅苦しさはなく、身近な談笑の中から学んでいけるのだと、ほのぼのした明るさを感じた。

（『佐久考古通信』№51号より転載）

### ♪　編集後記　♪

残された仕事が我々にある。それは由井さんが半世紀にもわたって執念の火を灯し、蒐集し続けた膨大な旧石器資料を、散逸することなく、後世に引き継ぐよう道をつけることだ。日本を代表し世界の先史考古学上でも知られた矢出川遺跡や、馬場平遺跡の資料群だ。それが由井さんへの最大の敬意であり、考古学に携わるものの責任といえる。歴史遺産を未来へと残す取り組みについて、ご家族のご理解をいただければ幸いである。

たくさんのみなさんから、思い出の詰まった言葉を本誌ではいただいた。遠い空にいる由井さんや芳江さんにも、きっと届いているに違いない。　（つつみ）

**佐久考古通信　№94・95**

発行所　佐　久　考　古　学　会
〒384-0091 小諸市御影新田1945-6
桜井　秀雄　方
郵便振替　00570-9-2842
☎ 0267 (22) 8536

発行者　藤沢平治
編集者　堤　隆
印刷所　ほおずき書籍㈱

佐久考古学会
シンボルマーク

SAKU 佐久考古通信
佐久考古学会
ARCHAEOLOGICAL JOURNAL
2006.5.10. No.96

★ 目　次 ★

シリーズ 日本の遺跡・世界の遺跡19　横穴古墳 —福島県—……嶋村一志……1
考古逸品　香炉型土器……長崎　治……2
石器を割るテクノロジー……有本雅己……4
平成17年度埋蔵文化財パトロール結果報告……埋文保護委員……8
新刊本の紹介……堤　　隆……9
フォーラム「原始の顔・古代のよそおい」開催される……事 務 局……10
追悼・樋口昇一先生 ……堤　　隆・藤澤平治……11・12
訃報　芹沢長介先生御逝去……12

世界の遺跡・日本の遺跡19

# 国史跡・泉崎横穴（よこあな）

—福島県—

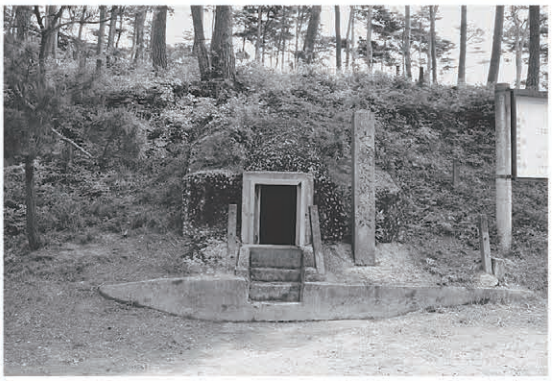
泉崎横穴は、陸奥（みちのく）の玄関口である白河関のほど近く、現在の福島県中通り地方南部に位置する泉崎村にある。昭和８年12月、道路工事中偶然に発見されたこの横穴は、石室内部に赤色顔料によって騎馬人物や馬などの絵画が描かれており、東北地方最初の装飾壁画の発見となったことで知られている。

石室の平面形は南北2.05m、東西2.3mを測り、主軸方向にやや長い長方形を呈している。立面形は家形で、床面から最も高いところで1.16mを測る。四壁は50～60㎝の高さを保ってほぼ垂直に立ち上がり、天井との境に明瞭な切り込みがみられる。奥壁側は幅約0.6mで一段高く屍床が設けられており、奥壁と平行する堤によって仕切られている。この屍床には排水装置があり石室中央に設けられた排水溝に連結している。出土遺物は刀子・直刀が各一本と鉄環だけであったが、別の横穴から見つかった須恵器高坏などから６C末～７C初頭頃の築造と考えられている。

壁画は石室の天井部と東・南・北壁の三壁に描かれており、騎馬人物をはじめとして手を繋ぐ男性像・捧げものをする女性像・馬・渦巻・三角文・珠文など内容豊かものである。壁画の解釈については、諸説あり未だ釈然としないが、福島県内の太平洋側で発見されている装飾横穴には同じ図文のみられるものがある。

当地域周辺には白河国造の墓に比定されている下総塚古墳（白河市）や白河郡衙に比定されている関和久官衙遺跡などが所在しており、泉崎横穴の被葬者像を推定するうえで極めて関連性のある遺跡として注目されている。なお、泉崎横穴は現在保存修復を行っており平成20年春再公開の予定である。

（泉崎村教育委員会学芸員・嶋村一志）



泉崎横穴外観（写真提供：泉崎村教育委員会）

泉崎横穴内部。鮮やかな壁画が残る

考古逸品

# 人面香炉形土

縄文時代中期中葉の土器で、そのデザインから人面香炉形土器と命名されている。昭和35年に行われた大深山遺跡の第２回調査と第３回調査による第15号竪穴（住居址）の発掘調査により出土し、平成12年に村有形文化財に指定された逸品である。

この土器は、ほぼ完形で出土し、その焼成は良好で、外面及び内面は黒褐色をなしている。また、砂粒子を多く含んでおり、2,175ｇと重量感ある仕上がりである。形態的な特徴は、高さが28.5㎝で幅が27.0㎝あり、底の直径は11.5㎝で鉢の部分が小さく、そこから突然広がり上部にむかって角錐状になっている。また、釣手部分の面積が大きく、透窓的なものが正面に１箇所、背面に２箇所あり、顔面把手を想像させるつくりで、この土器の独特性を著しくしている。顔面部の浅鉢から広がった部分に立体的な文様の一部として三箇所の貫通した穴がみられ、紐を通すことが可能であり、同様に上部にも三箇所、さらに把手部分である下側の両側にも見られる。また、背面２箇所の透窓や内部の天井部分に煤の付着がみられ、土器内部に燃料を入れ、火を灯した可能性が強いものと思われる。日常的ではなく大切に扱われたであろうこの土器、その用途は不明な部分が多く残され、縄文時代の人々の精神性が秘められているのであろう。

大深山遺跡は昭和８年に牧場の柵を作る作業中に土器が出土し、発見された。昭和28年、昭和34年に調査され、昭和35年からは八幡一郎氏の指導により昭和37年まで７回の発掘調査が行われた。これら活動の原動力となったのは、地元大深山地区の高齢者であり、発掘現場の遺跡公園化、大深山考古館の管理、運営にも尽力し、大きな功績を残した。遺跡は昭和41年、国史跡として指定を受け、現在は遺跡公園として開放され、出土遺物は川上村文化センターに展示されている。

*Data*

## 人面香炉形土器

●時　代：縄文時代中期

●出土地：南佐久郡川上村
大深山遺跡

●用　途：ランプ的機能？

●特　徴：ほぼ完形で出土し、重さは２kgを超える。
顔面を模した造形

●所蔵・展示：川上村文化センター

# 器

長崎　治

（写真提供：川上村教育委員会）

# 石を割るテクノロジー

有本　雅己

## 1

石器時代には、石器という石の道具を作るうえで、石を割っていく規則的な手順が考案されました。この手順を一般的に“技法”と呼んでいます。技法は全国各地域、また旧石器時代から弥生時代までの各時代に、さまざまなものが考え出されました。

ではなぜ、こうした技法というものが生まれたのでしょうか。一般に石を割って道具を作る際、ただ闇雲に石を割って作っていてもなかなか思い描くものを作り上げることはできません。石を思い通りに割るためには、まず割る石の特性を知り、それに則って打撃を加えなければなりません。石を上手く割るには長年の経験によるテクニックの習得が必要になるのです。そして苦労の末に作られたひとつの石器が、何日も、また何ヶ月も使うことができるというなら別ですが、ほとんどの石器（道具）は生活の中では短期的な消耗品です。したがってよく使う道具は、生活を営むうえである程度の量を確保する必要があります。そのために当時の人々は、いかに効率的に石器を量産するか考えなければならなかったわけです。無駄のない割り方をして理想とする石器をいかに量産するか。そのためには同じ大きさで同じ形、いわゆる規格的な石器素材になる剥片を量産することが前提となります。“技法”はこの目的を克服するため、長い経験の中で生み出されたテクノロジーということになるでしょう。そしてそれは、当時の人々の生活を支えることでもあったと言えます。

## 2

さて、ここで紹介するのは、サヌカイト（讃岐石）という石です。サヌカイトは溶岩が急速に冷やされてできた黒色の岩石で、硬く緻密な特性から石器の素材として多用されてきました。産出地として有名なのは、大阪府と奈良県の境にある二上山北西麓や香川県の国分台周辺、佐賀県の多久市で、近畿・瀬戸内地方の打製石器は旧石器時代から弥生時代まで、ほとんどサヌカイトが使用されているといっても過言ではありません。もともと讃岐石と呼ばれるのは、香川県の讃岐地方に産出することからです。

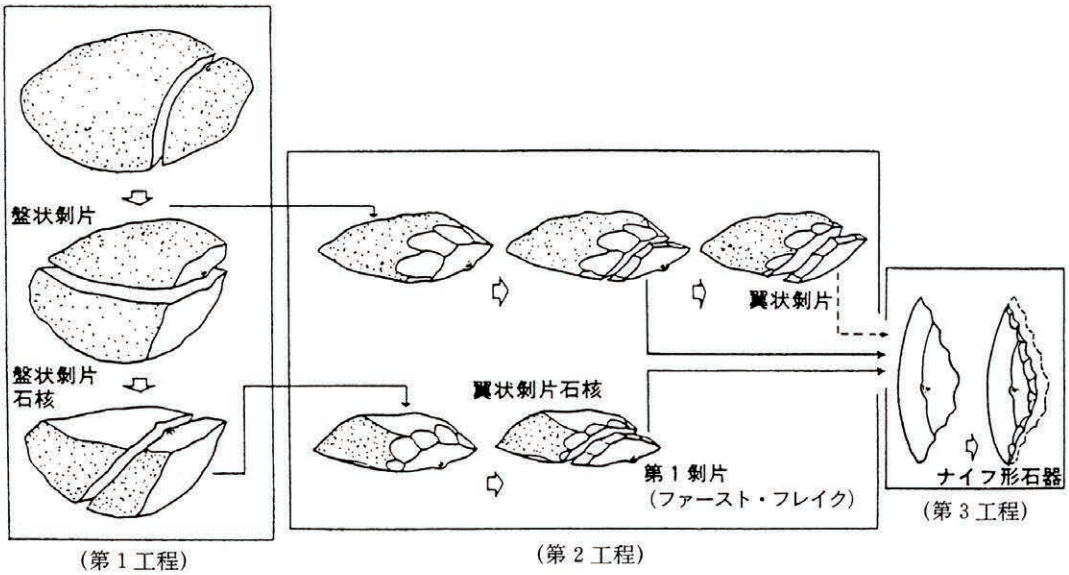
サヌカイトは横長に剥がれやすいという特徴をもっています。長野県で石器の材料によく使われた黒曜石は、縦に長く剥がれやすいという特徴をもっているのとは対照的です。この横長に剥がれるという特徴を利用して作られた『国府型ナイフ形石器』は、近畿・瀬戸内地方で量産されたナイフ形石器です。国府型ナイフ形石器の名称は、大阪府藤井寺市国府遺跡で最初に確認されたことから付けられましたが、この石器を作るうえで『瀬戸内技法』と呼ばれる、石を割る工程があったことがわかっています（鎌木 1960、松藤 1974）。

瀬戸内技法は３つの工程で原石から国府型ナイフ形石器を作ります（第１図）。まず原石から分厚い剥片を割り出す工程（第１工程）、次に割り出された分厚い剥片から翼状剥片と呼ばれるナイフ形石器の素材になる規格的な剥片を量産する工程（第２工程）、最後に翼状剥片をナイフ形石器に仕上げる工程（第３工程）です。これらの工程はサヌカイトの横に割れるという特性を活かして考えられたテクノロジーですが、それでもこの通りに割ればすべてうまく国府型ナイフ形石器を作れるわけではありません。割っていく過程で思い通りに割れなかったり破損することも多く、石器を量産するには相応のリスクはあったと思われます。このリスクを小さくするために、当時の人々は原石産出地で集中的に石器を作ることにしました。原石産出地には石材が豊富にありますから、失敗しても次々と新しい原石を使用することができます。そして失敗品はその場に捨て、上手く仕上がったものを生活の場へ持ち出せば良いわけです。サヌカイトの原石産出地では、こうした瀬戸内技法によって国府型ナイフ形石器が作られた製作址が多く発見されています。

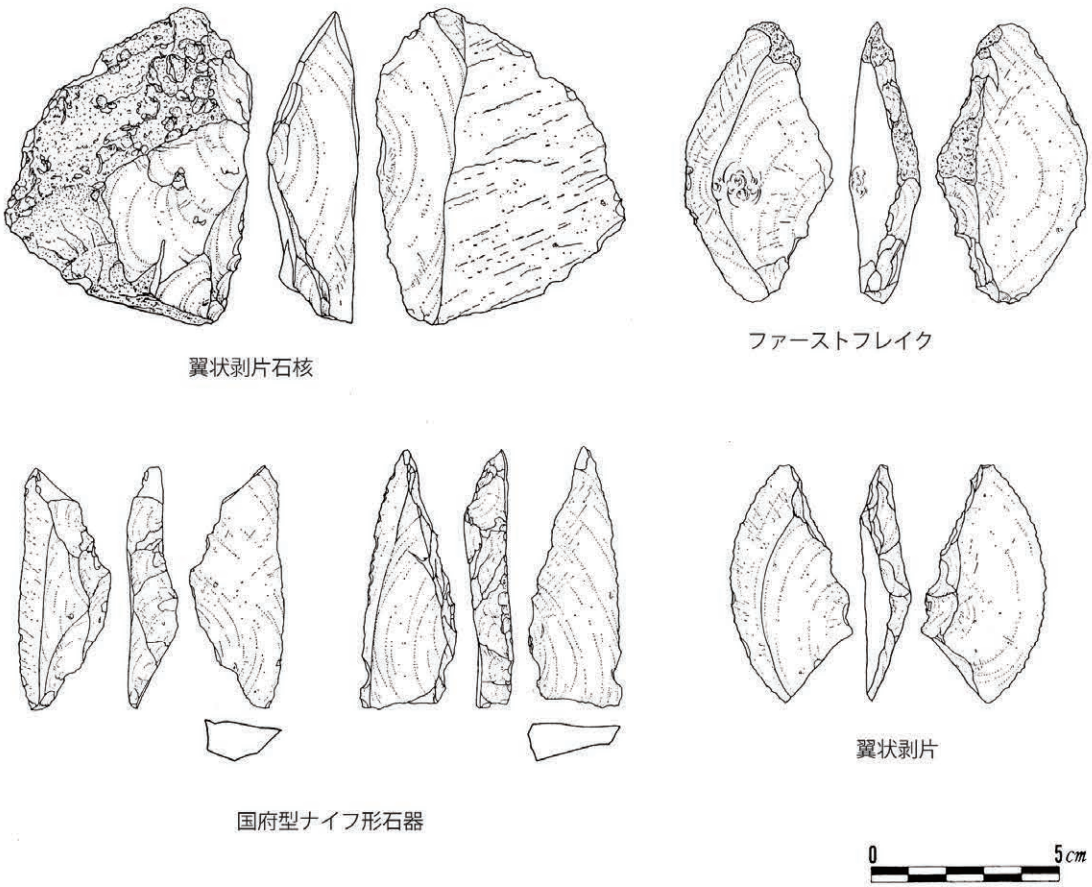
## 3

ところで瀬戸内海沿岸では、弥生時代の中期頃から打製石庖丁が作られようになります。通常、石庖丁といえば弥生時代になって稲作とともに大陸から伝来した磨製のものを想起しますが、瀬戸内海沿岸の香川県や岡山県では磨製石庖丁とともに、石の表面を磨かない打製の石庖丁も使っていました。香川県では磨製石包丁は流紋岩や安山岩などを磨いて作られていますが、打製石包丁はサヌカイトで作られています。

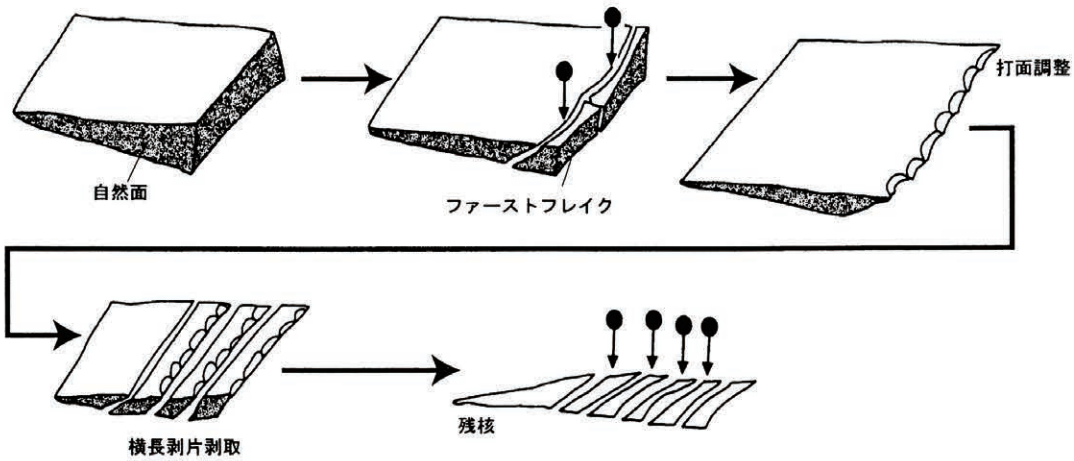
香川県にはいくつかサヌカイトの産出地がありますが、弥生時代には『金山』という山で産出したサヌカイトを利用していました。この金山産のサヌカイトは瀬戸内海沿岸だけでなく、近畿地方にも運ばれていたようです。ですからこの時代、金山が打製石器の素材供給地の役割を果たしていたと考えられます。



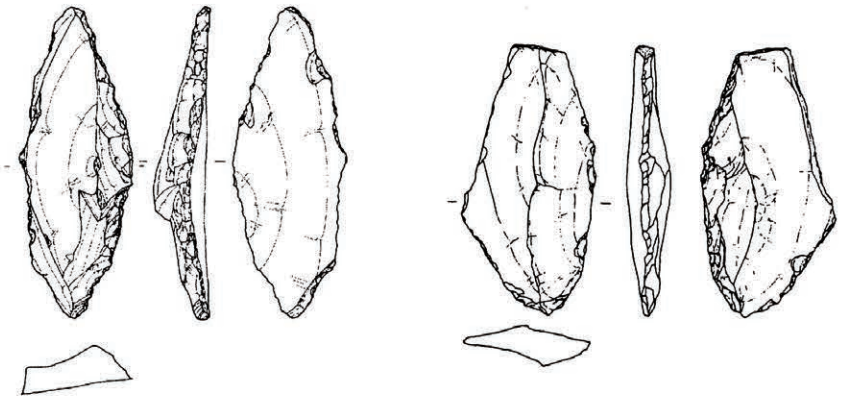

第１図　瀬戸内技法模式図



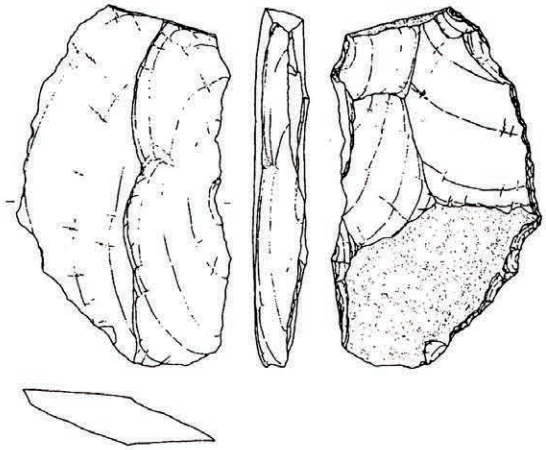

第２図　瀬戸内技法による遺物（二上山北麓遺跡群出土）



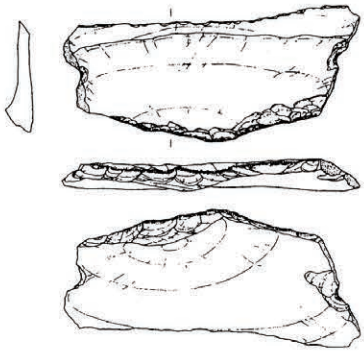

第３図　金山型剥片剥離技術



金山型横長剥片（金山北麓散布地）



金山型横長剥片石核（金山北麓散布地）



打製石庖丁（香川県久米池南遺跡出土）

第４図　金山型剥片剥離技術による遺物

近年この金山の北麓で、打製石包丁を量産した製作址が発見されました。ここで発見される剥片や石核を観察すると、打製石包丁は『瀬戸内技法』とよく似た割り方で作られていることがわかりました。製作工程を復元した香川県埋蔵文化財センターの森下英治さんは、この割り方を『金山型剥片剥離技術』（森下 2002）と名付けました（第３図）。第１図（瀬戸内技法）と第３図（金山型剥片剥離技術）を比較してみると、瀬戸内技法の第１工程に相当する割り方は金山型剥片剥離技術では不明ですが、第２工程は両者ともよく似ていることがわかります。ただ金山型剥片剥離技術では、瀬戸内技法と同じような手順で割っているにもかかわらず、金山産の石材では剥ぎ取られる剥片が平べったいものになるようです。これは金山産のサヌカイトが、他で産出するサヌカイトよりも板状に割れやすいという特徴があるからか、あるいは瀬戸内技法とは素材剥片（瀬戸内技法では「翼状剥片」、金山型剥片剥離技術では「金山型横長剥片」）を割り取るための加撃の角度など違うからか、今のところ明確ではありません。こうした両者の相違点については今後の分析によって明らかにしなければなりませんが、いずれにせよ弥生時代人は石材の特徴を理解したうえで、金山のサヌカイトで打製石包丁を量産する方法を考えたのでしょう。

現在のところ、金山の製作址では完成した打製石庖丁は発見されていません。目に付くのは破損した石庖丁の素材剥片（金山型横長剥片）や素材剥片を剥ぎ取ったあとの残核（金山型横長剥片石核）、それに石を割るための叩き石（ハンマー）です。もちろんこれらの他にも大量の石片が散布しており、それこそサヌカイトの山という感じですが、打製石包丁はもとより石鏃や削器などの石器もほとんど見つかっていません。今後の調査で発見される可能性はあるでしょうが、現況では打製石包丁の素材剥片を専門に作る場であったと想定して良さそうです。おそらく弥生時代人は、この場所で金山型剥片剥離技術によって打製石包丁の素材を量産し、上手く剥がれた素材剥片だけを集落遺跡へ運んで石庖丁に仕上げたのでしょう。

## 4

今回紹介した事例でわかることは、一つの技法が特定の時代の産物ではないということです。瀬戸内技法という割り方が旧石器時代に生み出され、これが弥生時代に至るまで伝統的に受け継がれてきたとは考えられません。ですから瀬戸内技法は国府型ナイフ形石器を作るために、金山型剥片剥離技術は打製石包丁を作るために、その当時の人々が試行錯誤して考え出したものと言えるでしょう。

どちらも共通していることは、目的とする規格的な石器の素材剥片を合理的に量産する技術であるということです。それは石の特徴を熟知することによって、おのずと割り方というのは似てくるということです。石というのは「割りたいように割る」ことはできません。あくまでも「割れるようにしか割れない」のです。この物質的な規制のなかで、それを利用した人々は目的とする石器（道具）を作るために最も適した割り方を創造したことがわかるのです。

引用文献

鎌木義昌　1960 「打製石器にみる生活技術」『図説世界文化史体系20日本Ⅰ』平凡社

松藤和人　1974 「瀬戸内技法の再検討」『ふたがみ―二上山北麓石器時代遺跡群分布調査報告―』学生社

森下英治　2002 「石器の生産と流通」『第16回古代学協会四国支部研究大会　弥生時代前期末・中期初頭の動態―研究発表要旨集―』

## 原稿・情報募集中

『佐久考古通信』では、皆様からの原稿や、身近な考古学の話題を募集中です。

遺跡の調査やイベントの情報など、どうぞお寄せ下さい。

# 平成17年度埋蔵文化財パトロール結果報告

埋文保護委員

昨年の年も押し詰まった12月18日の日曜日。恒例の佐久考古学会による埋蔵文化財パトロールが行われた。保護委員による企画としては今回で４回目であり、今年は南北相木村と新生・佐久穂町をめぐる予定であった。

当日は事務局長とともに小諸で待ち合わせし一路南佐久へ向かったが、風雲急を告げるが如く、空はかき曇り大粒の雪が舞い始めた。雪は南に向かうほど激しさを増し、地元会員待ち合わせの旧八千穂村役場では燦々と降りしきる雪となった。

「どうしましょう。」の保護委員の問いかけに、

「いけるところまで行って見ましょう。」事務局長の心強い一言に後押しされ、

地元の会員も含め一行は最初の目的地である北相木村に向かった。

トンネルを抜けるとそこは雪国であった。……と言う小説があったが、北相木の資料館に着く頃は雪はやみ、雲間からまぶしい光が相木川の水面に降り注いでいた。

「さあ皆さん、パトロールです。」事務局長の力強い一言で本年度のパトロールが開始された。

北相木村の栃原岩陰遺跡をはじめ、南相木村の各遺跡をめぐり午前中が終了、午後は新生・佐久穂町の特に旧佐久町をめぐった。しかし、朝方の雪に覆われ十分なパトロールとは言えなかったが、昨年の旧八千穂村でも見た、大規模な農地改良により大きく旧来の地形が失われていた。登録遺跡の範囲外である部分も多いが、詳細な遺跡の範囲の把握が必要であると痛感した。冬の日没は早く、一行が八ヶ岳山麓から降りる頃は本間下城跡に日はすっかりと傾いていた。

「日が暮れました。」事務局長の静かな一言で　本年度のパトロールも無事終了した。

今回は12月という期日設定の不備があり　十分な行程が組めなかった。来年度の課題としたい。なお、私が保護委員を引き継いで丸６年が経過した。６年の節目と言うこともあり過去６年分のパトロール結果を一覧表にまとめてみた。当初、「事務局も地元会員の皆さんと地域の遺跡を巡って、パトロールをしよう。」という目標のもと南佐久郡から始まった企画であったが、来年度の立科方面をまわると一巡である。来年度のパトロールの運び方も含め、今後「学会としてのパトロールの関わり方」を再考する時期に来ているように思われる。会員各位の忌憚のないご意見を伺いたい。

トンネルを抜けるとそこは……

日没の本間下城跡

埋蔵文化財パトロール結果表

| | H12 | H13 | H14 | H15 | H16 | H17 | 合計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 佐久市 | 29 | 21 | 17 | 40 | 5 | 11 | 123 |
| 小諸市 | 5 | | 7 | 8 | | 5 | 25 |
| 軽井沢町 | 14 | 9 | 15 | 13 | 12 | 14 | 77 |
| 御代田町 | 5 | | | | | | 5 |
| 立科町 | | | | | | | 0 |
| 望月町 | | | | 13 | | | 13 |
| 北御牧村 | 9 | | | | | | 9 |
| 浅科村 | | 4 | | | | | 4 |
| 臼田町 | 7 | | 26 | | | | 33 |
| 佐久町 | | | | | 18 | | 18 |
| 佐久穂町 | | | | | | 29 | 29 |
| 小海町 | | | | | 5 | | 5 |
| 北相木村 | | | | | | 8 | 8 |
| 南相木村 | | | | | | 8 | 8 |
| 八千穂村 | | | | | 30 | | 30 |
| 南牧村 | | 24 | | | 1 | | 25 |
| 川上村 | | 8 | | | | | 8 |
| 合計 | 69 | 66 | 65 | 74 | 71 | 75 | 420 |

# 新　刊　案　内

## 『石槍革命 ―八風山遺跡群―』

須藤隆司著　3月31日　新泉社刊行

「石槍革命」とは何とも刺激的なタイトルである。本書は、佐久市教育委員会の須藤隆司が、自らが調査を実施した佐久市香坂の八風山遺跡群を題材に、石槍の生成をドラマティックに追ったものである。

佐久市八風山周辺は、もともと黒色安山岩の産地として知られていたが、長野自動車道の下茂内遺跡の調査を皮切りに、後期旧石器時代から縄文時代草創期にかけての大規模な石器製作址が存在することが判明した。

須藤は、出身校の明治大学考古学博物館に勤めていたが、縁あってか佐久市に勤めることになった。それまで佐久市に旧石器遺跡はなく、「須藤さんが旧石器を連れてきたね」といわれたという。須藤は、明治の明治らしい石器研究を受け継ぐ、数少ない人間である。

八風山遺跡群から出土した石器のひとつひとつを丹念に接合し、その製作工程や、遺跡構造を読み解く仕事を、須藤はこれまでおこなってきて、厚さ５センチもある報告書も出した。その成果を旧石器時代史に還元したのが本書で、次のコンテンツからなる。

第１章　厚い火山灰の下に
第２章　石槍の発明
第３章　旧石器社会
第４章　石槍の革新
第５章　旧石器社会の進化

以上の章立てからもわかるように、本書は石槍を通じて、その革新性を論ずるばかりでなく、旧石器社会やその進化をも視野に入れた渾身の著作である。

（96頁、オールカラー、1,500円。浅間縄文ミュージアムで電話注文できます。電話0267－32－8922）

## 『藤森栄一を読む』

諏訪考古学研究会編　3月1日　新泉社刊行

藤森栄一が没してから33年だという。しかし、これほどまでに色あせず輝き続けているのはなぜだろう。

本書は、教え子らが書いた藤森栄一全集の解説等を再録し、新たな編集を加えた１冊である。

諏訪考古学研究会長の高見俊樹さんは、「いまも藤森栄一は私たちの傍らにいて、私たちとともに考古学を考え、人生を一緒に生きている」と序文で述べる。実感に違いない。考古学を考え、というところが深い。

おそらく、各執筆者がかかげるタイトルを目にしただけで、藤森考古学の世界を想像できるにちがいない。

「私の学問、そして考古学の世界」稲垣惣司、「人間、藤森栄一とその考古学の原点」戸沢充則、「久遠に輝く心の灯」神村透、「〈道〉を求めて歩んだ藤森栄一の生涯」桐原健、「うたいつづけた信濃」服部久美、「考古学への情熱に生きた人間の記録」林茂樹、「教育者藤森栄一とアマチュアリズムの系譜」森嶋稔、「わかりやすい考古学の話」松沢亜生、「実感として書かれた考古学の世界」樋口昇一、「高原に甦る執念の灯」武藤雄六、「生活する古代人の探求」桐原健、「考古学と古代史の結合をもとめて」宮坂光昭、「生きた縄文人を掘り出す研究の軌跡」戸沢充則、「藤森栄一の文学とその世界」野本三吉、「神から人の歴史への考古学」宮坂光昭、「再発見、藤森栄一の学問の輝き」」戸沢充則、「藤森栄一の生涯、その４つの節」神村透。

後記では、現在の考古学の直面する厳しい状況を省みる時、改めて藤森考古学の学問的精神を生かすべきだ、と締められている。ぜひともご覧いただきたい。

（310頁、2,500円。浅間縄文ミュージアムで電話注文できます。電話0267－32－8922）

佐久考古学会・浅間縄文ミュージアム共催

# フォーラム「原始の顔・古代のよそおい」　開催される

平成17年度、佐久考古学会では御代田町「浅間縄文ミュージアム」との共催により、シリーズ講座として「考古学が語る大昔の佐久」というテーマの講座を開いてきたのはご承知のことと思います。

プロローグとしては７月に林幸彦副会長による「佐久の原始古代の謎」という講演があり、その後月ごとに、第１回目は「佐久地方最古の人々（旧石器時代）」で講師は長崎治会員、２回目以降が「花開く縄文文化」・藤森、「稲作を始めた人びと（弥生時代）」・森泉かよ子会員、「古墳が作られた時代」・冨沢一明会員、「古代のムラは語る（奈良・平安時代）」・桜井秀雄事務局長と、本会のメンバーを講師として行ってきました。堤隆会員の軽妙な司会で進行する桜井事務局長と講師による討論風の時間もあり、毎回50名程の聴講者に集まって頂きました。当会ホームページの掲示板の書き込みを見ると、一般の方々からもよい評価を頂くことが出来たようです。

そして去る１月22日、上記の５人の講師に加え、縄文土器の美と神秘をファインダー越しに写し出す写真家の滋澤雅人氏をお迎えするかたちで「原始の顔・古代のよそおい」というフォーラムが開催されました。場所は御代田町エコールみよたの大ホール。一応パネリストの一人であった私は、当日ステージで打ち合わせの際「こんな大きな会場、埋まる訳がない」と唖然としました。

しかし、この日は第一部として、國学院大学の小林達雄教授の講演会がありましたので、当然のごとく多くの来聴者がお見えになり、結局200名近い方々にお集まり頂きました。

小林先生のご講演のテーマは「縄文のよそおい」。無論縄文時代を専門とし、国内至る所の縄文遺跡を知る先生のご講演は、大変興味を引かれるもので、後半は縄文時代の社会や歴史時代の装飾史にも触れられるなど、とても示唆に富む内容でした。

後半のフォーラムでは、司会の堤会員の発案により、司会の紹介に併せてパネリストが一人ずつ舞台の中央に登場するという粋な演出もあり、会場のボルテージは一気にあがります（？）。

さて肝心の中身ですが、佐久地域の事例はもちろん、各時代の「顔とよそおい」を、スライドも用いて説明。普段どうしても自分の専門とする時代のことばかりに目がいきがちな研究者にとっても、一つのテーマで各時代の話しを聴けるのは刺激的でした。さらに滋澤雅人氏の縄文土器写真も披露され、氏の世界観も垣間みられました。

途中、佐久市後家山遺跡の弥生時代鉄釧の発見秘話（何と職場体験の中学生が発見！）が披露され、さらに話題は縄文人の髪型からパネリスト達の頭髪問題へ広がるなど、フォーラムというかたちでしか聴くことの出来ないほのぼのとした（？）場面もありました。

またこの日も含め、浅間縄文ミュージアムでは恒例となった佐久の考古遺物を集めた企画展も開催されており、多くの方が佐久の原始・古代に思いを馳せていたようです。

夜は小諸市の中棚荘で、小林先生を囲んでの懇親会。参加者には國學院大学の出身者も多く、話しは夜遅くまで盛り上がりました。特に小林先生の「縄文土器の様式論」について、先生ご自身から実に明快なご説明があり、一同感激でした。

このように、多くの市民の方々にもお越しいただけるような当会のイベント、これからも続けていきたいものです。　（事務局・藤森）

小林達雄先生のご講演

当会パネリストによるフォーラム

# 樋口昇一先生の死を悼む

堤　隆

私も40の半ばを過ぎ、身近な人の訃報に時おり接するようになった。それなりの覚悟はできているつもりだった。しかし、樋口昇一先生の死はあまりに突然訪れた。今年１月12日早朝のことだ。先生は、昭和７年生まれ。私の父と同じ年であることが、余計に近しい悲しみをもたらした。

平成17年暮れ、樋口先生が心血を注いで編集された『永峯光一著作集』が完成したという知らせを受け、ひとこと先生に「お疲れ様でした」と声をかけようとお電話したところ、奥様が出られて、取り次ぎにしばらく時間がかかった。

やがて先生が出られたが、ややハリのない声だったので「お休みでしたか」と聞いたところ、「いや、少し体調が悪くてな」と、少しなまったあの親しみのある独特な節回しでいわれた。

しかし、しばらくすると話も弾んだ。ちょうどその頃届いた『佐久考古通信―由井茂也追悼号―』では、「いい追悼文が載ったね」といってくださった。先生も由井さんのいる川上村に親戚があるとのこと、「先生にもお書きいただければよかったですね」というと、「いや、永峯さんの編集でアウトだったよ」と笑っておられた。

「しかしあの件は残念だったな。相手が相手だったしな。次もあるから」先生は電話でこうもいわれ、私を励ましてくれたのだった。「あの件」……、先生は昨年秋、私をある賞に推薦してくださったのだった。受賞者は私が足元にもおよばない旧石器研究者だった。同じ年、國學院の谷口康浩さんを尖石縄文文化賞に推薦されたのも先生だった。谷口さんはその学識の高さから見事その賞を受賞された。先生のご配慮は、このように多くの研究者に行き渡ったものだった。

そういえば昨年は「堤君どうだ、御代田の宮平遺跡はいい遺跡じゃないか。県史跡にしたいもんだな」と声をかけてくださった。先生は県の文化財保護審議委員だった。川原田遺跡の土器を国重要文化財に申請するときも、強力に後押ししてくれたのも先生だった。

※

その谷口さんのお祝いの会が、11月東京で開かれた。樋口先生としばらく隣でお話をする時間がもてた。「こんどぜひ焼町土器の写真を貸してくれよ。長野県内のいい縄文土器を集めた図説を作りたいから」そうおっしゃっていた。

盟友の桐原先生が多作であったのに対し、先生は「書かずの樋口」などといわれていた。しかしそれには理由があった。先生は自ら「考古学のメッセンジャー・ボーイ」名乗っていたが、多くの考古学徒の世話に徹したり、調整役にまわることで、「書く」という自分のことは後回しだったのだ。それだけにその「縄文土器図録」の出版は楽しみだった。信州の縄文文化を語るのに欠かせない優品が並んだにちがいない。

※

先生はもともと江戸っ子で、國學院大學の学生として昭和25年平出遺跡の発掘に参加したことが信州に来るきっかけとなったのだという。

昭和29年から３年間は信濃史料の編纂調査にたずさわられ、昭和31年に木曽東高校に、昭和36年には松本県ヶ丘高校に勤務された。県ヶ丘高校では風土研究部を指導され、現長野県考古学会会長の会田進氏や宮下健司氏など多くの学徒が薫陶を受けられた。また、昭和37年の長野県考古学会の設立にも尽力された。その後は、中央道遺跡調査団長や長野県埋蔵文化財センター部長などを歴任された。

私が先生と初めてお話をしたのは、どこの大学だったか日本考古学協会の図書交換会に、先生ができたばかりの『阿久遺跡』の報告書を持参されていたときだった。たしか１万円という『阿久遺跡』は学生では手が出なかったが、誰かが紹介してくれて私が長野県出身の考古学専攻生だとわかると、「これは背表紙がやや痛んでいるから半額でいいよ」と譲ってくださったのだった。その阿久は、今でも私の本棚にある。

今年の正月、やや遅れて先生の年賀状が届いたが、よもやその数日後に訃報を聞くとは思ってもみなかった。通夜の帰り、家までお送りした桐原先生も言葉少なだった。先生のご葬儀の日、数百名もの人がお別れに訪れた。改めて先生の人徳が偲ばれた。合掌。

熊久保遺跡の調査団会議（左から２番目）
（写真提供：朝日村教育委員会）

# 故、樋口昇一氏を偲んで

藤澤　平治

東京でお会いしてから十日もたたない内の訃報は信じがたい思いでいっぱいでした。告別式でご遺影を拝した時、中学１年の遠足で平出遺跡の発掘を見学させて頂き、明日が特別な日であると言われるのに、１つの土器を手にして説明して下さった笑顔、井刈遺跡の発掘を始め多くの調査でご指導を戴いたその時々の面影が走馬灯のように浮かんできました。

佐久との関わりでは、県ヶ丘高校、野沢南高校郷土クラブが参加しての芦内遺跡の調査で樋口さんにご指導を戴いたのが、「信濃史料」編纂の調査を含め佐久に入られた最初であったのではと思います。芦内の整理を野沢南高校で行っている時、与良清先生など４人の方々が見えられ、後にそこに何人かが加わって、佐久の会が発足したように思います。地域、学校などの枠を越え、考古学を語り学ぼうと熱意を持った方々が樋口さんを中心に県考古学会を立ち上げられ、佐久考古学会もその下で組織されました。自らが会員となり地域にこだわらない広い視野でリードして下さった。

最後になりましたが、安らかにお休み下さい。お祈り申し上げます。

樋口・芦沢両先生のご冥福をお祈り申し上げます。

（事務局）

## 訃　報
## 芦沢長介先生御逝去

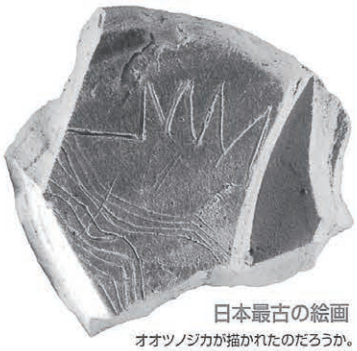
去る３月16日、東北福祉大学名誉教授の芦沢長介氏が御逝去されました。享年86歳。

岩宿遺跡で日本の旧石器時代研究の扉を開いたのはもちろんのこと、矢出川遺跡においては自らの手で日本の細石刃文化を世に知らしめるなど、佐久地域にも縁の深いことは私たちの良く知るところです。

ご冥福をお祈り申し上げます。

## お知らせ
## 企画展「日本人の起源を探る」御代田町浅間縄文ミュージアム

2006年４月22日～９月10日まで、浅間縄文ミュージアムで上記の企画展が開催されます。日本列島に住む人々の起源とは？旧石器・縄文・弥生と、考古学や人類学的見地から、この謎に迫ります。神子柴石器や火炎土器など見所多し、必見！




約２万年前の絵画（千葉県上引切遺跡）

### ♪　編集後記　♪

「佐久が一番がんばっている」と言って下さった先生。「いっしょに佐久の洞窟を掘ろう」と「佐久の縄文土器をまとめてくれ」と言っていた先生。学生時代からお世話になっていた樋口先生の突然の訃報は、本当に悲しい出来事だった。先生はある席上で「諏訪考古学研究所は、最高の考古学サロンだった」とおっしゃったが、今私たちはそんな場を持つだろうか？佐久考古学会をそんな雰囲気の場に出来ればと思う。新参者が生意気を言ってすみませんが、みんなでわいわいやれるような情報や論考を、どうぞお寄せ下さい。

（藤森）

佐久考古通信　№96

発行所　佐久考古学会
〒384-0091 小諸市御影新田1945-6
桜井秀雄方
郵便振替　00570-9-2842
0267（22）8536

発行者　藤沢平治
編集者　藤森英二
印刷所　ほおずき書籍㈱

佐久考古学会シンボルマーク

SAKU 佐久考古通信
佐久考古学会
ARCHAEOLOGICAL JOURNAL
2006.11.15. No.97

★ 目　次 ★

シリーズ　世界の遺跡・日本の遺跡20　天明の浅間焼け遺跡 ―群馬県― …… 1
考古逸品　人面香炉型土器……滋 澤 雅 人…… 2
金色の黒雲母を追って～河内晋平先生を偲ぶ～……水 沢 教 子…… 4
縄文時代遺跡出土炭化球根類に関する覚書(1)……中 沢 道 彦…… 9
新刊紹介『平林山津金寺千手院の歴史と文化財』島田恵子著……16

## 世界の遺跡・日本の遺跡20

# 天明の浅間焼け遺跡

―群馬県―

「天明の浅間焼け」といわれる噴火は、天明３年(1783)５月９日（旧暦では４月９日）より始まった。噴火のクライマックスは、新暦の８月３日・４日・５日であった。

天明の噴火パターンは、爆発的な「プリニー式噴火」により軽石が火口から噴出し、「吾妻火砕流」とよばれる高温の火砕流が北麓を流れ下り、「鬼押出し溶岩流」が流れ出すというものであった。また、噴出物の一部は「鎌原土石なだれ」となって鎌原村を襲い、さらには吾妻川から利根川になだれ込んで「天明泥流」として大災害をもたらした。

天明の噴火では、とくに浅間山北麓の群馬県側の被害がいちじるしかった。浅間山北麓、現在の吾妻郡嬬恋村鎌原にあたる鎌原村では、天明３年には100戸前後の戸数があったものとみられる。土石なだれによって、477人が死亡（466人とする記載もある）、生存者は93名のみであった。両者の合計では570名の人口があったことになる。馬は200頭のうち170頭が流死した。耕地もその９割以上を失った。

生存者は「天明の生死を分けた15段」などと言伝えられているように、石段を登りきり高台にある観音堂などに逃げ込んだり、他へ出ているものであった。「ひっしほ、わちわち」と恐ろしい音をたてて土石なだれが家屋をなぎ払ったと記されている。

昭和54年の発掘調査では、現在の石段の下が掘り進められ、150段とも伝えられていた石段が50段である事が確認された。そしてその下段から、石段を登りきれずあえなく土石なだれにのみ込まれ、息絶えた女性二体が生々しく発掘されたのを御存じの方も多いだろう。両名は親子とも姉妹ともみられている。

佐久地方での人的被害は、死者１名のみにとどまった。

天明噴火の被災者（鎌原観音堂）

天明の浅間焼け遺跡（鎌原観音堂）

考古逸品

# 人面香炉型土

―――「大深山　縄文の顔　中世鬼面へ流れ」―――

川上村　大深山遺跡出土の　この人面香炉型土器は極めて怪異な表情をしており、信濃縄文土器の傑作中の傑作のひとつである。

―――

「根（ネ）の國　底の國に　イブキ放ちてむ…。」
何やら　地底の黄泉の世界から響いて来る様な　この「謡ヒ」（ウタイ）のヒビキは、この怪異な香炉型土器を表現する言葉として　不思議とピッタリである。
中世の「呪師申楽」（シュシサルガク）に現われるこの「謡ヒ」は、平安時代の祝言を元としており、しばしば仮面を着用し、節分・冬至・夏至などの大祭で謡われたと云う。

―――

能楽・狂言は　村々で元々　行われて居た神楽に、寺社・宮中などで開催されて居た上記の「呪師申楽」が融合した芸能である。
節分の「追儺会」（ツイナエ）では　四つの目の在る鬼面が着用され、悪鬼を調伏した。造形が怪異で在れば在るほど　邪気悪鬼の類いの調伏に役立つと考えられた。密教美術の明王像等と　造形理念は同じである。
中世には　幾多の種類の鬼面が制作され　舞台にて着用された。信州の寺社でも　鬼面の演能は盛んで在った。
（「紅葉狩」「山姥」（ヤマンバ）など）
遥か4500年前、信州・甲斐の奥深い山奥では　かくの如き造形理念は　より甚深強大で在ったと考えておりますが　如何であろうか。

―――

「顔」と云う言葉は　歴史的カナ使いでは「カホ」と書く。
江戸時代の国文学者　山口志道は、「カ」とはカタチ（形）を表し、「ホ」とは　ホッとすると云った感嘆語にも分かる如く、相対するモノが和合融合したる姿を表す也と記して居る。
つまり　我々人間の顔（カホ）と云うのは、内面で相対する様々なモノが　和合融合して表に表情と成って現われて居ると云う事である。
神々しい八ヶ岳は　その麓に住む人々にとっては、天上の世界への上り道で在ると同時に、黄泉の世界「根の國への入口」とも考えられて居たのかも知れない。
また、長い千曲川源流付近の遺跡ですから、あの雄大な河川の巨大な「龍神さま」のカシラ（頭部）が伏蔵するエリアとも考えられたのかも知れない。越後の下流域から　参詣に来る人達も居たのかも知れない。
信州・甲斐在住の諸氏方々は　朝な夕なに　美しい八ヶ岳を仰ぎ見られて　如何　お考えに成られますか？

## Data

### 人面香炉型土器

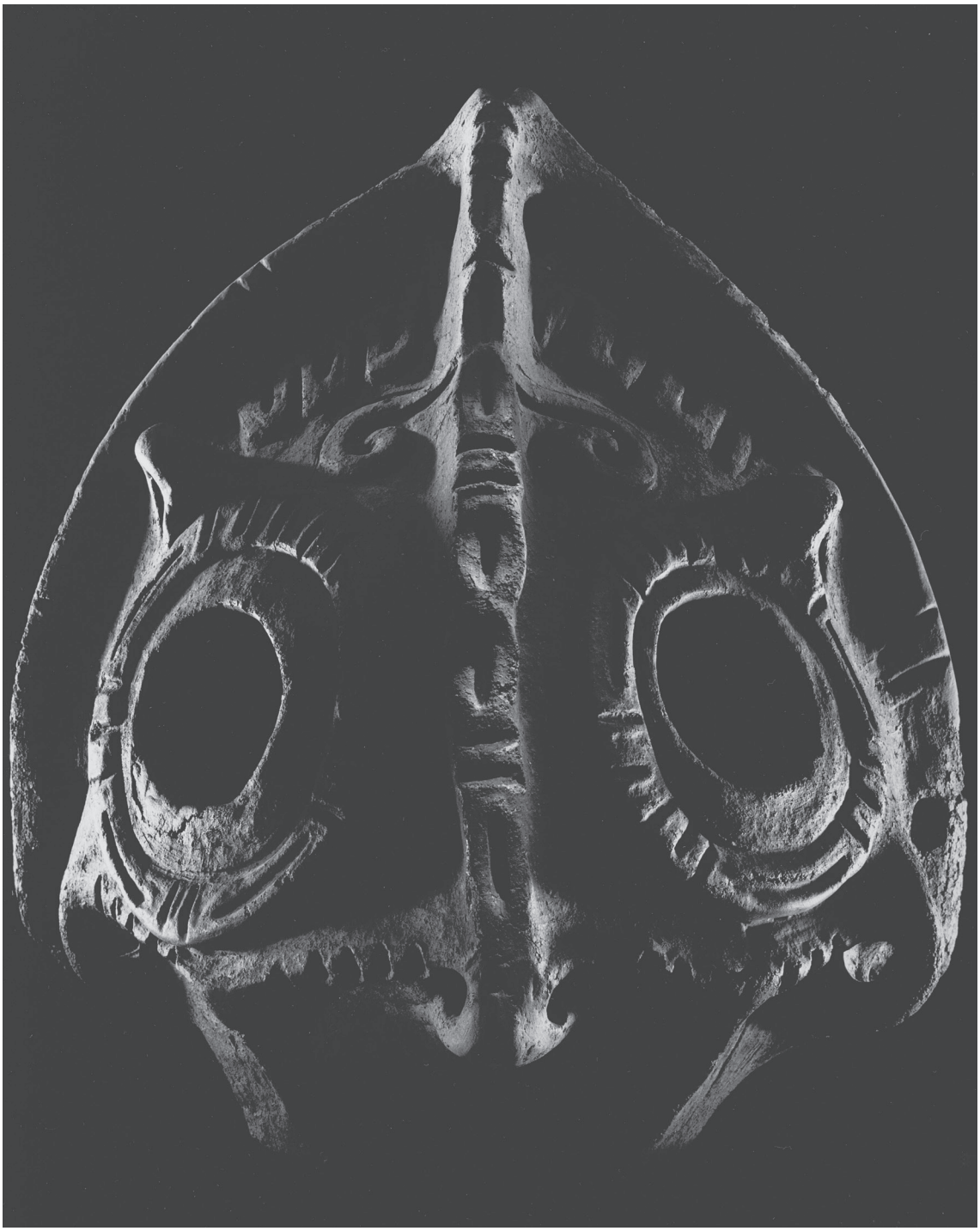
●時　代：縄文時代中期

●出土地：南佐久郡川上村
大深山遺跡

●展　示：川上村文化センター

# 器 Part Ⅱ

滋澤雅人（フォトグラファー）



（写真撮影：滋澤雅人）

# 金色の黒雲母を追って

## ～河内晋平先生を偲ぶ～

水沢　教子

### はじめに

Ｋ「この黒雲母はどうしたのだろう？。こんなにたくさん、しかも大きい！」

Ｍ「そうなんです。私も驚きました。それと大きな石英も入っているし。この土器の素地土はどこで採られたのでしょうね？」

Ｋ「石英は浅間には無いはずですよ。それに浅間周辺で黒雲母が入っているとすれば軽井沢の雲場火砕流があるけれど、こんなに多く入っていることはないはずだし……。」

Ｍ「焼町土器の中には他にも黒雲母が多い土器があって、一つのグループになるようです。」

Ｋ「そういえば佐久市の洞原湖の裏山を登っていくと黒雲母の層があったけれど……。」

Ｍ「そうですか。プレパラートだけではなんともいえないのでいつか黒雲母を含む層を探してその土と比べたいですね。」

御代田町川原田遺跡から出土した焼町土器の薄片を見ながら河内晋平先生とこんなやりとりがあったのは1998の早春だったろうか。

### １、黒雲母の発見

当時私は国立歴史民俗博物館の共同研究の中で焼町土器の光学顕微鏡による胎土分析を担当していた。全部で43点の資料のなかの岩石や鉱物を順に観察していくと、焼町土器の胎土は大きく２種類に分かれ、その一方に金色に光る黒雲母が大量に入っていることが見えてきた頃だった。

浅間山麓の御代田町から出土した在地製作の可能性が高いといわれている焼町土器。普通浅間山麓の粘土でつくられたと考えがちである。ところがその浅間山には石英も黒雲母も殆ど産しないのだ。そのため顕微鏡の中に光る大量の黒雲母の存在は河内先生にとってかなりの驚きだったようだ。ただ、顕微鏡を覗きながら私たちは以前にも似た胎土を見ていたことを思い出した。それは御代田町塚田遺跡の縄文早期の土器の胎土であった。この報告のおり（水沢 1994）は、多量に入っていた黒雲母を木曽の御嶽火山から飛来した御岳第１テフラ On−Pm1の可能性があると考えた。しかし実際には降下した少量のテフラの組成に比べて、土器に入っている黒雲母の量が多すぎる。御代田町出土の土器と黒雲母。この謎は長いこと私の頭からも離れなかった。

写真１　黒雲母を含む焼町土器
（浅間縄文ミュージアム蔵／写真提供）

※

その後３年間のブランクを経て10年越しの仕事を終えた2001年。年頭、私はこの年を顕微鏡観察と黒雲母探しの年と決めた。そして先の土器の胎土分析を報告にまとめるための自分なりの分類を行った後、いつものように分析結果を先生にチェックしていただく計画を立てた。まず先生のご予定を伺う手紙を出したところ、すぐにお返事が届いた。いつもと同じように葉書は几帳面な文字で埋まっていた。そこには７月～９月の日程が細かく書き込まれ、「例のもの、もう一度見てみたいですね。」で結ばれていた。それは紛れもなくあの黒雲母の土器のことだった。ところがその葉書をいただいて１ヶ月もたたないうちに私の時間は凍り付くように止まってしまった。河内先生が八ヶ岳山麓のお宅で、ひっそりと亡くなられたのだという……。

### ２、河内先生と胎土分析

信州へ戻った1991年以来、私は善光寺の近くにある信州大学教育学部の先生の研究室を何度訪ねたのだろう。最初は、学生時代に採取した土器から作成したプレパラートを持って、次は御代田町塚田遺跡、さらには宮城県中沢目貝塚、やがてこの焼町土器。冬季は仕事の後６時ごろから伺い、土曜・日曜は朝から１日中顕微鏡をお借りしたことも多かった。土器の中に入っている岩石や鉱物は小さく、二次的に変質しているものも多い。しかしながら河内先生はどんな小さなものもあらゆる方法でその種類を特定しようとされた。また、長年のフィールド調査を背景にした佐久地方の地質に関しての幅広い知識が産地の解釈を補強した。どうしても特定できない鉱物があったとしても、ただ「解

らない」と言われるのではなく、なぜ特定できないのかもつきつめて、時間をかけて説明して下さった。私の分析のスピードはかなり上がった。やがて先生の研究室に伺うことだけを楽しみに、一週間を送るといった生活になっていった。

1994年になって頸や腰を痛め、顕微鏡を覗く前屈みの姿勢はおろか立ち歩くこともできなくなって一度はあきらめた胎土分析。それでも先生のノートを見ながら病床で再起を誓い、断続的ではあるが、ようやく研究を再開したのに……。その先生がもうおられないという現実。今後どのように研究を進めたらいいのか。

## 3、千曲川左岸へ

先生の亡くなられた2001年の秋風が冷たくなる頃、私は先生にご教示いただいたノートを形見に携え、かつて探そうと決意した黒雲母を求めてさまようように踏査に出かけた。

立科町土合、望月町（現佐久市）観音寺、小諸市松井、糠塚山、佐久市和田周辺の田切の底、猿久保の農業大学校、御代田町塩野周辺から湯川に至る畑地、豊昇、軽井沢町追分、茂沢。あるときは周辺の地形に詳しい家族や親戚の助けを借り、またあるときは一人地図だけをたよりに、犬に吠えられ、細い道ではバックできずに川に落ちそうになりながらも、雪に覆われるまでに遂に４カ所で粘土を採集した。特に当時屋代高校におられた宮坂晃氏のご指導をいただいて望月町（現佐久市）観音寺の「クリスタルアッシュ」の可能性のある火山灰を含む露頭で採集した粘土には、黒雲母が豊富に入っていて、何も混ぜものをせずに良好な土器が仕上がった（写真２）。たしかに浅科から望月、ことに北御牧方面では良好な粘土が知られている。しかしながら、一つ疑問があった。御代田町塩野の川原田遺跡に住む縄文人は、果たして粘土採取のために千曲川を渡ったのだろうか。小諸市の蛇掘川以東、湯川以北は小諸第１・第２軽石流に覆われて粘土どころか浅間以前の古い火山灰層もみつからないとされていた。浅間縄文ミュージアムの堤さんに紹介していただいて訪ねた小諸第２軽石流の露頭は、たしかに首が痛くなるほど高くそびえていた。遺跡から一番近い小諸市松井や糠塚山の粘土には黒雲母は入っていない。だとすれば黒雲母を手に入れるために縄文人は千曲川を渡らなければならない。本当にそうなのか。先生が亡くなった2001年は比類なき悲しみに加え、この疑問とともに終わった。

写真２　軽井沢町の実家の畑で土器を焼いてみる

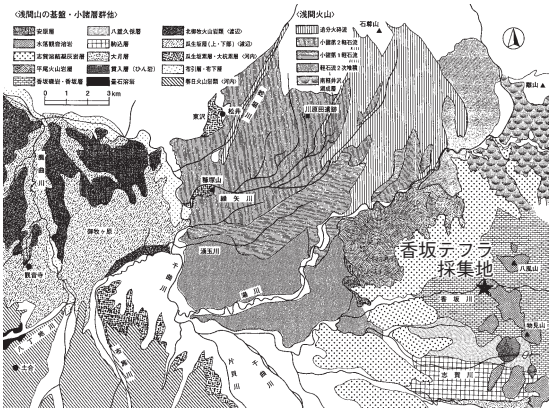



図１　佐久地方の地質（水沢2004より）

## 4、千曲川右岸の黒雲母層の発見

悶々としていた2003年、かつて一緒に仕事をしていた米沢須美子さんから突然電話がきた。「佐久地方では苗間に用いる粘土を「香坂」地区で採集していた。」というのだ。いても立ってもいられない私は早速、佐久市香坂と呼ばれる地へ赴いた。道すがら何人かにその旨を聞くと、驚くべきことにほぼ全員がその粘土採取地を知っている。その案内の言葉をたよりに行った先に、大きな露頭が見えた。そこにはなんと千曲川左岸で見たものとほぼ同じ黒雲母が多量に含まれる粘土層があったのだ（写真３）。

写真３　佐久市香坂の露頭

その後この地へ古環境研究所の早田勉さんをご案内した。早田さんは慣れた手つきで、その雲母層の上か

らOn−Pm1（約10万年前）さらにその上から阿蘇４（約8.5万～９万）、さらに黒斑期の浅間山の堆積物を発見された。そして黒雲母層中に目立つ角閃石の分析が進めばもっとはっきりしたことがいえるものの、問題の黒雲母層は、Apmテフラ群（クリスタルアッシュ）の可能性が高いとの指摘をされた。香坂は川原田遺跡のある塩野から直線距離で11.3kmである。4500年前の縄文人が発見していたとしてもけっして不思議はないだろう。

あの黒雲母はApmテフラ群に由来するのか?!。

## ５、黒雲母の観察とその由来

極少量採取した香坂のテフラを固めて厚さ0.02㎜程度の薄片を作り、自宅のオリンパス偏光顕微鏡ＢＸ51で観察した。さらに薄片をＸ軸方向に0.7㎜、Ｙ軸方向に0.5㎜ずつ動かして、十字線の下にきた岩石や鉱物を250ポイント同定した。こうすると、見た目で「多い」、「少ない」と記載するよりも定量的である（表１）。香坂のテフラは黒雲母（写真４）が最も多く、斜長石、角閃石、石英が続く。その角閃石は緑色を呈する。これを焼町土器の黒雲母が多量に入っているタイプ２の№5（写真１）と比べる（表１・図２）。石英、斜長石といった無色鉱物がやや多いが、黒雲母（写真５）や角閃石が多い点で両者は似通っているといえる。因みに焼町土器のうち、黒雲母をあまり含まないタイプの№3（表１・図２）とは明かに異なる組成である。

表１　胎土分析集計表

| 試料番号 | №3 | №5 | 香坂テフラ |
|---|---|---|---|
| 石英 | 2 | 26 | 7 |
| 斜長石 | 51 | 66 | 40 |
| アルカリ長石 | 0 | 1 | 7 |
| 黒雲母 | 7 | 47 | 51 |
| 白雲母 | 0 | 2 | 0 |
| 角閃石 | 3 | 7 | 13 |
| 酸化角閃石 | 0 | 3 | 0 |
| 単斜輝石 | 8 | 3 | 0 |
| 斜方輝石 | 4 | 1 | 1 |
| 緑廉石 | 0 | 1 | 0 |
| ジルコン | 1 | 0 | 0 |
| 黒色不透明鉱物 | 10 | 2 | 5 |
| 火山岩類　安山岩 | 10 | 0 | 0 |
| 火山ガラス類 | 3 | 0 | 1 |
| 酸化火山岩 | 5 | 0 | 0 |
| 流紋岩 | 0 | 0 | 1 |
| その他 | 7 | 0 | 0 |
| 深成岩 | 0 | 0 | 0 |
| 堆積岩類 | 0 | 1 | 1 |
| チャート・石英多結晶 | 0 | 0 | 1 |
| 粘土鉱物・変質鉱物 | 13 | 2 | 3 |
| 赤色鉱物 | 15 | 11 | 5 |
| その他 | 0 | 0 | 0 |
| 不明 | 18 | 18 | 2 |
| マトリクス | 93 | 59 | 112 |
| 合　　計 | 250 | 250 | 250 |

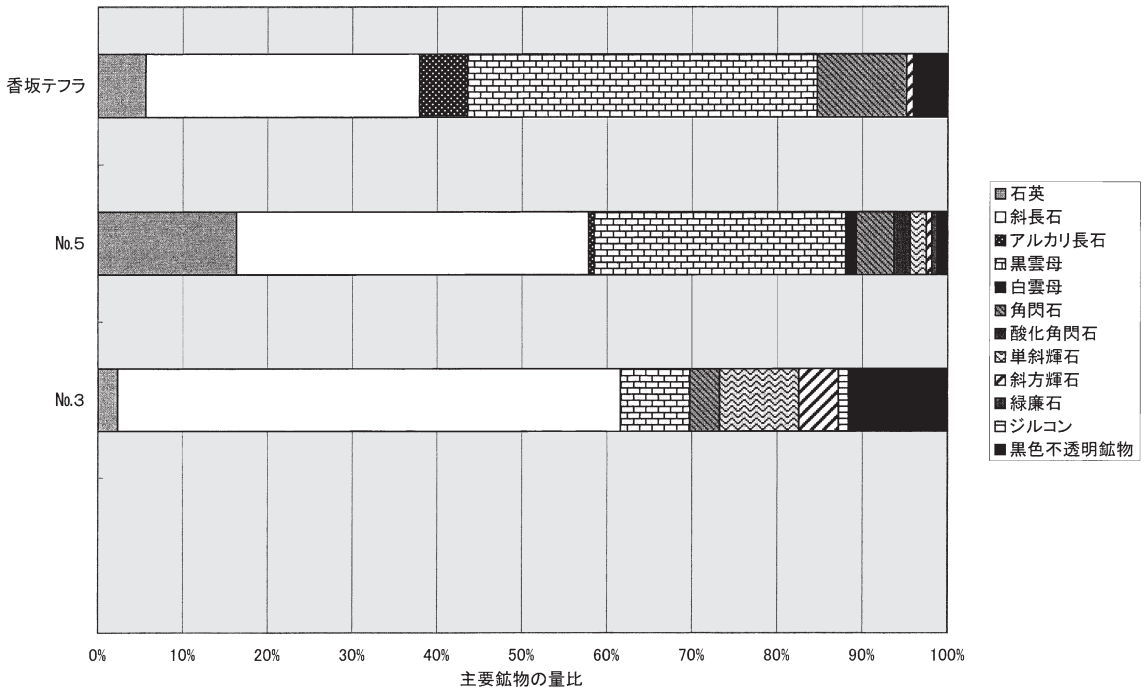



図２　焼町土器と香坂テフラの組成比較

写真４　香坂テフラ中の黒雲母　×23平行ニコル

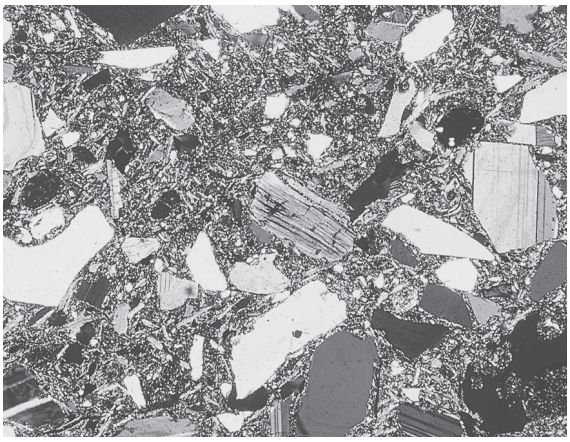


写真５　焼町土器の黒雲母　×23平行ニコル
（水沢2004より）

表２　川原田遺跡出土焼町土器の胎土（水沢2004より）

| 群 | 類 | 細別 | 特　　徴 | 該当資料 | 産地の可能性／起源 |
|---|---|---|---|---|---|
| 1群 | | | 斜長石・輝石主体で、火山岩を含む | | |
| | 1類 | | 斜長石・輝石の鉱物結晶を主体とし、それらは少数含まれる火山岩の斑晶より大きい | | |
| | | 1 | 斜長石が小～大を含んで特に多い | 3.8.13.25.31.36.47/7.10.15.20.44.27 | 千曲川右岸か／結晶質火山灰か軽石流 |
| | | 2 | 斜長石がより小さくて少なく、輝石の比率が高い | 1.22.39.50 | 千曲川右岸か／結晶質火山灰か軽石流 |
| | 2類 | | 大形の斜長石の鉱物結晶が少なく、大形の斑晶と石基の明確な火山岩の割合が高い | | |
| | | 1 | 特に両輝石安山岩を多く含む。鉱物結晶の大きさは岩石の斑晶鉱物と同じもしくはやや小さい | 11.30.32.42 | 千曲川右岸か／軽石流・溶岩片の二次堆積 |
| | | 2 | 輝石安山岩・玄武岩質安山岩・酸化火山岩が多く、岩石数が鉱物数を上回る。鉱物結晶の大きさは岩石斑晶の大きさとほぼ同じ | 9 | 東信以外か／火山岩 |
| | | 3 | 玄武角閃石を含み、安山岩が多く含まれるもの | 40 | 東信以外か／火山岩 |
| | 3類 | | 斜長石が多く、その一部が曹長石化しているものが目立つ | 49.51 | 不明 |
| 2群 | | | 黒雲母が特に多いもの | | |
| | 1類 | | 黒雲母と石英が多いもの | 5.12.23.26.29.41.43.45.46. | 千曲川左岸中心／結晶質火山灰か軽石流 |
| | 2類 | | 黒雲母がやや少ないが、大形の石英を多く含むもの | 4.6.24 | 千曲川左岸中心／結晶質火山灰か軽石流 |
| | 3類 | | 黒雲母と石英が多く、さらに大形の花崗岩を含むもの | 34.35 | 東信以外か／深成岩 |
| 3群 | | | 1・2類に含まれないものを便宜的にまとめた | | |
| | 1類 | | 珪化岩を多量に含むもの | 38 | 不明 |
| | 2類 | | ガラス質の岩石を多数含むもの | 33.48 | 不明 |
| | 3類 | | 深成岩・変成岩を含むもの | 2 | 東信以外か |

※アンダーラインが焼町土器

Apm テフラ群（クリスタルアッシュ）は、『火山灰アトラス』によると、黒雲母を多く含む結晶質の数層のテフラで、「黒雲母浮石 B1、B2、B3あるいはクリスタルアッシュ C1、C2、C3、または大町 A1pm、A2pm、A3pm などど記載された。その後これらはより上位にある数層のテフラを含めて大町 Apm テフラ群」とよばれたとされるものである。その供給源は槍ヶ岳北西４㎞にある水鉛谷の花崗岩に貫入した岩頸があげられている。噴出の時期は諸説があるが、35万年前前後という数値が出されている。主な鉱物は黒雲母、角閃石、斜方輝石、石英である（町田・新井 2003）。山辺邦彦氏は、これを層厚1.3mの千曲市の曙峠にちなんで名付けられた曙ローム層と同一のものとし、東御市の八重原グラウンド、御牧原の中平、布下、立科町の外倉、望月町（現佐久市）観音寺、小諸市氷などでも観察されるとした（山辺 1999）。この黒雲母を多量に含むテフラが北アルプス方面から飛来したとすれば（図３）、佐久市香坂や望月町（現佐久市）観音寺と同様に御代田町域にもその堆積物があるのかもしれない。後世になって浅間の軽石流がこれを覆ったとしても、それが及んでいない御代田町豊昇などにはまだ探索の余地はあるだろう。

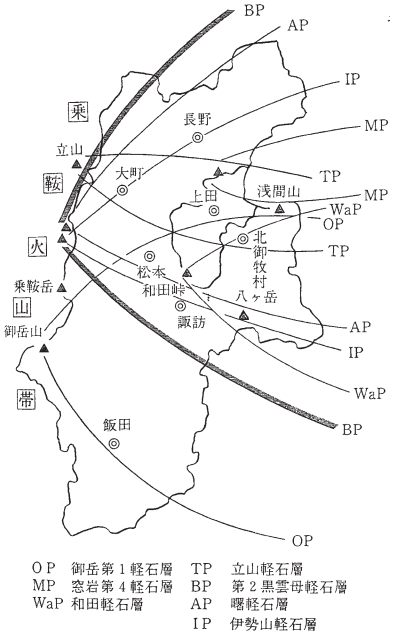



**図３　東信地方に分布する主な軽石層**
（山辺1999を引用）

※

川原田遺跡のある塩野により近い黒雲母層の探索は今後の課題として、ここでは仮に粘土採取地が香坂であった場合を想像してみよう。粘土採取地から山頂までが４㎞の八風山、500ｍの距離にある香坂川は黒色ガラス質安山岩の産地として知られている。川原田遺跡では縄文中期の石器全2699点のうち7.5％が黒色ガラス質安山岩で作られている（堤 1997）。つまり川原田遺跡から見ると石器素材の産地も粘土の産地も森泉山の裏側の同一方向にあたる。石器素材の直接採集が行われていたとしたら、縄文人の活動領域の中に香坂地区が含まれており、粘土採取も行われていたとしても不思議はないであろう。

## おわりに

かつてある遺跡に住んだ人々は日常的な焼き物をつくるための素材をどのように調達したのだろうか。その遺跡が時間幅をもって使い続けられた場合、もし同じ様な場所に粘土を採りに行っていたとしたら、一見無関係に見える違う時代に生きた人々の、時代を越えた関係を類推できるのではないか。また、胎土分析研究の目的が、土器の搬入・搬出を推定することにあるとすれば、搬入土器を括り出すためには、まず在地土器がどのような胎土なのかを定量的に表示しておく必要がある。つまり一つの遺跡での通時的な粘土採取領域の把握は欠かすことのできない基礎研究なのである。時代を越えて御代田町の在地製作のメルクマールとなり得るかもしれない黒雲母を含む胎土は、見た目にも

**佐久市（旧臼田町）稲荷山からみた八ヶ岳**

かなり特徴的である。そのため私はこのような胎土が縄文時代の各時期を通じて、またそれ以降の時代の煮沸具の中にどのように出現するか、今後継続的に調査していきたいと考える。

※

週末、私は佐久市臼田の家に帰省する。小諸、佐久と車を走らせるにつれて霊峰八ヶ岳はその輝きを増していく。それは河内先生が生涯を賭けて研究されてきた山だ。

「僕は八ヶ岳のたくさんの石を顕微鏡で見てきました。消光角や多色性、へき開だけじゃない。形・干渉色、屈折率、複屈折、伸長の正負。いろいろな要素を組み合わせて鉱物名を決めるんです。でも顕微鏡だけじゃなく、フィールドを歩くことも肝心ですよ。」

理系の学生でも科学分析に頼るあまり、顕微鏡での鑑定力が衰えていると懸念された河内先生。ふるさとの山を愛された先生の、低いそして懐かしいお声が木霊となって今も聞こえるような気がする。

本研究と粘土産地の踏査を進めるにあたり早田勉、宮坂晃、堤隆、大竹憲昭、川崎保、米沢須美子、水沢一夫、田中正治郎の各氏および長野県立歴史館にお世話になった。記して謝意を表する。

### 引用・参考文献

川崎　保　1998「東部町祢津真行寺遺跡群出土の石器石材」『佐久考古通信』№72
堤　　隆　1997「川原田遺跡縄文前・中期の石器について」『川原田遺跡縄文編』御代田町教育委員会
町田洋・新井房夫　2003『新編火山灰アトラス』東京大学出版会
水沢教子　1994「塚田遺跡出土土器の胎土について」『塚田遺跡』御代田町教育委員会
水沢教子　2004「岩石・鉱物からみた素地土採集領域―長野県川原田遺跡出土土器の偏光顕微鏡観察から―」『国立歴史民俗博物館研究報告』第120集
山辺邦彦　1999「２章第５節ローム層」『北御牧村誌』北御牧村誌編纂委員会

# 縄文時代遺跡出土炭化球根類に関する覚書(1)

中沢　道彦

## はじめに

本稿では縄文時代遺跡出土の炭化球根類について、そのデータを集成し、若干の問題整理と検討を行う。縄文時代遺跡から出土する炭化球根類とは、ノビル、アサツキ、ギョウジャニンニク、ヤマラッキョウなどのユリ科ネギ属、もしくはヒガンバナ、キツネノカミソリなどのヒガンバナ科と推定されるものである。これらは同心円状組織が観察され特徴的である。後述するが、筆者はこれらの大半を考古学や民俗学の研究成果を基にノビルなどのユリ科ネギ属の可能性が高いと推定しているが、いずれにせよ、縄文時代植物質食料利用の一端を示す資料であることに間違いはない。

筆者は、縄文時代の植物質食料の利用について、堅果類を中心として多種多様な食糧資源を利用するものと理解しているが、例えば東日本の縄文時代後晩期のトチの実加工処理遺構や所謂トチ塚などトチの実利用に特化する遺跡がある点も見逃せない。縄文時代では堅果類利用に大いに比重があったと考えられる。しかし、一方、野山、里山で採集できる食用植物の利用はそれなりにあった理解すべきである。

例えば辻秀子による十勝川流域でアイヌの食用植物の利用に関する調査では、利用植物100余種、実際に常用されるものが数10種とされている（辻 1982）。北海道の地域性、また民族データを無批判に適用することはできないが、一つの目安にはならないか。

現状で国内一例ながら、富山県桜町遺跡でのコゴミの出土例はその一端を示すものであるし、ユリ科ネギ属などの炭化球根類が単体、塊状または土器付着の状態で縄文時代遺跡から出土する例は少なからずある。かつ、これらはその出土状態から利用方法を推定させる手がかりをもつといえる。

本稿では日本列島の縄文時代遺跡から出土した炭化球根類データを集成してそれを概観し、その利用について検討を加えるのだが、列島規模でのその出現時期や消長を最近の資料も踏まえた上でその問題整理と課題解決の見通しを述べる。

## 研究動向

研究史的には、1970年代までの段階で東京都新井小学校遺跡（直良 1965）や東京都宮下遺跡出土の「ノビル」（塩野 1970）、神奈川県上ノ入遺跡出土の「キツネノカミソリ」（小島・浜口 1978）、福井県鳥浜貝塚出土例（森川・西田他 1979）などと縄文時代遺跡出土の炭化球根類は知られ、1975年時点で渡辺誠による縄文時代遺跡出土の食用植物遺存体34種の１つに含められている（渡辺 1975）。また、後に長沢、松谷、高橋、大江上らにより塊状の炭化球根類と指摘される岐阜県峰一合遺跡出土の当初「縄文クッキー」とされた資料も蓄積されている。

1980年代、1990年代以降、山梨県花鳥山遺跡、水呑場北遺跡（長沢・松谷・渡辺他 1989）、釈迦堂遺跡群、上北田遺跡（武藤･杉本 1993）、獅子之前遺跡（米田･松谷他 1991）、中谷遺跡（長沢・松谷他 1996）など、山梨県を中心に資料蓄積がなされる。これには、これら遺跡の多くの調査に関わった長沢宏昌らの植物遺存体への意識の高さに負う部分が大きい結果であったろうし、また、既出資料から長沢が検出したものも少なくない。この長沢の縄文時代遺跡出土の炭化球根類に関する問題意識の一つの到達点が前述の長沢論文となる。

長沢は縄文時代遺跡出土の炭化球根類を単体の「炭化球根類」、「オコゲ」、「塊状」と出土状態により分類した上で列島内の資料集成を行い、検討を加えた。また、「オコゲ」、つまり土器に密集して付着する炭化球根類については、復元した縄文土器を用いてノビルと水を①そのまま、②澱粉（片栗粉）を加えて、③油を混ぜて、と３つの条件で煮沸実験を行い、土器に密集して付着した炭化球根類である「オコゲ」や「塊状」のものが何らかの澱粉質が混ぜ込まれて煮沸された可能性を論じた（長沢 1998）。

松谷暁子は列島規模で一連の炭化球根類の同定において走査型電子顕微鏡を用いた表皮細胞レベルの精度の高い観察を行った他、利用目的について食用の他に炭化による薬としての利用の可能性にも触れている（松谷 1989、1991、1992、1994他）。ただし、精緻な観察を行っても、炭化球根類についてはユリ科ネギ属などと属レベルまでは絞り込めても、種の同定までは難しいのが現状のようだ。

また、高橋龍三郎は四国四万十川流域のヒガンバナ食の民俗調査を行った。高橋によると、有毒のアルカノイドを含むヒガンバナ科のヒガンバナやキツネノカミソリを食用化にするには、その組織を叩き潰してアク抜きを行う必要があり、アク抜きが終了した段階では植物繊維の原形を留めない。よって、土器付着や塊状の炭化球根類で、食べられる直前の形状として、同

心円状組織が観察できる事例は有毒のヒガンバナ科である可能性が低いとした（高橋 1992）。

高橋の指摘は炭化球根類の研究に一つの視点を与えた。前述の長沢論文では、高橋の指摘を踏まえることで、土器に付着した「オコゲ」や「塊状」の炭化球根類についてヒガンバナ科の選択肢を消去でき、ユリ科ネギ属の可能性が高い点を指摘している。

また、山本直人も「野生根茎類」食料化について民俗学や考古学調査成果を基に多角的な視点でその採集活動を論じている（山本 2002）。山本はこれまでノビルと同定された新井小学校遺跡、宮下遺跡例などをユリ科ネギ属と扱う妥当性、キツネノカミソリと同定された上ノ入遺跡例に慎重な態度をとる方向性を指摘するなど学ぶ点が多い。

さてこれまで述べたとおり、炭化球根類の問題について長沢昌宏の総括的な研究や、松谷暁子や高橋龍三郎らにより研究が深化したとみてよい。

ただ、例えば土器に付着した炭化球根類にしても、その利用目的については食用の他、黒く焦がして薬用などの考え方が選択肢の一つとして松谷や長沢から提示され、検討課題は残されているし、列島規模でのその出現時期や消長は最近の資料も踏まえて現状確認をする必要があるといえる。

さて東日本では山梨県中溝遺跡（長沢・松谷 1996 a）で縄文時代早期末～前期初頭下吉井式の遺構から出土した炭化球根類が現状で最古の例とされるが、九州では長崎県鷹野遺跡（副島・伴・粉川 1986）、熊本県扇田遺跡（林田他 2004）、宮崎県別府原遺跡（日髙他 2002）、鹿児島県横堀遺跡（中水他 2005）など、九州では縄文時代早期でも押型文土器より古いか、押型文土器諸型式でも前半に併行するとされる円筒形貝殻条痕文土器諸型式、もしくはその併行期の炉穴からの炭化球根類の出土例が蓄積されつつある。

これについては、これまで1980年代に調査された鷹野遺跡の事例とその古さが十分に評価されていなかった面も否定できないのだが、扇田遺跡、別府原遺跡、横堀遺跡の資料蓄積で該期の炉穴に関わる利用が明確になってきた。これらは炭化球根類が土器に密集して付着する縄文時代前期後半以降の利用法、つまり土器を用いて、何らかの澱粉質を混ぜ、ユリ科ネギ属の球根類などを加熱する処理と異なる。この実態の解明は縄文時代の炭化球根類に関わる研究の新たな課題が生じてきている。

なお、宮本一夫は縄文時代の栽培植物として炭化球根類をリストアップしているが（宮本 2000）、若干課題がある。おそらく、照葉樹林文化論とヒガンバナ利用を想定するのか、根茎類などの半栽培論を絡めるつもりなのであろうが、前述のとおり土器に付着する炭化球根類はヒガンバナ科とは想定できないし、現段階で筆者の知る限り縄文時代遺跡でヒガンバナの出土例はない。また、縄文人が採集したノビル、アサツキ、ギョウジャニンニクなどのユリ科ネギ属の球根類が偶然、土に埋まれば葉茎が生えてくる現象を知っていた。また掘り出した小さな球根を埋め戻した可能性は否定しないが、それを積極的に栽培していたという証拠はないだろうし、特にそれを証明する見通しが特に述べられていない。よって、宮本のように縄文時代遺跡出土のユリ科ネギ属などの炭化球根類を「栽培植物リスト」に加えることには賛同できない。林謙作も新潟県大沢遺跡での花粉分析でヤマノイモ科やユリ科・ヒガンバナ科の数値の高さからこれらを人為的に植えた行為を推定するが、花粉分析での数値の高さ以外にこれを積極的に肯定する根拠はなさそうだ（林 2004）。少なくとも筆者は、縄文時代遺跡出土の炭化球根類を、あくまでノビル、アサツキ、ギョウジャニンニクなどのユリ科ネギ属の生息箇所を熟知して植物採集活動を行い、それを何らかの形で利用、廃棄等した行為の結果と理解すべきと考えている。

ここ２年の研究で注目されるのは２点。

１点目は韓国の国立金海博物館による韓国慶南昌寧郡釜谷面飛鳳里遺跡の調査で韓国新石器時代早期隆起文土器期の第２貝層から出土したとされる土器付着炭化物である（任鶴鐘 2005、国立金海博物館編 2005）。遺跡の本報告や植物学側からの正式な同定はこれからだろうが、概報の「写真46」下段で示された写真で判断する限り、素人目に同心円組織が確認できる。土器に付着したユリ科ネギ属の炭化球根類の可能性が高い。

まずはこれがユリ科ネギ属の炭化球根類と仮定しよう。飛鳳里遺跡第２貝層の韓国新石器時代早期隆起文土器は宮本一夫によれば九州の縄文時代前期初頭轟Ｂ式に併行する（宮本 1990他）。土器付着の炭化球根類の出現が縄文時代前期後半である点を踏まえると、土器による球根類の加熱処理が東アジアを含めた動向である点が見えてくる。

２点目は西田泰民ら新潟県立歴史博物館と国立民族学博物館との共同による土器付着物をはじめとする残存澱粉の分析及び炭化物の生成実験などの基礎研究である（新潟県立歴史博物館編 2006）。炭化球根類に関する実験については「ノビルは土器器面にタール状の付着物を生じそこに球根が焦げ付く状態になった」「この種の球根を炭化物が生じるほど長時間煮詰めることに目的があったと考えるべきであろう」とする興味深い所見を示されている。

また、長沢による実験により土器に密集して付着する炭化球根類などの生成には何らかの澱粉質を混ぜた可能性の高さが指摘されている点を踏まえると、西田

らによる残存澱粉の分析作業が、混ぜられたと推定される残存澱粉の正体の究明に役立つのではないかと期待できるといえる。

これまでの縄文時代遺跡出土の炭化球根類に関わる研究の軌跡を辿ってきた。そこからはその同定に関する問題、地域と時期による出土状況の問題、出土状況から推定するその利用の問題と幾つかの課題が見えてくる。以下に炭化球根類データを集成、列島規模で各地におけるその出現と消長を確認し、その出土状況や遺物そのものの分析、また実験の成果や民俗学の成果からその利用の問題を考察する。

## 縄文時代遺跡における炭化球根類の出土状況

現時点で筆者と日髙広人が集成した縄文時代遺跡出土の炭化球根類データを第１表にまとめた。出土状況については、長沢の視点を参考としながら、「土器付着」「塊状」、個体である「炭化球根」と分類した。「塊状」「炭化球根」でも土器を用いて加熱され、付着したものが剥がれたと推定されるものも多い。ただ後述するが、九州の縄文時代早期前半の炉穴から出土した例などは土器ではなく、煙道で燻すなど加熱した処理を想定できるため、多量の「炭化球根」が出土する状況の意味するところが異なってくる。

また、報告で「ユリ科ネギ属もしくはヒガンバナ科」と同定された資料でも、土器付着の事例は民俗学調査の事例を踏まえた長沢や高橋の指摘によりユリ科ネギ属と扱っている。後述するが、九州の炉穴出土の事例も、ヒガンバナ科のアク抜き行為で「燻す」など加熱の過程の必然性が確認できないことから、消去法でユリ科ネギ属と扱っている（註１）。

では以下に各地域の状況を概観する。

### 関　東

関東では埼玉県荒川川底第１地点遺跡で縄文時代前期後半諸磯ｂ式土器底部（渡辺 1989）、群馬県下田遺跡で中期末土器片（小宮 1994）、東京都新井小学校裏遺跡で後期土器底部に炭化球根類が付着した事例がある。また、正式報告はこれからとなるが、埼玉県石神遺跡（西田泰 2006）で後期土器、東京都下宅部遺跡で晩期土器（佐々木 2006）、千葉県道免き谷津遺跡（文化庁編 2006）で晩期土器にも炭化球根類が付着する事例がある。また、中期前半勝坂式土器の中から球根状炭化物が出土したとされる東京都宮下遺跡の例も土器付着か、それが剥がれた可能性が高い。いずれもユリ科ネギ属である。

この他、神奈川県上ノ入遺跡で中期後半曽利Ⅲ式期のＦ号住居覆土からヒガンバナ科キツネノカミソリと同定された炭化球根類が30点出土している。上ノ入遺跡例は長さが２㎝程度と大きめで、かつ整った球形とは異なる形状とされるが、山本の指摘のとおり今日では絞り込んだ同定は難しいだろうし、類例の増加を待ちたい。

なお、群馬県北町遺跡では古墳時代前期のH-12号住居からユリ科ネギ属の炭化球根類が出土しているが（長谷川他 1996）、同遺跡では縄文時代前期末から後期土器も出土しており、厳密な時期決定の必要がある資料といえる。

### 北　陸

北陸では福井県鳥浜貝塚で縄文時代前期後半北白川下層Ⅱａ式土器片内面、石川県米泉遺跡（松谷 1992）で晩期とされる土器片内面にユリ科ネギ属の炭化球根類が付着している。また、鳥浜貝塚では前期の包含層からユリ科の球根類が２点出土している。その時期は櫛部正典と小島秀彰の教示による。

### 中部高地

各土器型式の共通性を考え、山梨県域を長野県域とともに中部高地の区分で括る。

中部高地の土器に付着する炭化球根類の事例は、山梨県花鳥山で縄文時代前期後半諸磯ｂ式土器片内面、山梨県釈迦堂遺跡群三口神平地区73号住居出土の中期前半狢沢式土器底部立ち上がりから胴部内面にかけて、長野県判ノ木山西遺跡７号住居出土の藤内式土器内面胴部下半部（小林・百瀬他 1981）、山梨県水呑場北遺跡３号土坑出土の中期前半井戸尻式土器内面胴下半部でユリ科ネギ属の炭化球根類が付着する事例がある。

個体としての出土例としては、縄文時代前期後半から中期の資料として、花鳥山遺跡で諸磯ｂ式・ｃ式の包含層、獅子之前遺跡の諸磯ａ式期の８号・14号住居、諸磯ｂ式期の４号住居、釈迦堂遺跡群三口神平地区で曽利Ⅰ式の128号土坑、中谷遺跡の中期末の第７遺物集中区などで出土する。これらの幾つかは土器で加熱されたものが剥がれた可能性が高い。

中部・関東で土器に付着する炭化球根類の最古の事例は荒川川床第１地点遺跡例や花鳥山遺跡例の諸磯ｂ式となるが、それを遡る諸磯ａ式でも球根類が土器により加熱処理された可能性は高い。獅子之前遺跡14号住居から炭化球根類が塊となって出土したとされる状況はこれを示唆するものといえる。

留意すべきは山梨県中溝遺跡で早期末～前期初頭下吉井式期の４号住居からユリ科ネギ属の炭化球根類が２点出土する例だ。これらは東日本で最も古い事例とされるが、同遺跡では奈良・平安時代の土坑から同様の炭化球根類が40点以上出土している点は気にかかる。時期決定には課題が残るといえる。ただ、同県上北田遺跡で縄文時代前期初頭中越式～前半神ノ木式の18号住居覆土から炭化球根類が出土する例もあり、年代測定などの検証は必要だろうが、東日本では縄文時代前

期初頭が炭化球根類利用の上限ということができる。

**東　海**

東海については、岐阜県峰一合遺跡の縄文時代前期後半の３号住居から出土し、これまで「パン状炭化物」「縄文クッキー」とされた資料は、松谷暁子、高橋龍三郎、長沢宏昌、大江上により塊状の炭化球根類と指摘されている（高橋 1992、松谷 1994、長沢 1998、大江 2000abc）。

**近　畿**

近畿では滋賀県入江内湖遺跡（滋賀県埋蔵文化財センター 2005）では縄文時代前期後半北白川下層Ⅱｂ式の土器片内面にユリ科ネギ属の炭化球根類が付着している。同県竜ヶ崎Ａ遺跡（小島他 2006）でも縄文時代中期末土器片内面に炭化球根類の可能性があるものが付着している。これらの事例は瀬口真司、小島孝修から御教示いただいた。

**中　国**

瀬戸内では岡山県津島岡大遺跡第５次調査で縄文時代後期中葉彦崎ＫⅡ式直前段階の資料がまとまる27ｂ層上部出土の土器片内面にユリ科ネギ属の炭化球根類が付着する（阿部・松谷・山本 1994）。

山陰では鳥取県桂見遺跡で縄文時代後期と推定される土器底部内面にユリ科ネギ属の炭化球根類が付着する（牧本他 1996）。

なお、山口県宮原遺跡で弥生時代前期末の４号、５号、９号土坑から炭化球根類が出土している（柿本・池永 1973）。

**九　州**

九州では、熊本県扇田遺跡で縄文時代早期前半円筒形貝殻条痕文土器併行期の中原Ⅱ式の炉穴 SO4305から240点のユリ科ネギ属の炭化球根類（註２）、宮崎県別府原遺跡でも円筒形貝殻条痕文土器併行期の別府原式の炉穴 SP48-5下部から多量なユリ科ネギ属の炭化球根類、鹿児島県横堀遺跡で早期の23－炉穴からユリ科ネギ属の炭化球根類が出土している。また、長崎県鷹野遺跡でも26号炉穴で多量にユリ科の炭化球根類が、６号炉穴、10号炉穴、20号炉穴、23号炉穴などでユリ科と推定される炭化球根類が、また３号集石でユリ科球根類が１点出土する。

別府原遺跡や横堀遺跡では炭化球根類そのものに対して AMS 年代測定がなされ、別府原遺跡例が補正14Ｃ年代で8930±50BP、横堀遺跡例で8470±70BP と年代の古さが保証されている。なお、遠部慎の御教示によると、九州では早期円筒形貝殻文土器期では炉穴、押型文土器期では集石が盛行するという。

九州で早期前半の炉穴から出土する炭化球根類は「ユリ科ネギ属もしくはヒガンバナ科」と同定されているのだが、前述のとおり有毒のアルカノイドを含むキツネノカミソリやヒガンバナなどヒガンバナ科の球根類を食用化するにあたってはその食用化には組織を叩き潰してアク抜きを行う必要があり、アク抜きが終了した段階には植物繊維の原形を留めないとする民俗調査事例に従えば、仮に炉穴出土の炭化球根類がヒガンバナ科とした場合、食用化するならば、アク抜きで球根組織を潰す、水さらしをする前に球根を炉穴で直接加熱する行為は想定しにくい。逆に毒を求めるならば、加熱の必要がない。土器付着の炭化球根類を民俗事例の応用でユリ科ネギ属まで絞り込んだ論理と同様に九州で早期円筒形貝殻条痕文土器併行期の炉穴出土の炭化球根類はユリ科ネギ属まで絞り込める。

そして炉穴から出土するノビルなどのユリ科ネギ属の炭化球根類を食用とするならば、思いつきではあるが、１案としてそれらを葉茎から束にして煙道に垂らし、球根部を煙で加熱し、「エグミ」を除去して食すとする調理法を仮説として呈示できそうだ。ただし、扇田遺跡炉穴 SO4305、別府原遺跡炉穴 SP48-5下部とも焚き出し口側と推定される焼土側から炭化球根類が出土している点との整合性は課題となる。

土器付着の炭化球根類では本報告はいずれもこれからだが、大分県三和教田遺跡Ｃ地点で後期後半三万田式土器片内面（吉田他 1997）、熊本県上小田宮ノ前遺跡で後期後半天城式の土器片内面（西田 2006）、鹿児島県芝原遺跡で後期土器片内面（九州縄文研究会編 2006）に炭化球根類が付着している。

以上、各地域の縄文時代遺跡出土、ユリ科ネギ属などの炭化球根類の出土例を概観した。列島規模では何といっても九州で早期前半円筒形貝殻条痕文土器併行期の炉穴から出土する長崎県熊本県扇田遺跡例、別府原遺跡例、鹿児島県横堀遺跡例と資料が蓄積された。炉穴や集石での球根類の出土状況の分析を進め、その利用法の推定を行なう必要がある。

山梨県中溝遺跡で早期末～前期初頭下吉井式期の住居、上北田遺跡で前期初頭～前期前半の住居から炭化球根類が出土した事例は時期の検証も含めて、その利用法を検討する必要もあり、扱いは微妙である。

土器に球根類が密着する事例の出現は関東では埼玉県荒川床第１地点遺跡で縄文時代前期前半諸磯ｂ式、中部高地では同じく山梨県花鳥山遺跡で諸磯ｂ式、北陸では福井県鳥浜貝塚で前期羽島下層Ⅱａ式土器、近畿では滋賀県入江内湖遺跡で北白川下層Ⅱｂ式となる。また、山梨県獅子之前遺跡で諸磯ａ式期の住居から塊で出土した事例、岐阜県峰一合遺跡で前期前半の住居から「塊状」で出土した事例も土器付着のものが剥がれた可能性は高い。

現状で土器付着の最古例が鳥浜貝塚の北白川下層Ⅱ

## 第１表　縄文時代遺跡出土球根類一覧表

2006年11月４日現在

| 遺跡名 | 所　　在 | 出土位置 | 土器型式・時期 | 種　類 | 状　態 | C14 | 文　献 | 備　　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 下田遺跡 | 群馬県太田市<br>(旧新田町) | ２号河道出土 | 中期末 | | 土器付着 | | 小宮1994 | |
| 荒川川床第Ｉ地点遺跡 | 埼玉県川越市 | | 前期後半諸磯ｂ式 | | 土器付着 | | 梅沢・谷井他<br>1967、渡辺1989 | |
| 石神遺跡 | 埼玉県川口市 | | | | 土器付着 | | 西田2006 | 第14次調査 |
| 道免き谷津遺跡 | 千葉県市川市 | | 晩期安行３ｃ～３ｄ式 | | 土器付着 | | 文化庁編<br>2006 | |
| 新井小学校浦遺跡 | 東京都中野区 | 泥炭層 | 後期 | ノビル？ | 土器付着 | | 直良1965 | ノビル以外の可能性あり<br>(長沢1998) |
| 宮下遺跡 | 東京都八王子市 | 土器の中<br>(土器付着？) | 中期前半勝坂式 | ノビル？ | 炭化球根 | | 塩野1970 | |
| 下宅部遺跡 | 東京都東村山市 | | 後期称名寺式<br>後期・晩期 | | 土器付着 | | 佐々木2006 | ウバユリ種子も出土 |
| 上ノ入遺跡 | 神奈川県平塚市 | Ｆ号住居跡覆土 | 中期後半曽利Ⅲ式 | 球根類30点<br>キツネノカミソリ？ | 炭化球根 | | 小島・浜口1977 | |
| 米泉遺跡 | 石川県金沢市 | | 晩期 | ユリ科ネギ属 | 土器付着 | | 松谷1992 | |
| 鳥浜貝塚 | 福井県若狭町<br>(旧三方町) | | 前期後半<br>北白川下層Ⅱａ式 | ユリ科 | 土器付着 | | 森川・西田1979 | |
| 鳥浜貝塚 | 福井県若狭町<br>(旧三方町) | ＩＥ | 前期羽島下層Ⅱ式～<br>北白川下層Ⅱ式 | ユリ科２点 | 炭化球根 | | 森川・西田1979 | |
| 花鳥山遺跡 | 山梨県笛吹市<br>(旧御坂町・八代町) | 20号住居 | 前期後半諸磯ｂ式 | ユリ科ネギ属 | 土器付着 | | 長沢・松谷・渡辺<br>他1989 | |
| 花鳥山遺跡 | 山梨県笛吹市<br>(旧御坂町・八代町) | 95グリッド | 前期後半諸磯ｂ式 | ユリ科ネギ属 | 土器付着 | | 長沢・松谷・渡辺<br>他1989 | 土器は20号住居出土例と同一個体か |
| 花鳥山遺跡 | 山梨県笛吹市<br>(旧御坂町・八代町) | 89グリッド | 前期後半諸磯ｂ式 | ユリ科ネギ属 | 土器付着 | | 長沢・松谷・渡辺<br>他1989 | |
| 花鳥山遺跡 | 山梨県笛吹市<br>(旧御坂町・八代町) | 包含層 | 前期後半諸磯ｂ式～<br>ｃ式 | 球根類２４点 | 炭化球根 | | 長沢・松谷・渡辺<br>他1989 | 23号土坑から２点出土 |
| 釈迦堂遺跡群 | 山梨県笛吹市・甲州市<br>(旧一宮町・勝沼町) | 三口神平地区<br>128号土坑 | 中期後半曽利Ｉ式 | ユリ科ネギ属 | 炭化球根 | | 長沢・松谷・渡辺<br>他1989 | |
| 釈迦堂遺跡群 | 山梨県笛吹市・甲州市<br>(旧一宮町・勝沼町) | 三口神平地区<br>73号住居出土 | 中期前半狢沢式 | ユリ科ネギ属 | 土器底部内面付着 | | 長沢1989 | |
| 上北田遺跡 | 山梨県北杜市<br>(旧白州町) | 18号住居 | 前期初頭～前半 | 球根類８点 | 炭化球根 | | 武藤・杉本1993 | |
| 獅子之前遺跡 | 山梨県甲州市<br>(旧塩山市) | ４号住居 | 前期後半諸磯ｂ式 | ユリ科ネギ属２点 | 炭化球根 | | 米田・松谷1991 | |
| 獅子之前遺跡 | 山梨県甲州市<br>(旧塩山市) | ８号住居 | 前期後半諸磯ａ式 | ユリ科ネギ属 | 炭化球根 | | 米田・松谷1991 | |
| 獅子之前遺跡 | 山梨県甲州市<br>(旧塩山市) | 14号住居 | 前期後半諸磯ａ式 | ユリ科ネギ属 | 炭化球根が塊となって出土 | | 米田・松谷1991 | |
| 中谷遺跡 | 山梨県都留市 | 第７遺物集中区 | 中期末 | ユリ科ネギ属 | 炭化球根 | | 長沢・松谷1996ｂ | |
| 中溝遺跡 | 山梨県都留市 | ４号住居 | 早期末～前期初頭<br>下吉井式 | ユリ科ネギ属２点 | 炭化球根 | | 長沢・松谷1996ａ | |
| 水呑場北遺跡 | 山梨県市川三郷町<br>(旧三珠町) | 土坑出土土器付着 | 中期井戸尻式 | ユリ科 | 土器付着 | | 長沢・松谷・渡辺<br>他1989 | 厚さ１cm |
| 上の平遺跡 | 山梨県甲府市<br>(旧中道町) | | 中期初頭 | 不明球根類 | | | 渡辺1987 | |
| 判ノ木山西遺跡 | 長野県茅野市 | ７号住居出土土器付着 | 中期藤内式 | ユリ科ネギ属 | 土器付着 | | 小林・百瀬1981 | 厚さ１cm |
| 峰一合遺跡 | 岐阜県下呂市<br>(旧下呂町) | ３号住居 | 前期後半 | 球根類 | 炭化物塊 | | | |
| 入江内湖遺跡 | 滋賀県米原市 | 第Ⅶ層 | 前期後半<br>北白川下層Ⅱｂ式 | ユリ科ネギ属 | 土器付着 | | 滋賀県埋文<br>センター2005 | |
| 竜ヶ崎Ａ遺跡 | 滋賀県安土町 | 1-4区<br>褐色スクモ層 | 後期前葉 | 球根類 | 土器付着 | 3615±25 | 小島他2005 | |
| 津島岡大遺跡 | 岡山県岡山市 | 土器付着 | 後期彦崎Ｋ２式直前段階 | ユリ科ネギ属 | 土器付着 | | 阿部・松谷・山本<br>他1994 | |
| 桂見遺跡 | 鳥取県鳥取市 | 土器底部付着 | 後期 | ユリ科ネギ属 | 土器付着 | | 牧本・小谷1996 | |
| 鷹野遺跡 | 長崎県諫早市 | ３号集石 | 早期 | ユリ科の球根１点 | 炭化球根 | | 副島・伴・粉川他<br>1986 | |
| 鷹野遺跡 | 長崎県諫早市 | 20号炉穴 | 早期 | ユリ科の球根２点 | 炭化球根 | | 副島・伴・粉川他<br>1986 | |
| 鷹野遺跡 | 長崎県諫早市 | 26号炉穴 | 早期 | 多量のユリ科の球根 | 炭化球根 | | 副島・伴・粉川他<br>1986 | ６・10・23号炉穴出土炭化物も球根の可能性高い |
| 三和教田遺跡Ｃ地点 | 大分県日田市 | | 後期後半三万田式 | ユリ科ネギ属 | 土器付着 | | 吉田1997 | |
| 扇田遺跡 | 熊本県熊本市 | 炉穴 SO4305 | 早期（円筒形貝殻文土器） | ユリ科ネギ属の可能性　径1.5cm | 炭化球根 | | 林田2004 | 同定ではヒガンバナ科ーユリ科鱗茎（240個体） |
| 上小田宮の前 | 熊本県玉名市 | | 後期後半天城式 | ユリ科 | 土器付着 | 3160±40<br>3030±40 | 西田2006 | 年代測定値は（国立歴民博編2005ａ） |
| 別府原遺跡 | 宮崎県西都市・宮崎市<br>(旧佐土原町) | 炉穴 SP48-5<br>(炉穴下部) | 早期（円筒形貝殻文土器・別府原式） | 多量のネギ科ユリ属の球根（鱗茎） | 炭化球根 | 補正年代<br>8930±50 | 日高他2002 | |
| 芝原遺跡 | 鹿児島県南さつま市<br>(旧金峰町) | | 後期 | 鱗茎 | 土器付着 | | 九州縄文研究会編<br>2006 | |
| 横掘遺跡 | 鹿児島県志布志市<br>(旧有明町) | 23-炉穴 | 早期（円筒形貝殻文土器～押型文土器） | ユリ科球根 | 炭化球根 | 補正年代<br>8470±70 | 中水他2005 | |

中沢道彦・日高広人作成

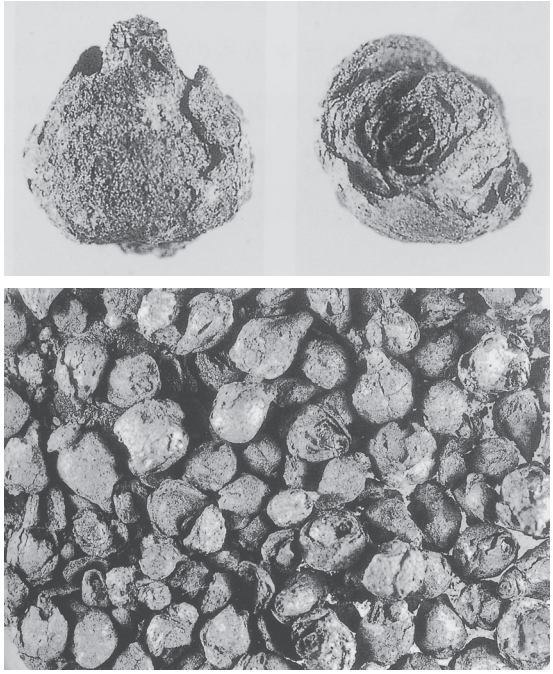


写真１　宮崎県別府原遺跡炉穴出土炭化球根類

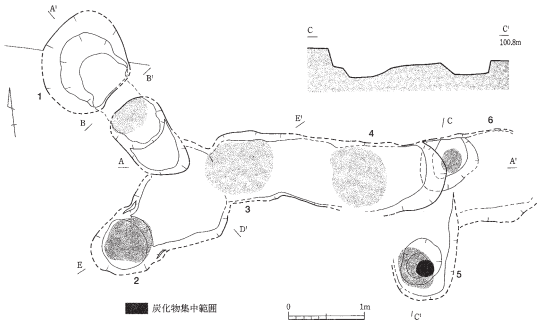



図１　宮崎県別府原遺跡炉穴　SP48-5

写真２　韓国飛鳳里遺跡土器付着物

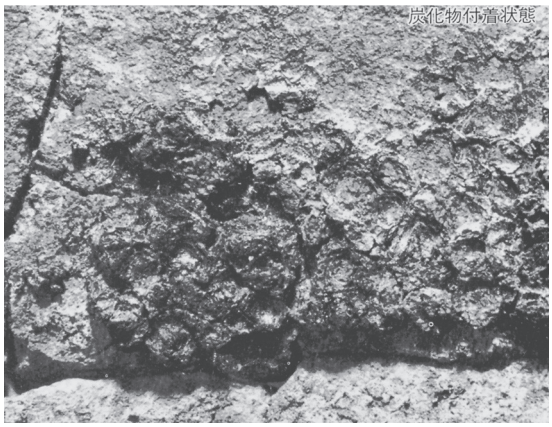



写真３　長野県判ノ木山西遺跡　７号住居出土土器付着炭化球根類

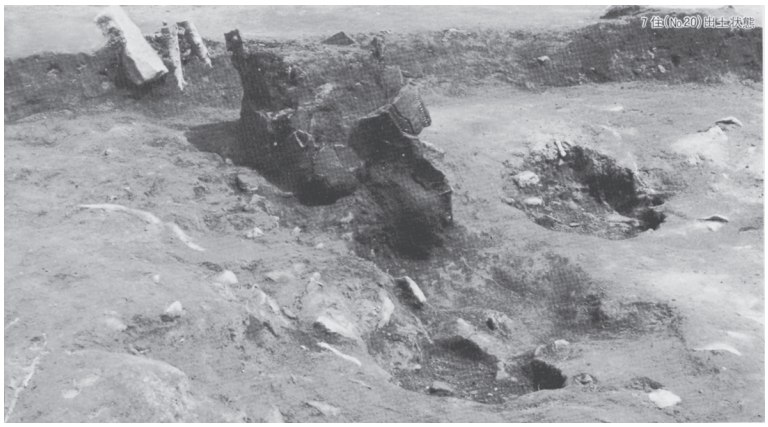



写真３　炭化球根類付着土器の発見された長野県判ノ木山西遺跡７号住居

ａ式、それに次ぐ北白川下層Ⅱｂ式が諸磯ａ式～ｂ式に併行するので、入江内湖遺跡、荒川川床第１地点、花鳥山遺跡例がほぼ同時期となる。まだ点と点を結ぶ段階だが、列島規模で縄文時代前期後半において、土器を用いて、ユリ科ネギ属の球根類を加熱する利用法が活発化したと評価できるのではないか。前述の長沢の実験からこれらには何らかの澱粉質が混ぜられた可能性が高い。これは前期後半におけて堅果類をはじめとする植物質食料を粉化する調理法が発達した結果とみることはできないか。縄文時代前期後半以降に食品加工炭化物、所謂「縄文クッキー」の出土例が増える現象もこれに無関係とは思えない。

なお、前述の韓国飛鳳里遺跡出土の資料が韓国新石器時代早期土器に付着したユリ科ネギ属の炭化球根類とすれば、韓国新石器時代早期が九州の縄文時代前期初頭轟Ｂ式に併行するという宮本一夫の研究を参考とすれば、国内の鳥浜貝塚の北白川下層Ⅱａ式より、朝鮮半島での出土例が古いことになる。勿論、韓国飛鳳里遺跡の正式報告はこれからだろうが、縄文時代でユリ科ネギ属の炭化球根類が土器に付着する出土事例は前期後半を遡る可能性をもつといえる。ただし、現状では列島規模で縄文時代前期後半において、土器を用いて、ユリ科ネギ属の球根類を加熱する利用法が活発化したと一つの画期を筆者は想定している。

土器に炭化球根類が付着する事例は前述のとおり列島規模で縄文時代中後期の時期のものも少なくはない。その下限のものは現状では縄文時代晩期中葉とされる道免き谷津遺跡例や晩期前半の米泉遺跡例、下宅部遺跡例となりそうだが、詳細は道免き谷津遺跡の報告に期待したい。土器に付着する炭化球根類の時期の下限の追究も課題ではある。（未完）

**【註】**

註１）有毒のヒガンバナ科の球根を薬として使用と仮定すると、加熱の必然性を説明できない。

註２）中沢と日髙広人による調査で炭化球根類が240個体確認できた。調査では林田和人の全面的な協力をいただいた。

**【謝辞】**

飛鳳里遺跡写真転載では国立金海博物館任鶴鐘先生のご快諾、李珪榮氏からご助力、水ノ江和同、宮地聡一郎、川添和暁氏からご助言をいただいた。厚く御礼申し上げたい。

**【参考引用文献】**

任鶴鐘　2005「昌寧飛鳳里遺蹟発掘調査概要」『韓・日新石器時代の農耕問題』（ハングル）

九州縄文研究会編　2006『九州縄文時代の低湿地遺跡と植物性自然遺物』九州縄文研究会

国立金海博物館編　2005『昌寧飛鳳里遺蹟』国立金海博物館（ハングル）

小林秀夫・百瀬長秀他　1981『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書―茅野市･原村その３―』長野県教育委員会

滋賀県埋蔵文化財センター　2005『滋賀埋文ニュース』第303号　滋賀県埋蔵文化財センター

高橋龍三郎　1992「四万十川流域におけるヒガンバナ・木の実の食習」『民俗文化』第４号　近畿大学民俗文化研究所

辻　秀子　1983「可食植物の概観」『縄文文化の研究 第２巻 生業』雄山閣

長沢宏昌・松谷暁子・渡辺誠他　1989『花鳥山遺跡・水呑場北遺跡』山梨県教育委員会

長沢宏昌・松谷暁子他　1996ａ『中溝遺跡・揚久保遺跡』山梨県教育委員会

長沢宏昌・松谷暁子他　1996ｂ『中谷遺跡』山梨県教育委員会

長沢宏昌　1998「縄文時代遺跡出土の球根類とそのオコゲ」『列島の考古学』渡辺誠先生還暦記念論文集刊行会

新潟県立歴史博物館編　2006『新潟県立歴史博物館研究紀要』第７号　新潟県立歴史博物館

西田泰民　2006「炭化物の生成実験」『新潟県立歴史博物館研究紀要』第７号

林　謙作　2004『縄紋時代史Ⅰ』雄山閣

林田和人他　2004『扇田遺跡』熊本市教育委員会

日髙広人他　2002『別府原遺跡　西ヶ迫遺跡　別府原第２遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター

文化庁編　2006『発掘された日本列島2006』

松谷暁子　1989「水呑場北遺跡出土土器付着球根状炭化物の識別について」『花鳥山遺跡・水呑場北遺跡』山梨県教育委員会

松谷暁子　1992「米泉遺跡出土土器付着物の走査型電子顕微鏡による観察」『年報』第12号　石川県立埋蔵文化財センター

松谷暁子　1994「津島岡大遺跡（第５次調査）出土土器内面付着物について」『津島岡大遺跡４』岡山大学埋蔵文化財調査センター

宮本一夫　1990「海峡を挟む二つの地域」『考古学研究』第37巻第２号

宮本一夫　2000「縄文農耕と縄文社会」『古代史の論点１環境と食糧生産』小学館

山本直人　2002『縄文時代の植物採集活動』

渡辺　誠　1975『縄文時代の植物食』雄山閣

渡辺　誠　1989「花鳥山遺跡出土の自然遺物」『花鳥山遺跡・水呑場北遺跡』山梨県教育委員会

＊誌面の都合で参考引用文献を一部省略した。次回で未掲載分も掲載する。

## 新◆刊◆紹◆介

# 『平林山津金寺千手院の歴史と文化財』

島田恵子 著

■A４版　上製本　カバー付　秩入り
165頁　頒価（2,500円送料込み）
希望者は、島田恵子さんまで
佐久穂町羽黒下110　☎ 0267-86-3143

島田恵子会員による大著『平林山津金寺千手院の歴史と文化財』が、この10月に刊行となった。

平林山津金寺千手院は、現在旧佐久町の羽黒下駅東にある古刹だが、これまで断片的な調査がなされたのみで、その歴史ははっきりとはしていなかった。

島田恵子氏は、自らが専門とする考古学による発掘調査と、縁起・古文書・すべての奉納額の解読・石造文化財、および歴代住職の墓石などの調査を通じ、その総合的な解明をなそうとした著である。

本書は、以下の章から構成される。

・平林山津金寺千手院の歴史
・奉納俳額・掲額
・石造文化財（図版）
・歴代住職無縫塔（図版）
・寺に関係する僧・尼および禅定門・禅定尼の墓石（図版）

本書においては、千手院の前身であったとされる津金寺跡と伝承のあった小山寺窪遺跡の発掘調査では、多数の五輪塔を検出、その伝承を考古学的に証明することとなった。五輪塔はその型式などから鎌倉時代後期の武士のものと位置付けられた。

また、千手院の観音堂に奉納されている俳額・掲額がひとつひとつ丁寧に解読され、写真と文字によって記録保存がなされている。

豊富な図版は、より後世までその歴史を伝える貴重な史料として生きてこよう。

考古学・文献史学・文化財学が融合したあたらしい地域研究の成果とよべるのが本書であろう。

写真１　『平林山津金寺千手院の歴史と文化財』

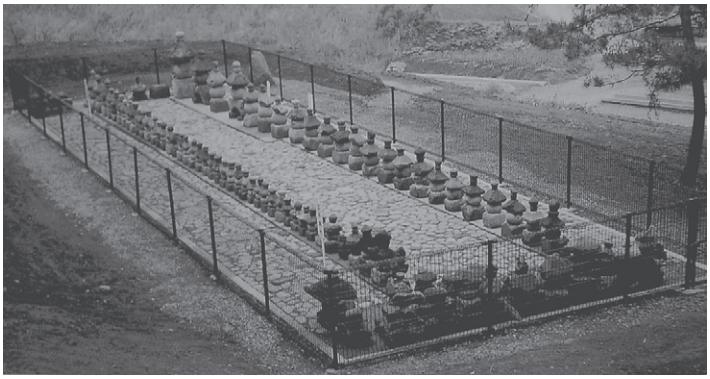


写真２　小山寺窪遺跡の五輪塔

### ♪　編集後記　♪

考古学徒の就職先がないという。一昔前は、なんとか地方の公共団体の文化財担当にもぐり込み考古学が出来た。バブルの頃は、就職先からの引き抜きまでおこなわれるという売り手市場だった。

知っている学生も、今は現場で保証のない調査員をやっているか、発掘会社に就職しているものもいる。大学教員として残れるものは、ほとんどいない。

就職して20年が過ぎた。無論考古学だけでなくいろいろな仕事もやらされたが、いちおう考古学でメシが食えただけ幸せな人生だったのだろうか。これからも今までどおり、あてもなく生きてゆくのだろう。（堤）

**佐久考古通信　No.97**

発行所　佐　久　考　古　学　会
〒384-0091 小諸市御影新田1945-6
桜井　秀雄　方
郵便振替　00570-9-2842
☎ 0267（22）8536

発行者　藤　沢　平　治
編集者　堤　　隆
印刷所　ほおずき書籍㈱

佐久考古学会
シンボルマーク

SAKU 佐久考古通信 佐久考古学会
ARCHAEOLOGICAL JOURNAL
2007.3.30. No.98

★ 目　次 ★

シリーズ　世界の遺跡・日本の遺跡21　恒川遺跡群 —長野県— …… 1
考古逸品　大型石槍原石…… 2
弥生時代における国内最大級の竪穴住居跡の発見……長野県埋蔵文化財センター…… 4
「佐久系土器」と呼ばれる土器　主にその呼称について ……藤 森 英 二…… 6
平成18年度　佐久地区埋蔵文化財パトロールについて……埋蔵文化財保護委員……10
フォーラム・コンサートの報告……12

## 世界の遺跡・日本の遺跡21

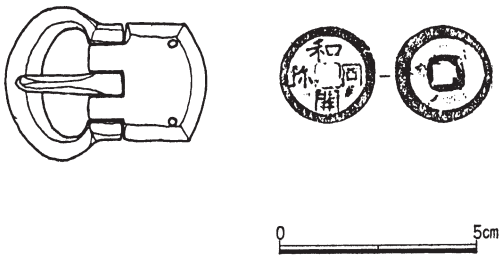
# 恒川遺跡群

—長野県—

飯田市座光寺の恒川遺跡群は、天竜川右岸の低位段丘に位置する。地籍内には「恒川清水」と呼ばれる湧水があり、小規模ながら湿地帯も含まれている。

弥生中期末の恒川式土器の標識遺跡としても知られるが、信濃国に10存在した郡のうち、現在のところ県内でも唯一と言える郡衙跡地として著名である（近年では岡谷市榎垣外遺跡なども候補地として有力視されている）。

古くから遺物の存在が知られ、昭和20年代後半以降、下伊那考古学研究室や下伊那考古学会などによる発掘調査が行われていた。その後、昭和50年代からは国道153号線座光寺バイパス工事に伴う調査が飯田市教育委員会により実施され、以後同教育委員会による範囲確認調査が継続的に行われている。




恒川遺跡群出土の県宝「和同開珎銀銭」と金銅製の銙帯（図は『長野県史』より）。

その結果、縄文時代から近世に及ぶ複合遺跡で、単なる規模の大きな集落跡としてでは捉えきれない、極めて重要な意味を持つ遺構や遺物が多数確認されるに至っている。

中でも奈良時代では、一般的な集落とは異なる遺構のあり方が認められ、遺物でも県宝「和同開珎銀銭」をはじめ、木簡や金銅製銙帯などの出土がある。さらにやや視野を広げると、わが国最古の貨幣とされる富本銭が、隣接する高森町武陵地一号墳出土のものを含めこの地域で２枚発見されており、当地の重要性が伺い知れる。

このように文献や地名の研究のみならず考古学的な成果からも、古代伊那郡衙跡地として認識されている。

尚、現在は多くが市街地であるが、背後には墳丘長72.3mを誇る前方後円墳、長野県史跡「高岡第１号古墳」をはじめとした高岡古墳群があり、遥か古代に思いを馳せることが出来る。この巨大な墳丘を含め、これらの背景には、五世紀以降の馬の生産が深く関わっていたとする見方がある。さらに東山道上のルートでは、東国への玄関口であった。古代信濃がよみがえってくる。　（協力：飯田市教育委員会）

恒川遺跡群の山手（西側）に位置する県史跡「高岡第１号古墳」。墳丘の形がよく残されている。

考古逸品

# 大型石槍原石

旧石器時代から縄文時代に移り変わろうとする時期、佐久市東部の八風山付近では、ここに産する黒色のガラス質安山岩を用いた大型の石槍の製作が行われていた。板状に分割出来、鋭く割れるこの石の性質は、後期旧石器時代はじめにも石刃の製作に用いられていたように、石器作りに向いていたようだ。

遺跡に残された大型石槍の多くは製作途中で折れたもの。おそらく完成品はどこかの地へ運ばれたのだろう。出土した大半は微細な石屑であったが、執念の接合作業の結果、その原石の復元に至っている。見事な石槍を生み出した草創期の人間と、それを究明した研究者の、正に逸品。

関東山地の西北部、標高1,000m付近に位置する八風山遺跡群は、佐久地域の旧石器時代から縄文時代初頭を語る上で欠くことが出来ない。付近に産する豊富なガラス質黒色安山岩は石器の材料として良質のものだった。八風山Ⅱ遺跡からはＡＴ層の下、おそらく32,000年前にさかのぼる目下列島でも最古級の石刃技法による石器群が検出され、さら八風山Ⅰ遺跡とⅥ遺跡では、両面調整技術を巧みに用いた縄文時代草創期の石槍の製作跡が確認された。両者ともに出土した膨大な数の資料について、須藤隆司会員による緻密な接合作業が繰り返され、その製作工程が明らかにされている。

ここではⅥ遺跡・Ｂ地点の石槍原石（母岩１）を取り上げた。この母岩資料は436点の出土資料を接合したもので、その中には製作途中で折れた石槍の未製品も含まれている。５つに大きく分割されてから石槍に加工されたようで、長さ十数cmの石槍が２本、さらに長さが20cmほどで厚さが１cm以下の見事な大型石槍が、“隙間”として残されている。

## Data

### 大型石槍原石

- 時　代：縄文時代草創期（約13,000年前）
- 出土地：佐久市八風山Ⅵ遺跡
- 大きさ：長さ約33cm・幅約29cm・厚さ約18cm
- 用　途：大型の石槍を作り出した原石
- 特　徴：436点の資料が接合した巨大原石

# （母岩）

藤森　英二

復元された大型石槍原石（母岩１）

母岩１のうち、最も大型の石槍が存在した部分

（写真提供：佐久市教育委員会）

# 弥生時代における国内最大級の竪穴住居跡の発見

～西近津遺跡群の調査より～

長野県埋蔵文化財センター

## 遺跡の位置と調査地点（図１）

佐久市長土呂に所在する西近津遺跡群は、浅間山麓に形成された田切り地形の末端近くに位置する。遺跡は北西から南東方向に延びる丘陵上の全域にわたっており、北側は湧玉川に深く浸食され、田切り地形をとどめている。一方、南側は濁川の氾濫低地に向かって緩やかに傾斜する。

長野県埋蔵文化財センターによる発掘調査は、中部横断自動車道の建設に伴って2006年６月から開始した。初年度の調査区は、小海線の中佐都駅から市道近津中佐都線を近津神社方面（北東方向）へ約300mほど登った地点で、標高705m前後を測る。佐久市教育委員会の隣接地調査では森下遺跡と報告された地点である（佐久市教委ほか1989）。

## 長期にわたり断続的に利用された居住地

初年度調査区では、弥生時代後期の集落、古墳時代後期から平安時代後半まで継続する集落、平安時代末期から中世前半期の集落が見つかった。時期ごとに占地が多少異なっているため、遺構・遺物の認められなかった時期についても隣接地に存在していた可能性がある。また、遺構こそ見つからなかったが、縄文時代後期の土偶頭部や土器片、石器類も出土している。

今回は、その中でも弥生時代後期の集落と大型住居跡について紹介してゆくこととする。

図１　西近津遺跡群の位置

図２　調査区越しに弥生集落密集地帯（佐久平駅方面）を望む

## 弥生時代後期の遺跡密集地帯

弥生時代後期には、濁川氾濫低地を囲むように集落跡が点在している（図２）。「湯川･濁川ブロック」（小山1995）と称される遺跡密集地帯である。西近津遺跡群は、その中で北側の一画を占めることになる。

## 弥生時代後期の集落

弥生時代後期の遺構は濁川氾濫低地に向かって南面する地区に集中して発見された。現状では、南北幅100m前後(北側の詳細は来年度調査)が居住域である。

居住域の南縁にあたる市道近津中佐都線部分（森下遺跡）は、埋没した小田切りと考えられ、周防畑遺跡群との境と想定されてきた。ただし、周防畑遺跡側の調査では、弥生時代に遡る田切り地形は確認できなかった。両遺跡の弥生時代集落を隔てる自然地形は明瞭ではなかったのである。そのため、ひじょうに近接して併存した２集落か、場合によっては一体化していた可能性も考えられる。

集落の初源は弥生時代後期前半である。中期に遡る遺構・遺物は確認されていない。密集して検出された各竪穴住居では、いずれも２・３回の拡張・建て替えがあり、さらに数軒の切り合い関係が認められた。しかし、古墳時代前期に比定される住居は存在しない。

現状では、後期の中で成立し、急速に発展したのち、移転したと推定される。

## 国内最大級の竪穴住居跡

ＳＢ67と命名した竪穴住居跡は、集落の中央やや北東寄りで発見された。

平面形は長方形を呈しており、主軸はＮ11°Ｅである。検出面での規模は主軸方向が18m､短軸方向で9.5m、立ち上がりは最深部で約75cmを測る。床面積は

153㎡（46坪）に達する。弥生時代後期の佐久地域では、床面積40㎡を越えると大型住居と考えられ、後期後半に出現する50㎡を越える例は特大住居とされてきた（小山1995）。これらと比較すると、ＳＢ67がいかに巨大であるかがわかる。

特別な規模を誇るにもかかわらず、竪穴構造であり、その基本構造自体も、中･小規模の住居と変わらない。すなわち、主柱穴が４本で、南側に入口用の梯子を固定する柱穴が認められ、その脇に貯蔵穴の可能性を持つ土坑が１基配置される。炉は、北側柱穴間の北壁寄りに主炉１基、住居南西壁近くに副炉１基が配置されている、といった構造である。

一般的な住居との差異は、奥壁側中央に棟持ち柱用と思われる柱穴があること、桁行きの主柱穴間に補助柱穴があること、住居中央付近にも２基の炉が存在する点である。この２基の炉は、位置的に見ると拡張前の住居に伴っていた可能性がある。しかし、ＳＢ67の床面上に埋設土器の上端が突出しており、ＳＢ67使用時にも機能していた可能性が考えられる。

このような構造のため、補助柱穴が存在するものの、桁行き9.2mに達する間を２本の主柱で支えることになっている。その分、梁や主柱に大型の材が用いられたと見られる。主柱穴の平面形は、住居長軸に対し横長の長楕円形を呈している。平面形についても、弥生時代後期の一時期に佐久地域では一般的と言えるものである。ただし、大型柱材を設置、あるいは抜き取りやすくするため、断面形は段状になっていた。柱そのものは抜き取られたと考えられ、柱痕跡は残っていない。柱穴の最深部の形状から推定すると、柱材は横断面形が長方形に加工された五平材（宮本長二郎先生ご教示による）の可能性がある。場合によっては、加工された柱側面に彫刻や色彩が施されていたことも想定されるようである。

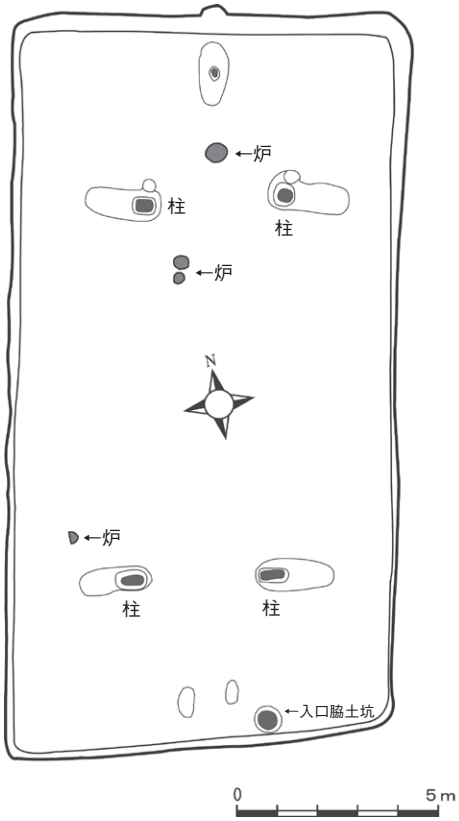


図３　大型住居ＳＢ67模式図

宮本長二郎先生のご教示によると、屋根が地面まで葺き下ろされない壁立ちの形式で、屋根は切妻と入母屋（あるいは寄棟）を複合させた形が想定でき、高さは８～９ｍに達する可能性があるとのことである。ただ大きいだけではなく、当時の高水準の建築工法を駆使していること、周辺地域からもよく見えるよう高台に建築されていることなどから、首長のイエ、あるいは祭殿が想定されるとのことである。

一方、出土遺物は意外と少なく床面などに遺棄・廃棄された土器はほとんどなかった。時期決定の指標となるのは炉に埋設された土器と、入口脇の土坑から出土した土器１点である。また、特記すべき遺物としては、覆土中から銅釧片・鉄鏃片が各１点。入口近くの床面からは、ガラス小玉１点、柱穴内から銅釧片１点、床下からは穿孔された石製品１点が出土した。

## 今後の調査

2007年度の西近津遺跡群の調査は、ＳＢ67のすぐ脇から北に向かって開始する。遺跡の乗る丘陵上を湧玉川の縁まで横断するため、集落の北側限界が明確にできると思われる。また、集落内の南北方向については、諸施設の配置が明らかにできるであろう。その段階で、あらためて集落内におけるＳＢ67の位置づけや性格も、再検討できると考えている。

## 大型住居跡の保存・活用について

当地区は、中部横断自動車道の盛土下に埋もれることとなる。長野県埋蔵文化財センターでは、このＳＢ67住居跡とそれに次ぐ大きさ（長軸14m）を持つＳＢ110住居跡について、半永久的にその形をとどめさせ、遠い将来道路下を掘るような場合にその形を明確にできることを念頭に置いて、搬入砂による埋め戻しを行った。また、工事に関する掘削を行わないよう関係機関との協議をおこなった。

一方、今後の公開方法にあたっては、数千枚におよぶ航空写真や航空測量用写真とともに、デジタルオルソ図面を作成し、詳細な記録を作成した。これを元に、将来的には図面と写真を合成し、さらに復元模型をも

組み合わせたコンピューターグラフィック、アニメーションの作成を考えている。

**主な参考文献**

小山岳夫1995「佐久の弥生時代」『佐久市志』歴史編㈠
佐久市教委ほか1989『森下』

（文責　寺内隆夫）

大型住居からの出土遺物は、３月17日㈯から５月13日㈰に県立歴史館で開催される『速報展』で展示します。また、大型住居の大きさを体感できる再現展示も行います。ぜひ足を運んでいただきご教示いただければ幸いと考えています。

図４　75人で囲んでもまだ足りない

## 続く発見！
# 佐久平の弥生時代

長野新幹線の運行開始、上信越自動車道の開通、相次ぐ大型店舗の進出、そして中部横断道の建設。私の知る10年だけでも佐久の環境は大きく変わり、また変わっていこうとしている。

生活はより便利になるが、失うものもある。しかし結果的に、考古学的な発見はこの過程でなされる場合が多い。

ここ数年に限っても、佐久平一帯の弥生時代遺跡での注目すべき発見は、枚挙に暇が無い。もともとは縄文時代を先攻していた自分にとっても、注目せずにはいられないものばかりだ。

今回西近津遺跡群で発見された弥生時代後期の大型住居址もその例の一つである。全国的な例を網羅することは出来なかったが、やはりこの時期の竪穴住居は一辺３～５ｍ程度が一般的で、一辺８ｍ（床面積で概ね60㎡）を超えれば「大型住居」と呼ぶ傾向にあるらしい。とすれば、長軸18m、短軸9.5m、床面積153㎡に達する本例は、正に国内最大級と言える。全国的にも注目される存在になるだろう。

これら大型住居址は、多くの場合、有力者の住居、共同住居などと解釈されているようだが、西近津例の場合も、今後立地や構造、出土した遺物の分析などから、集落の中での位置づけが試みられるのだろう。

佐久平一帯における弥生時代遺跡の特筆すべき発見はどのような意味を持つのだろうか。そもそも高冷地とも呼べる佐久の地で、水田稲作を主体としてどれほどの生産力を持ち得たのだろうか？農業を知らない者にとっては素朴な疑問である。

佐久全域の弥生時代研究を網羅した本会発行の『赤い土器を追う』から17年。佐久平の中心をなす佐久市域の歴史を綴った『佐久市志』からも10年が経過した。そろそろ、佐久の弥生時代を再検討した本が欲しいと思うのは贅沢だろうか。（藤森）

西一里塚遺跡から臨む浅間山
（2005. 11. 21筆者撮影）

# 「佐久系土器」と呼ばれる土器
# 主にその呼称について

藤森英二

## １佐久の縄文土器

つい先日のことであるが、御代田町で行われた「長野県考古学会平成７年度秋大会報告」の様子を記した『信濃考古』№144を、当時編集をされた桜井秀雄氏から送っていただいた。このときのテーマは「浅間山麓の縄文文化」である。当時大学生だった筆者は参加していないが、今日も重要な研究テーマとなっている問題がいくつも示されていることに気付き、今更ながら自分の不勉強さを反省している。

ところで佐久地域を代表する縄文土器を挙げろと言われると、人により答えは様々であろう。例えば御代田町川原田遺跡の焼町土器がある。焼町土器は中期中葉の佐久地域、特に浅間山山麓を中心とした地域を代表する土器となり、研究も活発に行われている。しかし中期中葉末にはほぼ姿を消し、その系譜は見いだせなくなる（寺内2004）。そしてこれよりやや遅れて、中期後葉にも地域色の強い土器が見いだされている。それが今回取り上げた、その名も通称「佐久系土器」である。

先の大会では、この土器についても話題とされていたが、特にその呼称については異論もあったようだ。一方で筆者は近年、ある報告書の中で「佐久系土器」という呼称を使っている（藤森2005）。しかし頁の制約もあり、きちんとその理由を説明していない。

ここではその呼称の問題を中心に研究を振り返り、この紙面を借りて、筆者が「佐久系土器」という呼称を使った理由につての説明を補足させて頂きたい。同時に今後の課題を記しておくこととする。

## ２研究小史と呼称

中期後葉において東信地域特有の土器があるという認識の変遷については、既に川崎保氏によってまとめられている（川崎2001）。ここでは「佐久系土器」という呼称が活字になった1990年代以降の要点を、呼称に関する点に視点を据えてまとめておきたい。

1991年百瀬忠幸氏は、佐久市吹付遺跡で出土した土器をもとに「鱗状単沈線文を地文とする佐久地方に主体的分布をみせる土器」を「佐久系土器」と仮称した。そしてその説明として「沈線による４単位の縦位懸垂文と蛇行懸垂文が施される。胎土に雲母などを多く含み、調整そのほか、加曽利Ｅ式（系）土器とは一線を画す」としている。但しこの時点では「口縁部文様帯については明らかにしえる資料を欠く」としている（百瀬1991）。

その後、御代田町滝沢遺跡や宮平遺跡の報告書でも「佐久系土器」という呼称が用いられる。綿田弘実氏は「変化の趨勢としては胴部の区画文や意匠は沈線化し、地文は縦位や綾杉状から魚鱗状、蛇行など曲線的で多様なものになり、加曽利ＥⅢ式期に盛行する「佐久系土器」へ変遷する」（綿田1997）と「佐久系土器」を加曽利ＥⅢ式に限定する。これに対し本橋恵美子氏はやや幅を持たせて、「神奈川編年」における加曽利Ｅ３式の古段階とする資料にも「佐久系土器にみられる特徴である鱗文」という表現をあてている（本橋2000）。

先に紹介した桜井氏は、自らが調査した小諸市郷土遺跡を報告する（桜井2000）。この中で縄文中期の土器をＡ～Ｈ系統に分類し、このうち「Ｈ系統」の土器を「沈線文を地文にもち、－中略－強いて言えば唐草文系土器と加曽利Ｅ式土器の折衷タイプとでも言える系統で、佐久地方に主体的に分布する」とし、百瀬氏の言う「佐久系土器」はこの中に含まれるものとしている。さらに用語にも関連させつつ「Ｈ系統土器は在地色が強く、加曽利ＥⅢ式期の「佐久系土器」をも含む土器系統である。したがってこれもまたひろく「佐久系土器」として包括することも一案かもしれないが、「佐久系土器」が加曽利Ⅲ式期の鱗状短沈線文を地文とするものとして理解されている以上、同じ用語を使用することは混乱を招きかねない」と指摘。さらに『信濃考古』№144に記されている「現段階では、「浅間山麓とはどこからどこまでの地域を指すのか」が明確でないと指摘し、したがって「佐久系土器」という言葉も再検討するべきではないか」という小林眞寿氏の意見に共鳴しつつ、「Ｈ系統土器」という便宜的な分類にとどめている。しかし「将来的には、質・量ともに良好な土器群を有する本遺跡を標識遺跡とする仮称「郷土式」が成立する可能性は十分に高い」ともしている。

佐久市（旧浅科村）の駒込遺跡を報告した川崎氏は、前述のように研究史をまとめつつ、この種の土器を分析している（川崎2001）。まずその定義を明文化し、さらに一歩進んで器形などからＡ～Ｇ類という７つの大別を行っている。また桜井氏による編年を見直しながら、時間的な変化を分析し、この種の土器が時間的にも、器形のバリエーション的にも幅を持つことを明

確にしている。「佐久系土器」という呼称については、「これが規定された吹付遺跡では加曽利Ｅ３式新相平行以前の資料が欠けていて、百瀬もこの段階に相当する資料があるとは想定していながら、現在佐久地方にある「鱗状短沈線文を地文とする土器」は一般に加曽利Ｅ３式新相平行－中略－以降の資料を差し、郷土遺跡のような加曽利Ｅ３式古・中相平行－中略－にある地文が鱗状短沈線文である土器はこれに含まれないおそれがある」と、やはり加曽利ＥⅢ式に限定している。結果的に桜井による型式認定の可能性を踏まえつつも「鱗状短沈線文土器」とこれを呼称している。

## ３筆者の見解

筆者は佐久市（旧臼田町）大奈良遺跡の土器を分析する機会を与えられた（藤森2005）。大奈良遺跡では中期後葉の土器がまとまって出土したが、加曽利Ｅ式や曽利式、唐草文系土器の中に、確実に独自性を持つ土器を見いだすことが出来た。これが「佐久系土器」あるいは「鱗状短沈線文土器」であるが、その定義を若干言葉を改めて、以下に記す。

１．口縁部文様帯は同部に比べ肉厚な傾向があり、楕円＋渦巻状の印刻風の区画がされ、内部は鱗状あるいは直線の沈線で充填される。口唇部直下は比較的広い無文部を持つ。
２．胴部は沈線または隆帯による区画を持ち、鱗状または綾杉状の沈線で充填される。
３．器形はバケツ型あるいはキャリパー型で、平口縁か四単位の波状口縁となる。

このようにその独自性は認められたが、呼称については悩まざるを得なかった。まず桜井氏の言うように型式とするには時期尚早と判断したが、その独自性は取り上げたい。ではなんと呼ぶか？一報告書として割り切って、便宜的に「○○系統」「○○類」などとするのも一つの方法であるが、明らかにこの地域に存在する土器であり、これまでに幾つかの呼び名もある以上、これを用いたかった。結果的に綿田・桜井・川崎氏とは別の考え方をとり、「佐久系土器」と仮称した。

しかし前述したように、この中では頁の制約もあり「これが現在のところ研究者で最も通りの良い呼び名である」と、いささか心情的な説明をしてしまった。これも筆者の実感であることは確かだが、それでもかまわないと判断した理由を、ここに改めて記したい。

まず「佐久系土器」という言葉を文章化した百瀬氏自身が「この佐久系土器は－中略－本期に先行する段階のものを含む良好な資料が北佐久郡望月町内の諸遺跡から出土している」とし、吹付遺跡で確認された土器以前の資料の存在に言及していることが挙げられる。この段階では「佐久系土器」を必ずしも加曽利ＥⅢ式にとどめる理由は無いように思われる。

これを認めるならば、次は実際の資料にそってどこまで拡大出来るかである。郷土遺跡や大奈良遺跡では百瀬の言った「佐久系土器」と明らかに同一の系譜にあるより古い段階の土器が多数存在し、むしろこの段階において組成中の比率が高いという点が上げられる。これは川崎も「６・７段階－筆者註：加曽利ＥⅡ式期－も加曽利Ｅ式系統の土器より鱗状短沈線文土器が組成の主体をなすことは明らか」としている部分である。本橋もやや遡って加曽利Ｅ３式古段階（概ね加曽利ＥⅡ式の中頃）の土器に「佐久系土器」という呼称を用いているのは前述の通りである。つまり確実に前段階に遡ると言えよう。

一方で「鱗状短沈線文土器」という呼称についてである。文様を差す言葉としての「鱗状短沈線」については異論なく、これが土器の特徴をなすことは事実である。しかし口縁部文様帯が同じ構成で、胴部地文は綾杉状沈線文である資料も多い。もちろん名称が100％内容と一致することなど有り得ないだろうが、当系統の土器を代表させることにはやや違和感を覚える。

これらの理由から「佐久系土器」という呼称が、現時点ではベターと判断した次第である。但し名称に「佐久」という地域名を冠した以上、実際の分布域が明らかに成ってきた際に、実態とそぐわなくなる可能性があり、これは小林氏の指摘の通りである。また「系」と言う概念が明確でない以上、曖昧な分類に留まるのも事実である。従って、「佐久系土器」を最終的な名称にしようというような意図は無い。最終的に型式として昇華出来るのか否かを踏まえつつ、今後もこの問題に取り組んでいきたい。

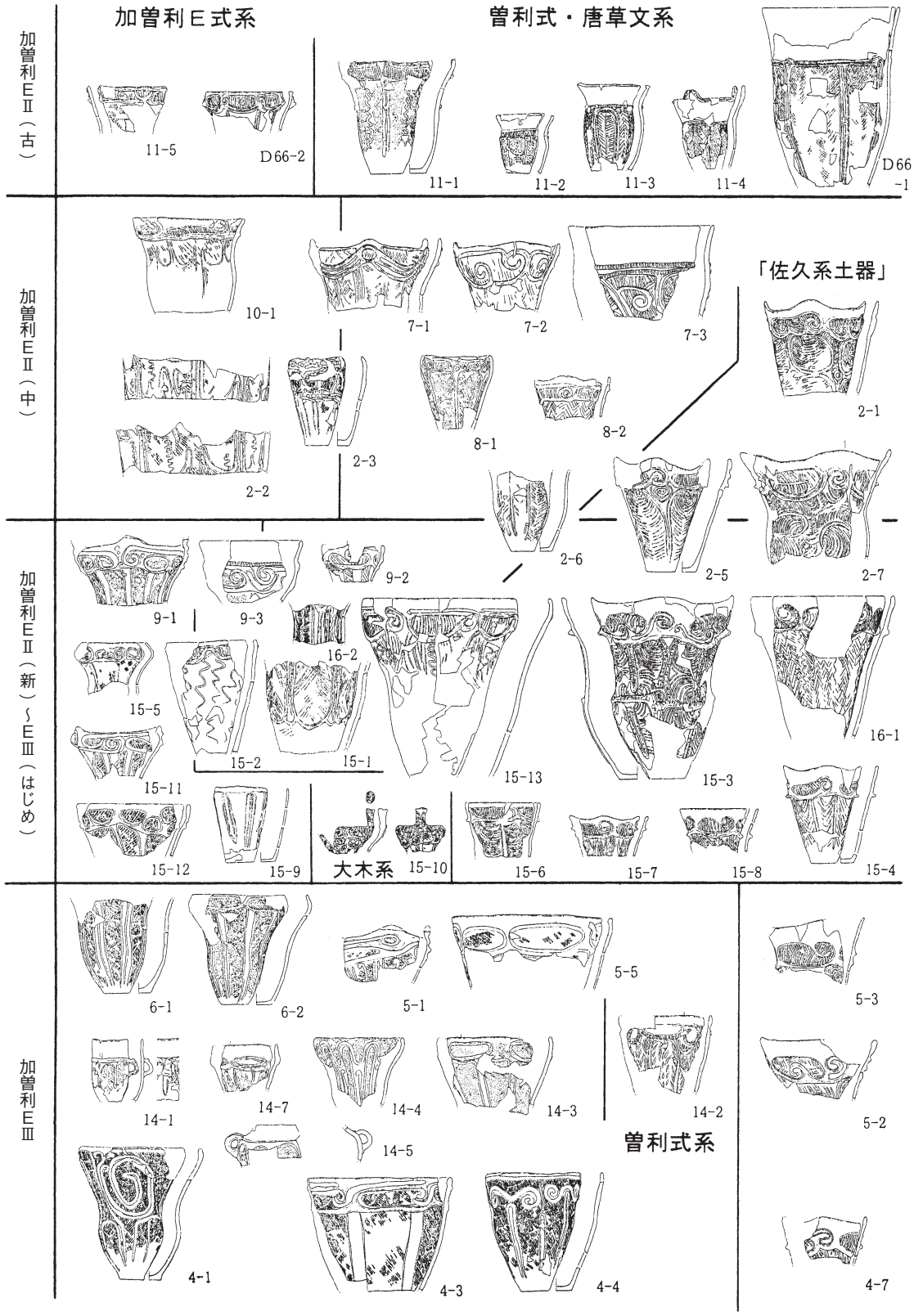
## ４今後の課題

以上のように名称に関する問題もあるが、土器そのものについての課題も当然ある。

桜井、川崎の両氏と筆者も、その変遷については加曽利Ｅ式を基本に据え、共伴関係からこれを組み立てていくという手法はほぼ共通している。しかし後発にも関わらず、筆者は大奈良遺跡での結果を他の遺跡と比較していないので、今後出来るだけ早くこれを行うつもりでいる。そのことによって、ある程度の型式的変化は浮かび上がるのではないかと目論んでいる。

また、他の土器とどのような関係を持ちながら存在したのか、とくにその出自は興味深い。現在のところ唐草文系土器が大きく関わっているという意見は多いが、より具体的な系譜の確認を行っていきたい。

そしてあるいは名称の問題とも関わってくるが、分布の問題がある。今のところ小諸市から佐久市域が中




大奈良遺跡の中期後葉土器（報告書から一部改変、番号は報告書内のNo.）

心とも思われ、南佐久郡下にはあまり見られず、川上村大深山遺跡では曽利式が主体という見解もある（島田1998）。無論隣接する上県地域での様相も検討しなければならない。

中期後葉と呼ばれる時期、すでに土器型式として認知されている曽利式や加曽利Ｅ式とは違うものとして、県内でも規模の違いはあれ「唐草文系土器」や「下伊那系土器」と呼ばれる土器群がそれぞれ展開するとされている。あるいは「佐久系土器」もそれらに比することが出来るのだろうか。しかしそもそも型式という分類枠に対し「○○系」という概念がどのように位置づけられるかが不明瞭であるにもかかわらず、これらに対し、未だに型式名が定着していないという事実は、あるいは何かを意味しているのだろうか。つまり型式とは言えないまでも、独自性をもって存在した土器群に対する分類枠が必要とされるのか。佐久の土器をもとに、さらなる検討を重ねていきたい。

**主な引用・参考文献**

百瀬忠幸1991「吹付遺跡」『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書２－佐久市内その２－』長野県埋蔵文化財センター
長野県考古学会1996『信濃考古』№144
綿田弘実1997「縄文土器について」『滝沢遺跡』御代田町教育委員会
島田恵子ほか1998『南佐久郡誌　考古編』
本橋恵美子2000「宮平遺跡の縄文土器」『宮平遺跡』御代田町教育委員会
桜井秀雄2000「郷土遺跡」『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書19－小諸市内３－』長野県埋蔵文化財センター
川崎　保2001「駒込遺跡」『県単農道整備事業（ふるさと）大野田地区埋蔵文化財発掘調査報告書－浅科村内－』長野県埋蔵文化財センター
寺内隆夫2004「千曲川流域の縄文時代中期中葉の土器」『国立歴史民俗博物館研究報告120歴史資料の多角化と総合化』
藤森英二2005「大奈良遺跡出土の縄文中期後葉土器について」『佐久市埋蔵文化財調査報告書第131集　大奈良遺跡』臼田町・佐久市教育委員会

# 平成18年度　佐久地区埋蔵文化財パトロールについて

埋蔵文化財保護委員

今年も田んぼの火もしが終わり、もうそこまで冬が迫った201×年のある日の午後。

平門さまご一行の相談が新しくなった岩村田の教育会館ロビーで始まりました。

平門さま「武さん。彦さんそろそろ時期です。出掛けましょうか。」
武さん　「平門さま、今年はどちらにまいりましょうか。」
平門さま「そうよな～。去年は北の大諸藩に出向いたが、なにやら城の普請で忙しく、相手にしてもらえなかった。せっかく綺麗になった大手門と紅葉の写真を特別アングルから撮ろうと考えていましたのに。」
彦さん　「そうでした。全く失礼な藩でした。先の将軍平門さまがわざわざ世直しのパトロールに見えられたと云うに、勝手に街道筋を回って欲しいと云われるしまつ。」
武さん　「まあ・まあ、仕方がないではないか。我々団塊の世代の大量退職で、今のお役人はホントに忙しいんだよ。」
彦さん　「あまーい。我々が現役のころは例え火の中・水の中、一日24時間働いて、３日はまとめて休んだものだ。１日目は温泉、次の日はゴルフ・・・」
平門さま「どうでもイイから、今年は何処へ写真を撮りに行くんです。」
武さん　「平門さま、写真ではなくパトロールです。」
平門さま「わかっています。そちは若い時から硬すぎます。もっと彦さんを見習わんと行けません。」
彦さん　「最近80が切れなくてコースが悪かったかな。でもあそこのキャデーは可愛かったな。年の頃なら四十路か五十路、目元ぱっちり」
平門さま「キャデーでなくてモデルです。やっぱりモデルはちょっと目を伏せてくれんと、私はシャッターを押せません。」
武さん　「それを云うなら、十八か十九です。若い子がやっぱり一番です。」

---

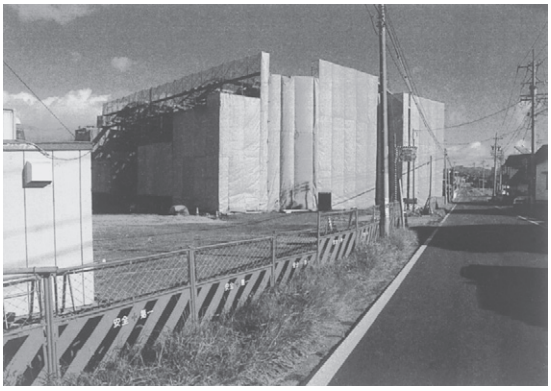
『佐久地区を知り尽くした
　　社会経験豊かな方々が集い、
　　埋蔵文化財パトロールをして頂く』

ここ６年、県埋蔵文化財保護委員として佐久地区の埋文パトロールに携わりながら、「こんなパトロールが出来たら実りあるものになるだろうな」と考えたのか先のささやかな夢です。

昨今の《官から民へ》という大きな社会情勢の流れから、今後の行政が関わる埋蔵文化財の仕事内容というものは大きく姿を変えていくようです。その様な状況にあって長野県考古学会や佐久考古学会が果たす役割の中で「官・民両方の仕事のチェックをする。また保護について意見を言っていく。」という部分は本当に重要であり、また学会でしか出来ないことのように考えます。会の中でこれらの事が出来るのは先に触れた今後一線を退いた方々とも思います。大部話が逸れましたが「パトロール」を通して最近感じたことを書き綴ってみました。なお、本題の今年度のパトロール結果は以下の通りです。

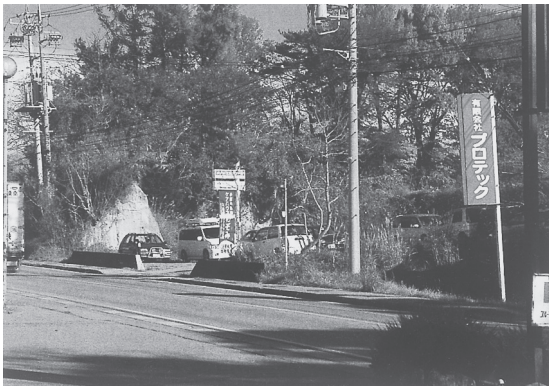
今回は18年11月12日に立科町と小諸市のパトロールを行いました。全体に山間部においては開発が少ないこともあり、遺跡は良好な形で保存されているようですが、国道等の主要道路の周辺は再開発も含めて活発な経済活動があり、一部には遺跡保存に疑問的な部分も見受けられました。また、行政界によって同一遺跡でありながら遺跡範囲の矛盾が生じているところなどはパトロール結果として報告し、担当の行政機関で対応してもらおうと考えています。

今年で６年かかって川上村を皮切りにはじまった埋文パトロールも佐久平を一巡しました。19年度の方向性は学会総会にて決めて頂くとして、先の夢は「ささやか」と言うよりは「儚い」夢と言うべきでしょうか。でも、やはり201×年の実現を期待します。

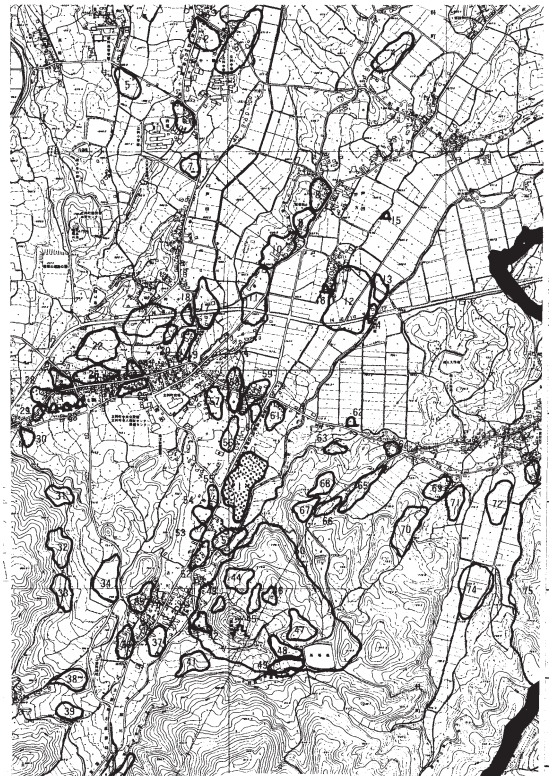


小諸市谷地原遺跡

小諸市谷地原遺跡




小諸市和田原遺跡



立科町遺跡地図

## シリーズ講座「日本人の起源を探る」フォーラム「古代文化の来た道」が開催される

昨年度に引き続き、18年度も佐久考古学会では浅間縄文ミュージアムとの共催で、シリーズ講座を開催しました。今回は「日本人の起源を探る」と題して４回の講座となりました。

５月14日㈰の堤　隆会員による『日本人の起源を探る』から講座はスタートし、第２回は６月11日㈰の小山岳夫会員による『弥生文化の来た道』、総会での例会も兼ねた７月１日㈯の水澤教子会員による『縄文人の来た道』が第３回となり、８月12日㈯の最終回を上田市教育委員会の尾見智志氏と私の２名による『東山道を探る』でしめくくりました。尾見氏には上田市小泉条里遺跡で発見された幅12mもの東山道の道路跡の紹介を中心に古代道路のお話してもらいました。各回とも50名程の参加をいただき、毎回質問（なかにはすごい難問も！）も活発に出されたりして、なごやかな雰囲気で進めることができました。また連続して参加される方も少なくなく、主催者としてうれしい限りでした。

そしてこのシリーズ講座を受けて、９月３日㈰には、講師５名をパネラーとしたフォーラム「古代文化の来た道」を開催しました。当日は約60名の聴衆者を前に、講座でもとりあげた「道」をキーワードに、各時代の様々な流通や交流・交通などの様子をスライドも交えた報告を行ないましたが、原始古代の佐久もあらゆる面で、日本列島はもとより大陸とも何らかのつながりがみられるということを再認識できたのではないでしょうか。また司会も務められた堤さんの絶妙なつっこみにパネラーも大いに乗ってしまい、予定時間を少しオーバーしましたが、皆さん熱心に耳を傾けていただき、無事に終了することができました。

地域に発信していくこうした催しは、今後もぜひ続けていきたいと思います。　（事務局長　桜井秀雄）

## 縄文笛コンサート「5000年前の調べ」 By 縄文笛毅さん

縄文の笛の音、皆さん聞いたことありますか？　去る２月21日㈰、御代田町浅間縄文ミュージアムと佐久考古学会の共催により「縄文笛コンサート“5000年前の調べ”」が開催されました。演奏者はプロのミュージシャンで、その名も正に縄文笛毅さんです（もちろんアーティスト名ですよ）。

毅さんは、大学までフルートを学んでおられましたが、ふとしたきっかけで土笛の音に魅せられ、これを「縄文笛」と名付けます。以後、路上演奏や各地のコンサートを行い、県内でも井戸尻遺跡や森将軍塚古墳などで演奏されています。現在は主に縄文時代晩期の東日本に見られる亀形土製品が「縄文笛」のモデルで、毅さんはこれを笛と解釈されているというわけです。

当日は、予定していた会議室からミュージアム展示室での演奏に急遽変更でしたが、薄暗い照明と復元された縄文人や住居の傍らでの演奏は雰囲気バッチリでした。この日は縄文笛ばかりでなく、中国の笛やフルート、他にも木の実や巻貝、そして浅間山麓の遺跡から出土した縄文時代の土製品でも音を奏でてくれました。曲の合間には楽しいトークを披露して下さり、思わず笑みもこぼれます。約70名の参加者は、幻想的な音楽とともに遥か縄文時代の夢を垣間見ました。

（事務局　藤森）

「縄文笛」を吹く縄文笛毅さん。

### ♪　編集後記　♪

暖冬だった。標高1200mの我が家でもはっきりと分かる暖冬だった。以前はこの地球規模の気温上昇も、その原因が何であるかは特定出来ないという慎重な見解も聞いた。しかし、どうも産業革命以降の人類の様々な活動が、その主たる原因であるというデータが出てきているようだ。だからといって「理想の縄文社会」とか、「エコロジーな弥生の生活」などという短絡的なキャッチコピーはどうかとは思うが、それでも参考になる点はあるかも知れない。考古学の新しい存在価値を築けるだろうか。（藤森）

**佐久考古通信　№98**

発行所　佐　久　考　古　学　会

〒384-0091 小諸市御影新田1945-6
桜井　秀雄　方
郵便振替　00570-9-2842
☎ 0267 (22) 8536

発行者　藤　沢　平　治
編集者　藤　森　英　二
印刷所　ほおずき書籍㈱

佐久考古学会
シンボルマーク